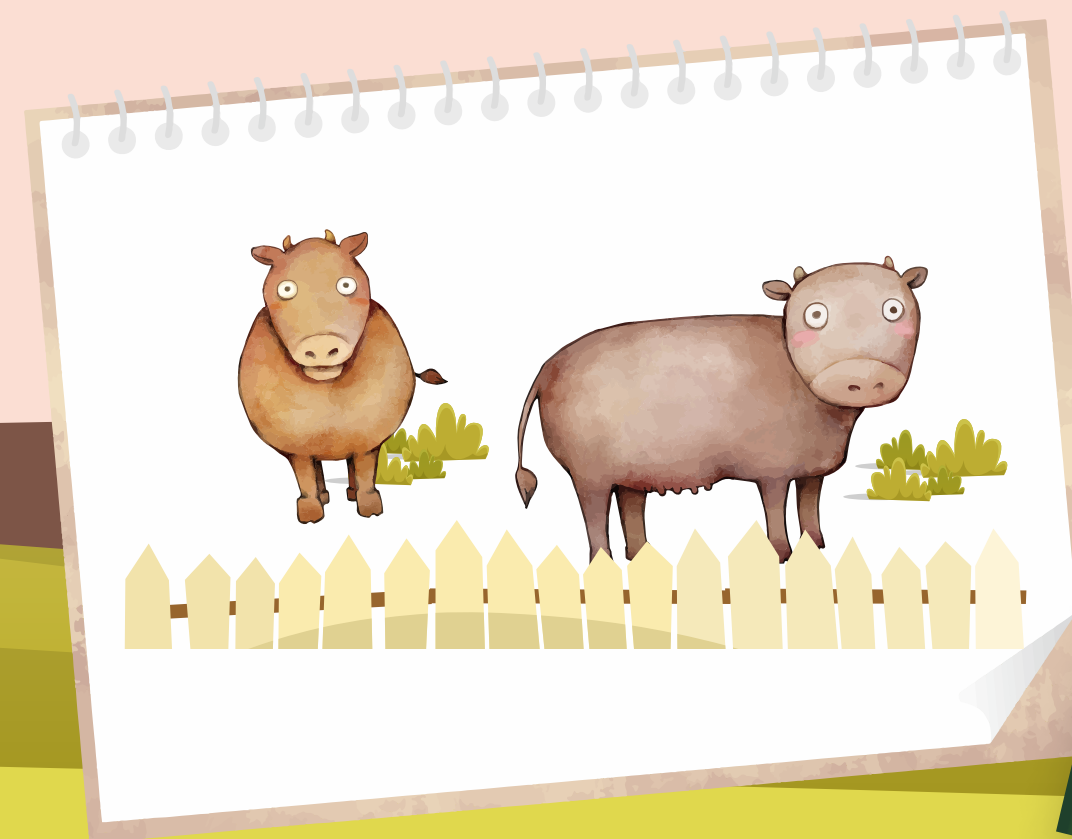




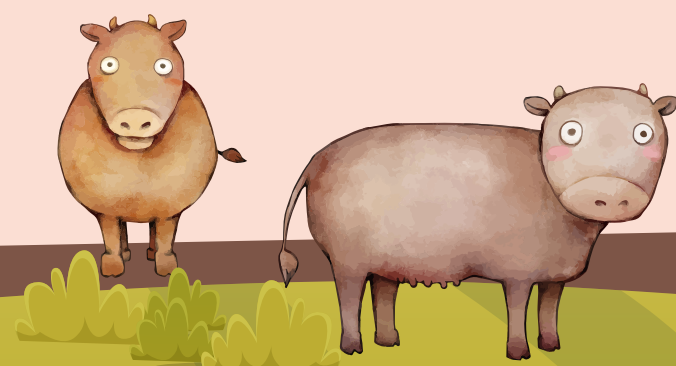
日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

畜産ティーン 育成プロジェクト

事業報告書



日本中央競馬会 令和6年度畜産振興事業 畜産ティーン育成プロジェクト



公益社団法人 国際農業者交流協会

日本の畜産をもっと元気に！



私たちが学んだオーストラリアの畜産業
現地で得た学びや考えをヒントに
日本の畜産をもっと元気にする！



1	はじめに	1
2	プロジェクトについて	2
	プロジェクトの目的	2
	畜産ティーン育成プロジェクトの1年	3
	参加者一覧	5
	事前研修	6
	海外研修	7
	研修成果報告会	7
3	写真でたどるオーストラリア研修	9
4	畜産アンバサダー活動の報告	15
5	畜産業に関する参加者への意識調査	21
6	参加者の報告	27
	畜産アンバサダー 20名	27
	メンター 只埜 昌幸	67
	メンター 戸塚 蒼依	69
	引率教員 吉永 憲生	71
	引率教員 石井 樹一朗	73
7	未来の畜産業に対するアイデア	76

1 はじめに

公益社団法人 国際農業者交流協会
会 長 五月女 昌巳



公益社団法人 国際農業者交流協会（The Japan Agricultural Exchange Council、略称 JAEC）は、昭和 63 年に設立された専門機関であり、海外において先進農業技術や経営を実務的に学ぶプログラムを提供しています。前身団体からの累積で、これまでに 15,000 名を超える日本の若者が海外に渡り、言語や文化、生活環境の違いを乗り越えて先進農業を学ぶことができました。研修を通じて得た知識と経験を活かし、国内の中核農業者として活躍するだけでなく、農業関連企業や国際協力の分野で広く貢献しています。

また、JAEC では ASEAN 諸国やヨーロッパの農業青年を日本の農家で実務研修できる受入事業、研修修了者向けの研究会やセミナーの実施なども行っています。これらの事業は、長年にわたる海外の政府機関や関係団体との協力と信頼関係に支えられ、その質と研修効果の高さは国内外で高く評価されています。畜産ティーン育成プロジェクトは、JRA 日本中央競馬会の助成により実施されているもので、若年層の畜産業への関心を高めることを目的としています。特に、海外研修を通じた学びを重視し、参加者が自身の学びを発信する機会を持つことを重要視しています。つまり、インプットとアウトプットを組み合わせた実践的なプログラムとなっています。

近年、畜産生産に関わる資材費の高騰が農業経済に大きな影響を及ぼしており、業界にとって課題となっています。そのような状況の中でも、未来の担い手となる若者たちが意

欲を持ち、畜産業界を盛り上げていくことが重要です。本プロジェクトでは、若い世代が実際の現場を体験し、畜産の魅力や可能性を発見する機会を提供しています。

本年度のプロジェクトでは、オーストラリアでの研修を実施し、高校生たちは現地の畜産業や農業技術を実際に体験しました。農場視察やファームステイを通じて、畜産業の現場を肌で感じるとともに、現地の高校で農業授業や実習を受け、同世代の学生との交流も行いました。これらの貴重な経験を通じて、参加者は大きく成長し、自らの将来について深く考える機会となりました。

研修を終えた高校生たちは、畜産業の魅力を伝える「畜産アンバサダー」として活動し、その経験や学びを多くの人に発信しました。彼らの言葉は、多くの人々の心を惹きつけ、畜産業の未来に対する希望を生み出す力となりました。将来、日本の農業を担う若者たちの今後の活躍を心から願っております。

最後に、本プロジェクトの実施にあたり、ご指導・ご支援・ご協力を賜りましたすべての皆様に心より感謝申し上げます。引き続き、当協会の事業へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2 プロジェクトについて

◎ プロジェクトの目的 ◎

畜産ティーン育成プロジェクトとは

JRA 日本中央競馬会の令和 6 年度畜産振興事業の一環として実施される「畜産ティーン育成プロジェクト」は、全国から畜産業を志す高校生 20 名が参加し、2024 年夏にオーストラリア・クイーンズランド州テーブルランドで研修を行いました。本プロジェクトは、畜産業に関心を持つ若者の育成を目的とし、海外研修と帰国後の啓発活動を組み合わせた取り組みです。

研修の舞台：

オーストラリア・テーブルランド

オーストラリアのクイーンズランド州は、日本の約 5 倍の面積を誇る農業大国です。研修地となったテーブルランドは、標高差による多様な気候や豊富な水資源を活かした畜産が盛んな地域であり、参加高校生は現地の農場での実習や視察を通じて、最前線の畜産業を学びました。

特に、高校生たちは以下の点に注目して学びを深めました。

- 大規模な肉牛農場の経営や労働環境
 - アニマルウェルフェアに対する考え方
 - 現地農場主との対話を通じた畜産業の実情
- 研修中、高校生たちはテーブルランドの酪農家やセールヤードの視察をしたのみならず、ドライエリアにある大規模な肉牛農家を訪れ、農場主に多くの質問を投げかけながら、畜産業の現場について理解を深めました。また、帰国後の発表に向けて、毎晩グループで何時間も議論を重ねました。意見の食い違いから

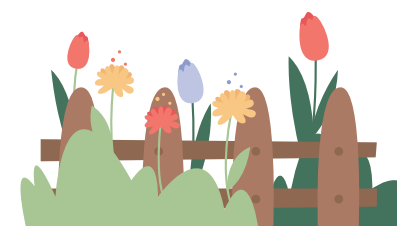
言い合うこともあれば、自分たちの考えがまとまらず苦労する場面もありましたが、その過程を乗り越え、最終的には素晴らしいプレゼンテーションを完成させることができました。

畜産アンバサダー活動

研修を終えた高校生たちは、「畜産アンバサダー」として、自身の学校や地域で畜産の魅力を伝える活動を行いました。各学校での体験発表会や、国際化対応営農研究会での発表を通じて、堂々と学びを共有しました。研修で得た知識や経験をもとに、日本の畜産の未来について考えを深め、それを発信することで、より多くの人に畜産業の魅力を伝えることができました。

未来の畜産へのアイデア

高校生たちは研修を通じて得た知識を活かし、未来の畜産業に向けた提案を考えました。それぞれが学んだことをもとに、日本の畜産に必要な変革や可能性について考察し、自身の視点で意見をまとめました。そして、実際に人前で畜産アンバサダー発表を行い、たくさんの方々に畜産の魅力、自分の考える未来の畜産業について伝えることができました。



◎ 畜産ティーン育成プロジェクトの1年 ◎

①推進委員会
(5月10日)

準備

②事前調査 (5月12日～16日)

- ・訪問農場
- ・関連施設の視察

②事前調査

プロジェクトの核となる海外研修を実施するため、オーストラリアのクイーンズランド州北部地域周辺を訪問し、調査を行いました。

③プロジェクト参加者募集
(4月26日～5月21日)

④プロジェクト参加者選抜
(5月下旬)

- ・書類審査
- ・オンライン面談

③④プロジェクト参加者募集と選抜
全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場協会、日本学校農業クラブ連盟にプロジェクト周知のご協力をいただき、全国の高等学校から応募がありました。
書類審査、オンライン面談により、プロジェクト参加者を選抜しました。

①推進委員会
(6月14日)

研修

オンライン

⑤事前研修 (6月10日～14日)

- ・オリエンテーション
- ・畜産業有識者からの講義
- ・グループディスカッション
- ・テーマとキーワード選択

⑥渡航前研修 (7月22日)

- ・クイーンズランド州政府駐日事務所からの講義
- ・渡航前のオリエンテーション

オーストラリア

⑦海外研修 (8月3日～12日)

- ・8月3日に都内へ集合し8月4日に出発
- ・テーマとキーワードに沿って研修
- ・農業視察
- ・畜産業従事者へのインタビュー
- ・マランダ高校での農業実習や授業
- ・マランダ高校の生徒との交流
- ・ファームステイ

東京

⑧研修成果報告会 (8月14日)

- ・8月12日に帰国、8月13日は発表準備
- ・研修の成果を社会に発信
- ・畜産アンバサダー活動のキックオフ

①推進委員会
(8月14日)

①推進委員会 ⑨成果評価委員会

プロジェクトを客観的、意欲的、専門的に運営し評価するため、外部の専門家4名及びメンター2名による委員会を開催しました。

⑨成果評価委員会
(3月14日)

畜産アンバサダー活動 (8月～翌年3月)



パンフレット、
報告書にまとめ
広く配布

Instagram、X(旧 Twitter)、
TikTok などの SNS、
ホームページにて広く発信



未来の畜産へのアイデア

学んだことを
ふまえた
自分の意見

畜産業の魅力・若者の活躍促進

若者たちを鼓舞

- ・高校生
- ・畜産を目指す若者
- ・中学生・小学生など

所属高校を中心とした
発表会や農業イベント
で畜産業の魅力を発信

農畜産業界に 広く PR

- ・農家
- ・農畜産関連企業
- ・農畜産団体
- ・メディア

就農者の増加

農畜産業界の活性化

◎ 参加者一覧 ◎

● 畜産アンバサダー（高等学校生徒）

	姓	名	所属学校	学科	学年
1	田澤	未季	北海道岩見沢農業高等学校	畜産科学科	2年
2	多田	有輝	北海道帯広農業高等学校	酪農科学科	3年
3	久慈	渚紗	岩手県立盛岡農業高等学校	動物科学科	3年
4	星	碧虎	宮城県農業高等学校	農業科	3年
5	高橋	智星	秋田県立金足農業高等学校	生物資源科	2年
6	岡崎	彩女	栃木県立那須拓陽高等学校	農業経営科	3年
7	長谷川	真央	千葉県立大網高等学校	農業科	3年
8	田木	希実	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	2年
9	阿部	未悠	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	3年
10	橋内	晟	長野県佐久平総合技術高等学校	食料マネジメント科	3年
11	熊倉	花	静岡県立田方農業高等学校	動物科学科	3年
12	福田	愛	岐阜県立岐阜農林高等学校	動物科学科	3年
13	甲斐	柚花	大阪府立農芸高等学校	資源動物科	2年
14	嶋本	珠琴	鳥取県立倉吉農業高等学校	農業学科生物科	3年
15	白土	陽麻	広島県立世羅高等学校	農業経営科	2年
16	佐熊	安莉	福岡県立糸島農業高等学校	動植物活用科	3年
17	宮田	凧沙	長崎県立諫早農業高等学校	動物科学科	3年
18	田中	優羽	熊本県立菊池農業高等学校	畜産科学科	2年
19	石山	弘樹	宮崎県立高鍋農業高等学校	畜産科学科	3年
20	田盛	悠祐	沖縄県立八重山農林高等学校	フードプロデュース科	3年

● 海外研修引率教員 熊本県立熊本農業高等学校 教諭 吉永 憲生
群馬県立勢多農林高等学校 教諭 石井 樹一郎

● 推進委員 本事業が目的達成のためにしっかりと正しく運営されているかを評価するため、推進委員として事業運営のアドバイスをいただきました。

横田 祥 農業生産法人（有）横田農場 / AGRI BATON PROJECT 代表
青山 浩子 新潟食料農業大学 食料産業学部 教授
遠藤 友治 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程調査官
星 知希 農林水産省 経営局 就農・女性課 農業教育グループ

● メンター 海外農業研修経験者のお二人にメンターとして参加していただきました。

只埜 昌幸 帯広畜産大学大学院博士前期課程 1年
平成 4 年度オーストラリア研修参加

戸塚 蒼依 戸塚楽農
平成 30 年度未来の畜産女子育成プロジェクト参加

海外研修を実施したオーストラリアには、畜産アンバサダー 20 名、引率教員 2 名、メンター 2 名、本会職員 2 名の計 26 名が渡航しました。

◎ 事前研修 ◎

⑤ 事前研修 6 月 10 日～ 14 日

効果的な海外研修を実現するため、プロジェクト参加者に対して、プロジェクトの意義や目的、心構えを学び、日本の畜産業への理解を深めるための準備として、グループワークを交えた 5 日間のオンライン研修を実施しました。



みんなで一緒に
牛のポーズ

日次	月 日	曜日	内 容
1	6 月 10 日	月	・プロジェクト説明・参加者自己紹介・グループワーク プロジェクトの意義や目的、スケジュールなどを説明しました。 20 名の高校生たちが、元気いっぱい自己紹介しました。 4 つのチームに分かれて、オーストラリアで学びたいこと 3 つ考えてもらいました。
2	6 月 11 日	火	・日本の酪農について・グループワーク 尚綱大学 現代文化学部 光成有香先生より日本の酪農について講義いただきました。
3	6 月 12 日	水	・メンターのお話し・グループワーク メンターであり令和 4 年度オーストラリア農業研修の OB でもある只埜昌幸さんよりオーストラリアでの経験、今後の展望について講義いただきました。
4	6 月 13 日	木	オーストラリアの肉牛の運営 ・日本の食肉の流通概要・グループワーク 日本ハム（株）大阪チルドビーフ科の大森秀樹様より肉牛の運営、日本の食肉の流通概要に関して講義いただきました。
5	6 月 14 日	金	・事業推進委員挨拶・メンターのお話し・現地研修までの準備 事業推進委員先生方より応援のメッセージをいただきました。 メンターであり平成 30 年度未来の畜産女子育成プロジェクトの OG でもある戸塚蒼依さんに研修当時の経験、自身の農場の運営について講義いただきました。

⑥ 渡航前研修 7 月 22 日

クイーンズランド州政府駐日事務所の石田まなつ様より、クイーンズランド州の農業事情、滞在中の安全や治安のこと、現地で使える英語フレーズをお話いただきました。また、海外研修に向けた最終オリエンテーションを行いました。

◎ 海外研修 ◎

⑦海外研修 8月5日～12日

高校生の夏休みを活用して、クイーンズランド州北部のテーブルランドで海外研修を行いました。プロジェクトのコーディネートは Banora International Group に依頼し、農畜産業の視察や畜産農家へのインタビューを通じて、現地の状況を学びました。滞在中には、マランダ高校を訪れて、畜産を学ぶ同年代の学生たちとの農業授業や実習を通じて交流の機会を得ることができました。週末にはファームステイを体験し、異国の生活や文化が畜産業に与える影響について理解を深め、オーストラリアの農家のライフスタイルに触れることで、国際的な視野を広げることができました。



◎ 研修成果報告会 ◎

海外研修～帰国時研修成果報告会 日程

日次	月日（曜日）	時間	内 容
1	8月3日（土）	15：00	チサンホテル蒲田 集合 出発前オリエンテーション ・自己紹介 ・現地のスケジュール共有 ・グループごとに発表用プレゼンテーション準備
2	8月4日（日）	09：00 17：00 20：05	プレゼンテーション準備 成田国際空港 到着 成田国際空港 出発 ジェットスター航空 JQ26 便（NRT → CNS）
3	8月5日（月）	04：25 07：30 10：30 14：00 16：30	ケアンズ国際空港 到着 農業視察① Byrnes Quality Meats（食品加工施設を備えた小売肉屋） 農業視察② Mungalli Creek Dairy（酪農家） 農業視察③ Platypus Creek（畜産牛農家） 宿泊施設 Quinola Lakes に滞在
4	8月6日（火）	08：00 15：00 17：00	農業視察④ Mareeba Saleyards（肉牛のせり市場） 農業視察⑤ Eachamvale Stud（酪農家） 宿泊施設 Quinola Lakes に滞在
5	8月7日（水）	11：30 17：00	農業実習⑥ Jonsson's Farm（大規模畜産牛 / 野菜農家） 宿泊施設 Quinola Lakes に滞在
6	8月8日（木）	08：45 15：30 17：00	マランダ高校にて農業実習＋生徒との交流） ・学内の農場について紹介 ・日本紹介プレゼンテーション① 施設見学⑦ Bega Milk Factory（乳・食品会社） 宿泊施設 Quinola Lakes に滞在
7	8月9日（金）	08：45 15：30	マランダ高校にて農業実習＋生徒との交流② ・牛の妊娠鑑定と直腸検査体験、除角見学 ・日本紹介プレゼンテーション② ・ホストファミリーと面会、それぞれのファームステイ先へ移動

日次	月日（曜日）	時間	内 容
8	8月10日（土）		ファームステイ 引率者による受入農家巡回訪問を実施
9	8月11日（日）	12：00 15：00	Mareeba Heritage Centre にて Graduation Ceremony Cairns へ移動 YHA Cairns Central にて 研修の取りまとめ
10	8月12日（月）	08：30 12：00 18：30 19：30 20：45	ケアンズ国際空港到着 ～ チェックイン ケアンズ国際空港出発 ジェットスター航空 JQ25 便 成田国際空港到着 チャーターバスにて蒲田へ移動 チサンホテル蒲田到着
11	8月13日（火）	09：00 終日	意識調査アンケート 2 回目 研修の取りまとめ 成果報告会プレゼンテーション準備
12	8月14日（水）	08：30 10：00 12：30	最終発表リハーサル 研修成果報告会 報告会終了後 解散

⑧研修成果報告会 8月14日（水）10時～正午
プラザ・アペア（東京都大田区西蒲田）

帰国後すぐに、研修成果を広く伝えていくために、事業関係者や農畜産業関係者、メディアを招待し、成果報告会を開催しました。5名1組のグループがそれぞれのテーマについてプレゼンテーションを行い、最後に海外研修引率教員の石井樹一朗先生、吉永憲生先生の2名に総括をしていただきました。研修を通じて、日本の畜産業が抱える課題、既存の方法に対するより良い改善策を見出し、高校生ならではの視点で新たな発見を得ることができました。また、畜産アンバサダー活動の第一歩として、自分の言葉で発信することができました。



【発表グループ】

1. 畜産でアイデアを生かしたい
久慈渚紗、星碧虎、阿部未悠、嶋本珠琴、石山弘樹
2. 若者が描く未来の畜産
田澤未季、長谷川真央、橘内晟、福田愛、宮田凧沙
3. 誰もが喜ぶ畜産業
岡崎彩女、高橋智星、熊倉花、佐熊安莉、田盛悠祐
4. 私が働きたい畜産農家
多田有輝、田木希実、甲斐柚花、白土陽麻、田中優羽

日本の畜産を
もっと元気に

3 写真でたどるオーストラリア研修

DAY 1 & 2



出発前に蒲田に集合！
自己紹介、グループごと
に現地で行うプレゼン
テーション準備を行いました。



今回初めて海外に行く生徒も。。！
飛行機に乗ること約7時間、ケアンズに到着です。

DAY 3



最初の視察先 Byrnes Quality Meats に到着



店内では日本ではなかなかお目にかかれな
いカンガルーやウサギのお肉の販売も！



内部の食肉加工施設
も見学させていただきました！



農場の Dan さん
通訳のあけみさん



次の目的地は Mungalli Creek Dairy バイオ
ダイナミック農法についてお話を伺い、実際
に工場の中を見学させていただきました。



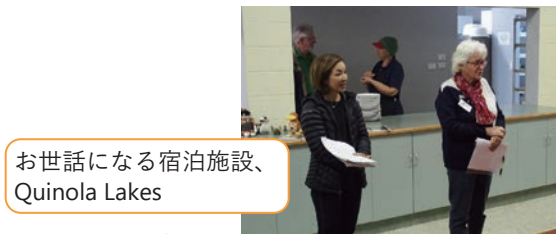
農場特製のチーズ
やアイスクリーム
を試食させていただきました！



続いて Platypus Creek に移動
畜産農家の Dave さんにお話を伺いました。
220 エーカーもある農場を一人で管理しているそうです。



熱心にメモを取る
アンバサダーたち



お世話になる宿泊施設、
Quinola Lakes



優しい Polly さんに
施設のルールや使用
方法についてお話
いただきました。

DAY 4



朝一で Mareeba Saleyards へ向かい
せりの様子を見学しました。
市場では暑さに強く免疫力の高い
ブラーマン種が多くみられました。



女性の更なる畜産市場への活躍を応援したいと話す
Tanya さんに市場の案内をしていただきました。



みんなで畜産 LOVE のポーズ



Eachamvale Stud / Dairy へ
67 ヘクタールの土地で約 200 頭以上の乳牛を家族経営にて飼育し
ています。農場主の Bronwyn さんに農場内を案内してもらいました。



実際にパーラーの
中を見学させてもらいました。

搾乳の時間になると放牧をされていた牛たちが自然と
パーラーに戻ってきます。



あっとゆうまに牛まみれです



搾乳を体験させてもらいました。



犬もこっそり。。



宿泊施設に戻って敷地内を探検。
カモノハシのまねっこ



夜は農場見学で学んだことをまとめ
発表準備を進めます。

DAY 5

Jonsson's Farm へいざ！の前に Warren さん Gail さんから Farm の生産から流通、運営に関して事前にお話を伺うことが出来ました。



4000 頭以上の牛を飼育しています。

Jonsson's Farm では Dean さん、Emma さん、Will 君、Colby 君に案内をしてもらいました。64000 エーカーも敷地があるというから圧巻です。



ホームスクーリングにより教育を受けている Will 君と Colby 君、生徒は彼ら 2 人！広大な自然の中で暮らすのは楽しいとのこと。



Jonsson 家の飼犬の名前は Kubota

Dean さんからボタンタッチして Will 君が農場の数々のトラクターに関して教えてくれました。



DAY 6

2 日間 Maranda 高校に通います。David 先生の農業の授業、現地の学生と交流しました。

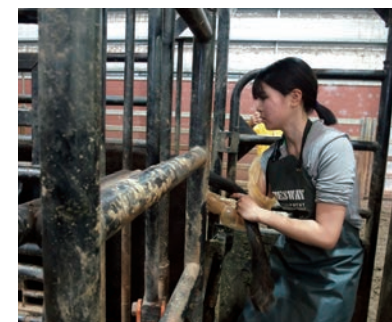


グループごとに日本に関して英語でプレゼンテーションを行いました。



David 先生に校内を案内してもらいます。

両手にオーストラリアロープ



獣医師の指導のもと、直腸検査を体験させてもらいました。



牛の体重測定を体験させてもらいます。



放課後には Bega Milk Factory へ！工場の中を見学しました。



工場で作られたコーヒ牛乳をいただきました。



宿泊施設で過ごす最後の日。毎日暖かく気遣ってくれた Polly 夫妻、有難うございました！

DAY 7



生憎の雨でしたがマランダ高校の放牧場で授業をしました。

マランダ高校ともお別れです。最後はお別れ会を催してくださいました。Ben Harding 副校長よりプログラムへの参加証明書を頂戴しました！



お世話になった David 先生と記念撮影

DAY 8



ファームステイ先で過ごす週末

週末のみでしたが、ファームステイを経験することでオーストラリアの生活や文化に触れることが出来ました。英語でのコミュニケーションもよく頑張りました！



DAY 9

TableLand での研修もいよいよ最終日。
Mareeba Heritage Museum で研修修了式を行います。



Lenore Wyatt 副市長も駆けつけてくださりメッセージとともに一人一人修了証明書を受取りました！

グループを代表して多田有輝さんが英語で感謝の気持ちをスピーチしました。



さて、帰国後の成果報告会に向けて最後の仕上げです。



プロジェクトリーダーの皆戸顕彦からも御礼のスピーチを！



ホストファミリーとお別れした後、5日目に訪問した Jonsson's Farm の市場へ立ち寄ることが出来ました。

DAY 10 & 11

帰国後、研修とりまとめと報告会の準備です。明日はいよいよ成果報告会！



DAY 12

成果報告会当日です！



あと少しで開始です。



念入りにリハーサルをします。



開始前に一人ずつ気合いをひとつ



5名1組のグループがそれぞれ15分間のプレゼンテーションを行いました。

グループ4
私が働きたい畜産農家



グループ2
若者が描く未来の畜産



グループ3
誰もが喜ぶ畜産業



グループ1
畜産でアイデアを生かしたい



最後は吉永憲生先生、石井樹一郎先生に総括していただきました。オンライン研修から現地研修に至るまで全体を大いにサポートしていただき有難うございました。



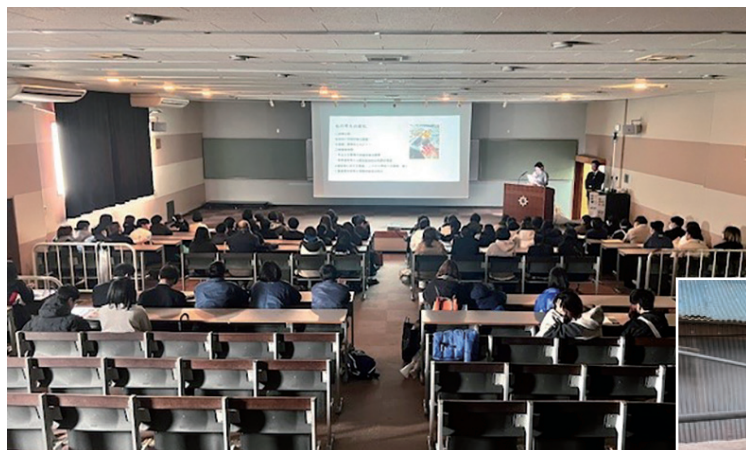
成果報告会に向けて各グループの発表準備に大活躍してくれたメンターの戸塚さん、メンターの只埜さん有難うございました！



無事に成果報告会終了、皆さんお疲れ様でした。また会える日を楽しみにしています。

4 畜産アンバサダー活動の報告

畜産ティーン育成プロジェクトでは、参加者が得た知識を自分自身の考えとして深め、畜産に対する情熱を外部に伝えることが求められています。畜産業の魅力を広めるために、発表やイベントへの参加などを通じて畜産に対する理解を広める役割を担う青年たちは「畜産アンバサダー」として、そのPR活動を積極的に実施しています。



オーストラリアの畜産から得た学びをもとに、今後の日本の畜産をより良くするためにできることを考えました。畜産の魅力を広めるために、所属する高等学校での研修報告会や地域のイベントにおいて、畜産業の魅力や担い手の確保、次世代畜産業の重要性をテーマに研修成果を積極的に発信しました。学校内では、同級生や後輩に向けて、また学校祭などのイベントでは、新たに入

学する中学生や来校者に自分の思いを伝えました。その他にも、小学校や地元のスーパーなど、さまざまな場所で活動を行いました。加えて、SNSやメディアを通じて、広範囲にわたって畜産アンバサダーとしての活動を発信したメンバーもいます。畜産アンバサダー活動では、参加者にアンケートを実施し、発表を聞いた後の感想や、畜産に対する意識の変化を調査しました。

◆畜産アンバサダー実施期間

2024年8月下旬～2025年3月上旬

◆実施回数

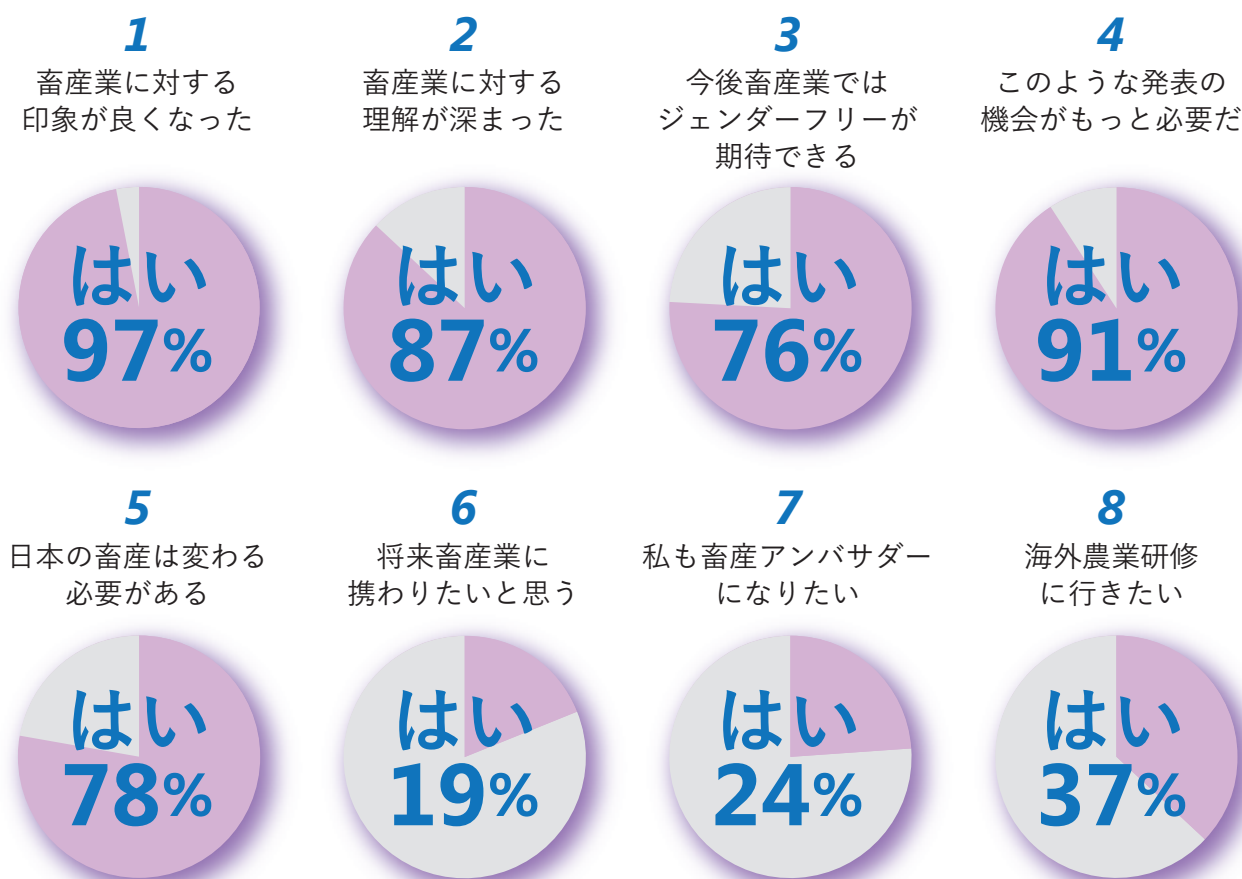
- 学校内（プロジェクト参加者母校での活動、学校の文化祭なども含む）…37回
- 地域（小学校、中学校、地元のスーパーなど）…11回
- SNS、冊子、メディアの活用など…8回
- 国際化対応営農研究会…5回 ※全国を5ブロックに分け各1回

◆アンバサダーの声を届けられた人数

総数 11,470人



畜産アンバサダー活動によるアンケート結果 有効回答数：3,022名



畜産アンバサダー活動の事例

学校祭での活動

北海道岩見沢農業高等学校

田澤 未季さん

日本とオーストラリアの畜産経営の違いについて体験入学の中学生を対象に発表を行いました。畜産を知らない中学生に向けてわかりやすく説明する為に、PPTを用いながら畜産業、海外へ興味を持ってもらえるような発表を心がけました。



北海道帯広農業高等学校

多田 有輝さん

課題研究の実績発表大会の科内予選の時間を活用し、酪農科学科の1～3年生に向けて畜産ティーン育成プロジェクトの紹介と成果報告を行いました。現地で実際に経験して印象に残った点をピックアップし、理解しやすいようにスライドと映像を用いながら発表を行いました。



秋田県立金足農業高等学校

高橋 智星さん

全校生徒に対して研修に関する活動報告、そしてその経験を踏まえてこれからの秋田県の畜産業に役立てたいアイデアについて発表を行いました。日本とオーストラリアの畜産業を比較しながら市場規模や環境問題、動物福祉についてまとめました。



長野県佐久平総合技術高等学校

橘内 晟さん

本校の学校行事である収穫祭の場で、活動報告として、オーストラリアでの研修について全校生徒・職員向けに発表を行いました。発表の様子を録画し、作成したPPTと共にまとめ、各クラス、また、農業科以外の生徒へ向けて配信したことで畜産業について知ってもらえる機会となりました。学年の違う生徒からも興味を持ってもらうことが出来ました。



長崎県立諫早農業高等学校

宮田 風沙さん

オーストラリアでの研修成果を動物科学科に所属している生徒に向けて発表しました。現地で実際に体験したことで、より畜産業を良くしていきたいという想いを強く周りに伝えられたことから、発表後に畜産業に対してポジティブな印象が持てたという感想をいただくことが出来ました。



岩手県立盛岡農業高等学校

久慈 渚紗さん

地元のスーパーにて和牛甲子園牛の牛肉の販売研修を行いました。肥育に関わった他の生徒と共に役割を分け、「説明」の担当としてお客さんに和牛甲子園に向けて取り組んできた内容、畜産、牛肉についてプロジェクトでの経験を交えながら説明を行いました。販売後には、「とてもおいしかった」「家族が笑顔になった」という声をいただき、畜産を身近に感じてもらうことに繋がったと思います。



宮城県農業高等学校

星 碧虎さん

母校や地域の中学校へ足を運びアンバサダー活動を行いました。オーストラリアで学んだ内容について話すと真剣にメモを取りながら聞いてくれて畜産に関して学ぼうとする姿勢が伺えました。また、中学校では給食の残りが多いというお話があった為、経験を交えながら食品ロスについても講話しました。



千葉県立大網高等学校

長谷川 真央さん

小学生に向けて、紙芝居を使いながら「乳牛の一生」、「酪農家のお仕事」、「牛乳がお店に並ぶまで」などについてお話ししました。最初は大きい牛に怖がっていた児童もいましたが、時間が経つにつれて「かわいい!」「よだれがすごいね!」などと賑やかに楽しく授業を進めることができました。また、オーストラリアに関して伝えると興味津々に聞いてくれました。生き物の命をいただくことに対して「いただきます」と「ありがとう」を大切にすることを伝えてほしいとお話ししました。



鳥取県立倉吉農業高等学校

嶋本 珠琴さん

鳥取県教育委員会教育長へオーストラリアでの成果を報告しました。プロジェクトに参加をしたきっかけや現地で学んだ内容に関してPPTを用いながら説明を行いました。発表内容について大変興味を持ってくださり有意義な時間を過ごすことが出来ました。



広島県立世羅高等学校

白土 陽麻さん

校内にて開催した子ども食堂というイベントで、牛が生まれてから死ぬまでの流れを詳しく知ることができるように参加親子に向けて紙芝居を用いて、プロジェクトでの経験も交えながら発表を行いました。牛乳の活用として、昼食のデザートにジェラートを製造し提供しました。



地域に根差した活動

沖縄県立八重山農林高等学校

田盛 悠祐さん

地元の小学生が学校見学に来た際に、校内の畜舎の説明に加えてプロジェクトで学んだ内容を併せて説明しました。小学生たちは間近で見る牛に興味津々な様子でした。また、高校での学びが世界に繋がっていると聞いて畜産に興味を持ってくれた様子でした。見学後に小学生から「畜産のやりがい」に関する質問があり「生き物を育てることの喜びや責任感」について自分の言葉で伝えることができました。



SNSでの発信

福岡県立糸島農業高等学校

佐熊 安莉さん

学校のInstagramのアカウントにアンバサダー活動の様子を投稿しました。ふれあい体験では近所の小学1年生を学校招き、飼育している動物の紹介を行いました。牛紹介の担当としてオーストラリアの牛と日本の牛の違いについて、わかりやすく伝える為に、写真や動画を使用し実際に動物と触れ合ってもらうことでより記憶に残るように発表しました。文化祭開催に関するInstagramへの投稿にオーストラリアで得た学びについて発表を行うことを告知したことで幅広い年代の方に聞いてもらうことができました。発表後には畜産業に対するイメージがポジティブになったという感想もいただくことが出来ました。



メディアでの発信

静岡県立田方農業高等学校

熊倉 花さん

食を通して子供たちの未来を考える育児情報誌「ママごはん」より取材を受けました。本校が県内で唯一酪農が学べる県立高校であり、乳牛飼育と搾乳実習、生乳を牛乳に自家生産・自家販売しているということから今回の機会をいただきました。畜産アンバサダーとして、畜産業界への若手担い手育成推進活動、田農牛乳と牛乳消費拡大PR、牛舎では、酪農に関する授業、搾乳実習の解説、畜産アンバサダーという活動の説明等の取材をうけ、PR活動を行いました。



宮崎県立高鍋農業高等学校

石山 弘樹さん

帰国後に校内で成果報告を行いました。オーストラリアと日本での飼育方法、環境の違い、またこれからの日本の畜産に必要なことに関して発表した様子は宮崎日日新聞、UMKテレビ宮崎にて放映されました。



国際化対応営農研究会での活動

本会が主催し、全国を5つのブロックに分けて開催された農業者や農業関係者の学びを目的とした国際化対応営農研究会において、畜産アンバサダー活動を行いました。会場は秋田県、茨城県、岐阜県、岡山県、そして佐賀県で、「日本の畜産をもっと元気に!」というテーマで発表を行いました。高校生たちは畜産アンバサダーとして、自分の畜産に対する思いや将来の夢を情熱的に会場の皆さんに伝え、それぞれの会場で多くの共感を呼び、温かい応援の声をいただきました。

北海道・東北ブロック

2025年2月3日(月) 秋田拠点センターアルヴェ

- 田澤 未季さん
- 高橋 智星さん
- 岡崎 彩女さん
- 田木 希実さん



関東甲信静越ブロック

2025年1月30日(木) ホテルグランド東雲

- 久慈 渚紗さん
- 橋内 晟さん
- 長谷川 真央さん
- 田盛 悠祐さん



東海・近畿・北陸3県ブロック

2025年1月29日(水) ひだホテルプラザ

- 阿部 未悠さん
- 熊倉 花さん
- 白土 陽麻さん



中国・四国ブロック

2025年1月24日(金) ピュアリティまきび

- 多田 有輝さん
- 福田 愛さん
- 甲斐 柚花さん
- 嶋本 珠琴さん
- 佐熊 安莉さん



九州ブロック

2025年1月21日(火) グランデはがくれ

1月22日(水) 佐賀アリーナ(佐賀サミットブース出展)

- 星 碧虎さん
- 宮田 風沙さん
- 田中 優羽さん
- 石山 弘樹さん



事業普及パンフレット

日本の畜産をもっと元気に!

研修成果を広く普及するため、研修のダイジェストとなるパンフレットを作成し、全国の農業高等学校や関連機関及び企業、農畜産業関係者等に配布しました。



5 畜産業に関する参加者への意識調査

プロジェクトに参加した高校生 20 人の畜産に関する考えが、この1年間でどのように変化したかをアンケートにより調査しました。アンケートは以下の通り3回実施されました。

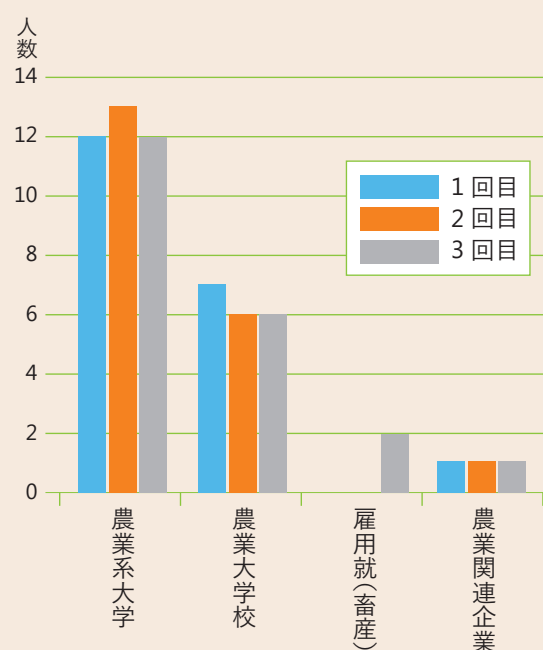
- 1 回目：プロジェクト参加者として選抜された時（6月上旬）
- 2 回目：海外研修から帰国直後（8月下旬）
- 3 回目：畜産アンバサダー活動後（3月上旬）

1. 高校卒業後の進路

「畜産に対する高い意欲、夢を持った高校生たち」

応募当初から4年制大学農学部への進学を目指している参加者が多数いました。次いで農業大学校を選択する参加者が多く、他に農業関連企業への就職を考えている参加者がいました。この1年を通じて若干の変動はありましたが、進路に大きな変化は生じていません。プロジェクト参加当初より畜産に対する興味と将来のやりたいことをある程度イメージし、その夢に向かって学習を進めていました。

1. 今考えている高校卒業後の進路は？

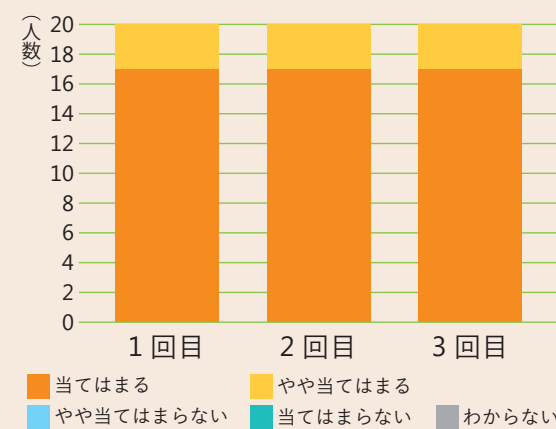


2. 畜産生産現場で働いてみたい

「現場で直接かかわる楽しさを知っている」
畜産に強い興味を持つグループであるため、プロジェクト参加当初から畜産現場で働くことについてもポジティブな意見を

持っていました。その傾向には変化はありませんが、この1年間で「当てはまる」の割合が大きくなっていきました。個別のコメントには、より強く畜産で働きたくなったというものがあ、身近に畜産の魅力を感じる環境が高校生たちのモチベーションに繋がっていることがわかります。

2. 畜産生産現場で働いてみたい

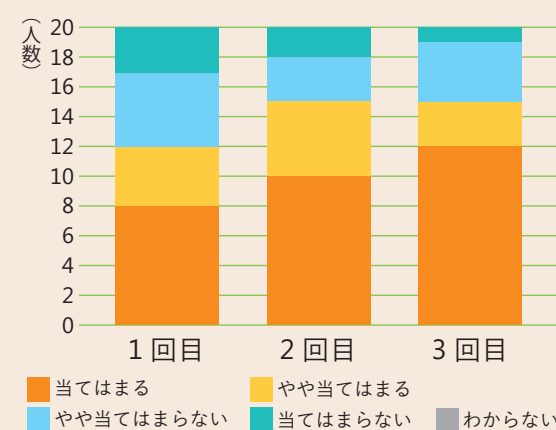


3. 畜産を支える産業（農業学校の先生、獣医、乳業メーカーなど）に興味がある

「自分の思いを人に伝えてみたい」

本プロジェクト参加者は、畜産アンバサダーとして自分の身近な人、地域の人、そして

3. 畜産を支える産業に興味がある



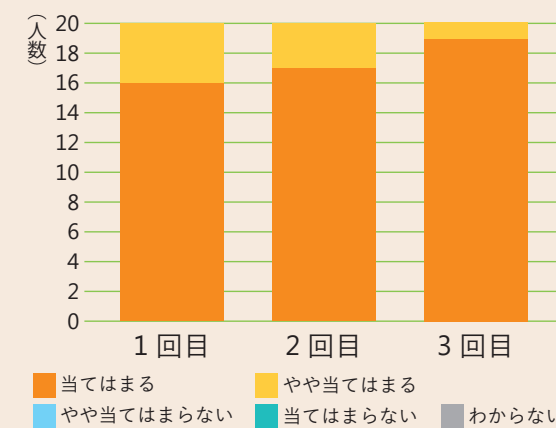
農業従事者たちの前などで自分の考えを発表する機会を得ています。そのため、指導方針はプロジェクト当初から人前で話すことを意識づけるように設計されていますが、その中で、自分の思いを人に伝えることの面白さ、共有することのすばらしさを再認識していった様子が見られます。変化した人のコメントには農業教育現場に興味を持ったという意見が見られました。

4. 畜産業はカッコいい仕事である

「畜産に全てを捧げて尽力する姿はカッコいい」

オーストラリアの研修中も参加者たちは自分たちの考える理想の畜産について熱心に議論をしていました。その根底にあるのは、これまで見てきた畜産、学んできた畜産に対するポジティブな思いです。学校の取組や共進会への参加などの時、実際の仕事現場を目の当たりにし、畜産に関わる人々の姿、真剣さに心打たれていたに違いありません。このプロジェクトを通じて仲間同士その体験や意見を共有したことでより強い思いが生まれたのだと考えられます。

4. 畜産業はカッコいい仕事である



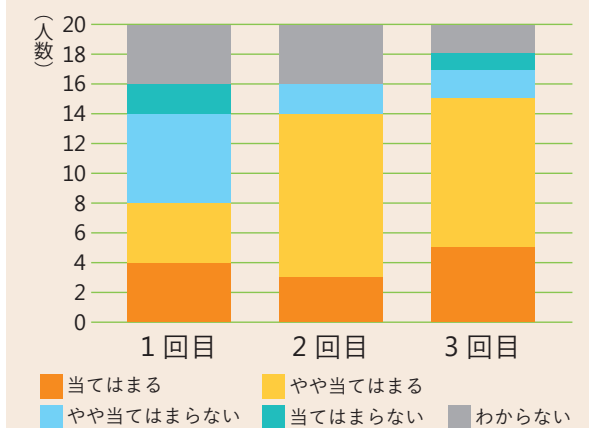
5. 畜産業はもうかる仕事である

「近年の畜産を取り巻く情勢は不安要素」

これまでの本プロジェクトでも見られる傾向として、学校教育の中で農業経営に触れる機会が少ないことから、ビジネスとしての畜産を意識していることがあまりないようです。1回目のアンケートで「分からない」を選択した人が一定数いること、そして、儲からない（当てはまらない、やや当てはまらない）と考える人が多いのも、それを示していると考えられ、現地研修を通じて儲ける方法＝ビジネスとして畜産を知る

に至ったことが分かります。一方、「当てはまらない」と考える参加者としては、近年の資材コスト上昇、子牛の値段が安いなど鋭く見抜いている意見も見られました。

5. 畜産業はもうかる仕事である

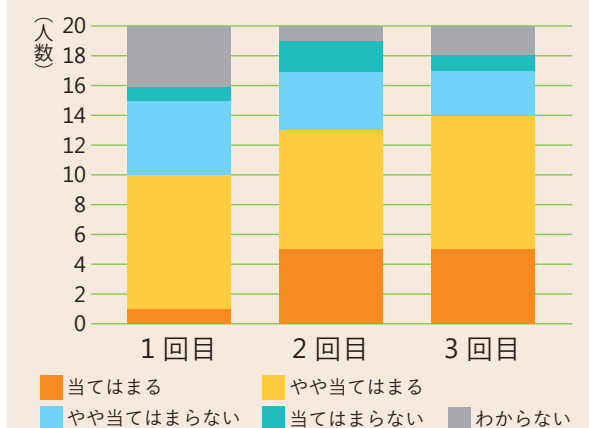


6. 畜産業は環境に優しい仕事である

「サステナビリティ（持続可能）」

世界的に畜産業が地球温暖化に与えるインパクトとしてはネガティブなものが多く、ウシのげっぷの温室効果ガス、集約的な家畜の飼育（地下水汚染）、生産コストと輸送コストが高負荷な家畜飼料、資材費の高騰など、懸念材料は多数あります。その背景がある中であっても、畜産業は環境に優しいと考える参加者が多数いました。コメントを読むと、現行の畜産が環境に優しいというより、環境問題に対してソリューションとなる様々な取り組みがあることを知り、そこに将来性と可能性を見出していることが分かりました。将来に継続できる畜産を実現できれば畜産に未来はないとも言え、だからこそサステナビリティを意識した畜産を実現したいという意欲を感じます。

6. 畜産業は環境に優しい仕事である

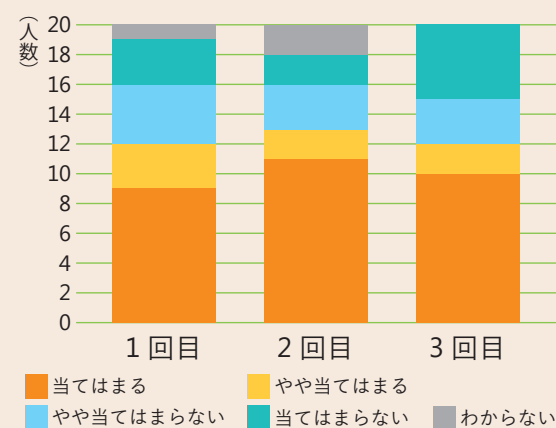


7. 将来は牧場経営者になりたい

「畜産を誇りに思っている人がいて自分もそうなりたかった」

「3. 畜産を支える産業（農業学校の先生、獣医、乳業メーカーなど）に興味がある」と一つ後ろのアンケート項目「将来は畜産農業法人の従業員になりたい」のクロスチェック的な質問です。将来の夢や理想と直結する進路にも関する質問だったこともあり、3回のアンケートを通じて大きく変化しなかったように見えます。一方で、「分からない」という回答は3回目でなくなっていることから、牧場を持つということに対する自分自身の考えが明確になったのではないかと考えられます。

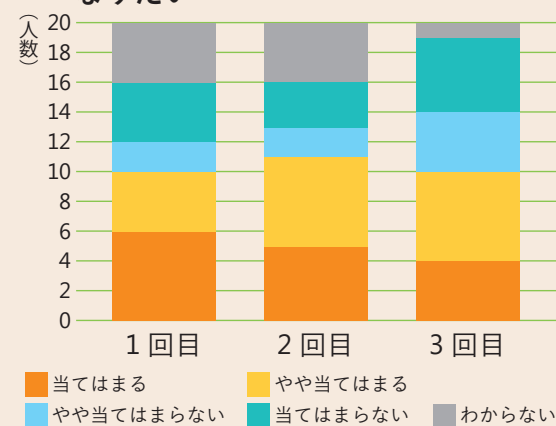
7. 将来は牧場経営者になりたい



8. 将来は畜産農業法人の従業員になりたい

自分自身の牧場を持ちたいわけではないけど、畜産現場に興味があるという場合、こちらが当てはまるようになります。ただし、上の質問が当てはまっても、こちらの質問にも当てはまる場合もあり、長い人生のス

8. 将来は畜産農業法人の従業員になりたい

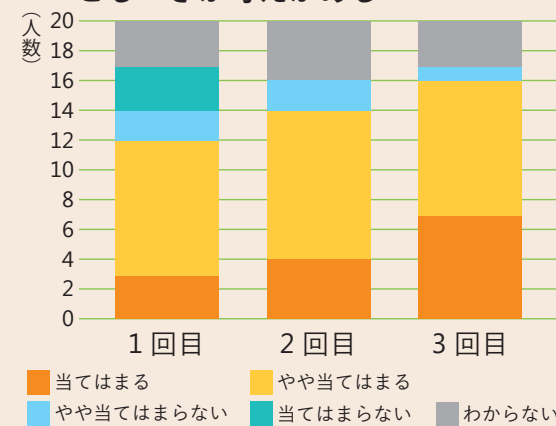


パンの中で畜産業とのかかわり方が変化していく、つまり、従業員から農場主になっていくというある種の現実的な考えに則った意向も見えてくるようです。

9. どうやってワークライフバランスをとるべきか考えがある

「誰かが一人で負担を負うことがない畜産」まだ仕事をしていない高校生たちにとって、家事と仕事のバランス、男女での仕事の役割の在り方など、なじみがなかったかもしれません。しかし、オーストラリアの研修を通じて具体的に考える機会を得たというコメントがありました。農場経営者たちに仕事のやりがいや、自由な時間をどのように使っているかといった質問を投げかけ、イメージを明確にして行きました。畜産業は忙しいがそれではどうしたらいいのかを若いころから考える癖をつけることも、我が国の畜産業をより良くするうえで大切なことかもしれません。

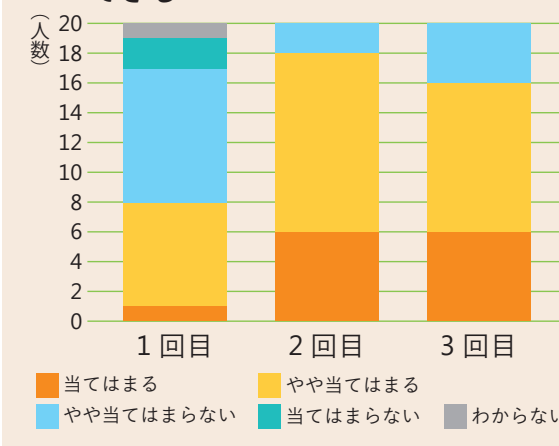
9. どうやってワークライフバランスをとるべきか考えがある



10. 畜産経営に必要なことがイメージできる

「農場主の考えに感化される」この1年間に畜産の面白さは動物を可愛いがったり、日々の飼育管理を頑張るだけではなく、畜産物してモノを売り、ビジネスを回すという経営体全体の取組の中にあることを考えました。オーストラリアでは色々な場所の経営者の皆さんにたくさん質問をし、その中でどういう考えで農場を営んでいるのかを知りました。2回目で「当てはまる」、「やや当てはまる」の割合が大きく増加したことから、学校から飛び出して実際の農場の現場を見ることが大きな学びにつながったのではないかと思います。

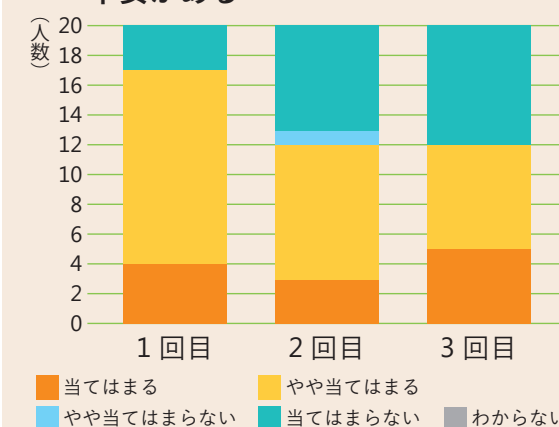
10. 畜産経営に必要なことがイメージできる



11. 畜産農家や従事者になることに不安がある

「情勢、安定収入など不安はあるけど…」実際に畜産業を生業とするにはハードルがあり、その道を選択できない可能性もあります。今の日本では、農業者として生活していくことの現実が厳しいという意見や、実際にそういった報道が多くみられること、若者の心に少なからず不安を与えているのではないのでしょうか？オーストラリアの研修を行った2回目のアンケート以降でその不安が少し払拭されたようです。現地の農家からエールを贈られたこと、仲間たち同士のポジティブな会話の中で、気持ちを奮い立たせた様子が見られました。

11. 畜産農家や従事者になることに不安がある

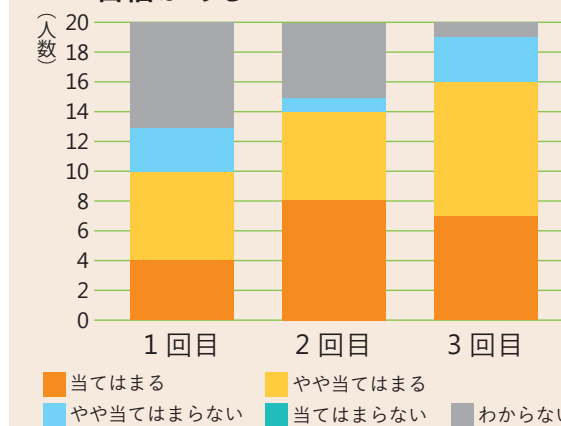


12. 自分なら畜産業界で活躍できる自信がある

「自分にできる畜産への貢献」この質問は抽象的で、自分自身が思い描く畜産業への貢献がどんなものか、それをイメージできているかどうか回答が出てい

るようです。活躍できるという意味が畜産業界をけん引する有力な畜産農家であると考えた場合、自信がなくなるのはわかります。しかし、自信があると答えた参加者の中には、自分ができることとして、「SNSを用いた畜産の魅力の発信」を挙げる人がいました。畜産業の未来を作っていく主役であるという自覚が、このプロジェクトを通じて培われたのであれば幸いです。

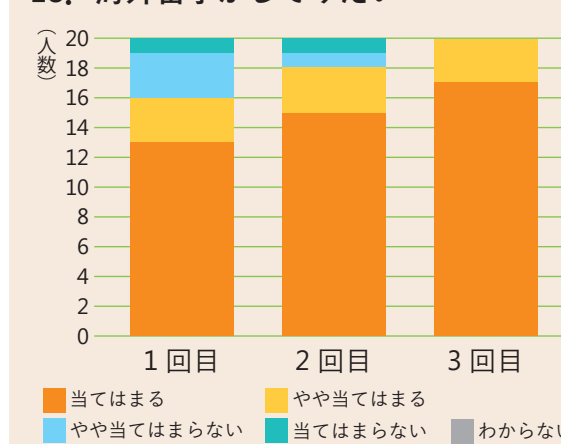
12. 自分なら畜産業界で活躍できる自信がある



13. 海外留学がしてみたい

自分自身で経験したことが、物事の尺度になります。今回オーストラリアでは視察もしかり、ファームステイの中で現地の農家の皆さんに心から歓迎して頂き、それはかけがえのない素晴らしい経験となりました。当初留学に興味がないと思っていた参加者も、外国で考え方の違う人と触れることの大切さ、自分の知らない世界を知ることの面白さに気が付き、最終的には全員が留学に興味を示してくれています。

13. 海外留学がしてみたい



フォローアップ。

これまでプロジェクトに参加した皆さんに、その後についてアンケート調査を行いました。高校生の多感な時期に海外の畜産現場を見て、全国の仲間たちと交流した畜産アンバサダーたちがどのような進路を辿り、現在何を行い、考えているかを調べるための調査です。

令和 6 年度フォローアップ調査結果

回答数 118 人中 93 人

研修参加年度・研修先国	回答数	回答率
平成 30 年度 ニュージーランド	15	75%
平成 31 年度 ニュージーランド	14	70%
令和 3 年度 デンマーク	10	53%
令和 4 年度 デンマーク	15	79%
令和 5 年度 オーストラリア	19	95%
令和 6 年度 オーストラリア	20	100%

1. 現在の職業は何ですか？

職 業	人数
大学生 (農業系（農学部・生物資源科学部等）)	28
会社員（農業系（雇用就農含む）)	14
会社員（農業系以外）	9
農業大学校生（農業系の専門学校含む）	12
農業高校生	8
農家（畜産・その他）	6
大学生（農業系以外）	5
研修生（農業系・その他）	2
専門大学校生（農業系以外）	1
農業高校教員	1
公務員	1
実習助手（農業）	1
専業主婦	1
JICA 海外協力隊	1
留学準備	1
フリーター	1
留学（海外農業研修含む）	1



2. 現在畜産業に就いてどのようにお考えですか？

回答	人数
畜産業に就きたい	58
畜産業を続けたい	19
畜産業に就くことができない	12
畜産業を続けられない	4

また、そう考える理由を分析すると以下の通りとなりました。

ポジティブな意見
(畜産業に就きたい、畜産業を続けたい)

- ① 畜産が好き・やりがいを感じる
- 牛や家畜が好きだから
 - 幼い頃からの夢だったから
 - 自分に合っていると感じるから
 - 肉・卵・牛乳を生産することに誇りを感じる
 - 家畜と共に過ごすことで生きている実感が湧く
 - 動物と触れ合いながら仕事ができるのが魅力

- ② これまでの学びや経験を活かしたい
- ・高校や大学で畜産を学んできたから
 - ・オーストラリア研修で畜産の魅力を再確認したから
 - ・獣医師として畜産に関わりたいから
 - ・畜産の研究を将来活かしたいから
 - ・実家が畜産業を営んでいるため

- ### ③ 社会的意義や使命感を感じる
- 日本の食を支える大切な仕事だから
 - 一次産業の衰退を防ぎたいから
 - 地域の畜産業に貢献したいから
 - 高齢化が進んでいるため、若い世代が必要だと思うから
 - 畜産の魅力を広めたい、後継者を育てたいから

- ④ できる限り長く続けたい
- 体力の続く限り、できるだけ長く続けたいから
 - 生涯畜産業に携わりたいから
 - 10 年間は続けたいから

ネガティブな意見
(畜産業を続けたくない・難しいと感じる)

- ① 他の職業に興味がある**
- 畜産以外の農業分野に就きたいと思う
 - 今畜産以外の仕事についていて、その仕事が好きだから
 - 教育の道に進みたいと考えているから
 - 転職してみるのも良いかと思うから

- ② 生活環境・家庭の事情
- ・結婚や子育ての関係で畜産現場で働くのが難しい
 - ・都内へ引っ越す予定で、畜産業に就けない

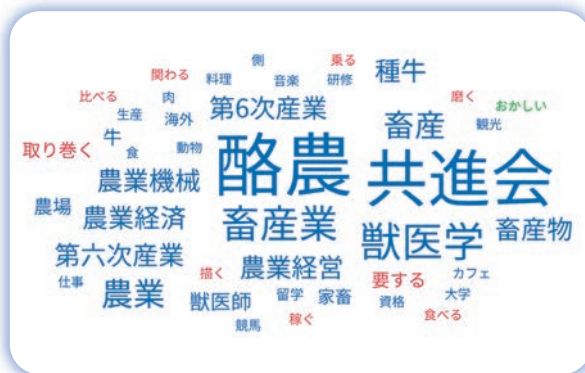
- ### ③ 収入・経済的な不安

- 経営が厳しいため
- 収入が安定しない

- #### ④ 体力的・精神的な負担

- 体力的に厳しい
- 精神的に続けるのが難しい
- 畜産業に就くと家畜を嫌いになりそうと感じた

アンケートの中で、今関心を持っていることは何かをお聞きしました。
いただいた結果をもとにワードクラウドを作成しました。



畜産ティーン育成プロジェクト事業と以前実施した畜産女子育成プロジェクト参加により、それが今どのような場面で生かされているかという質問に関する回答を取りまとめると、以下のような傾向が見られました。

- ## 1. 進路やキャリアに対する影響

- 畜産業に対する意識が変わり、進路を見直した：プロジェクトを通じて畜産業の魅力を感じ、進路を畜産業界に決定したり、今後も畜産業を続けたいと思うようになった。
- 海外研修や海外で学びたいという意欲の高まり：プロジェクトをきっかけに、海外で畜産を学びたいという目標が定まり、海外農業研修へ参加したり、海外での経験を積みたいという意欲が生まれた。

2. 知識の深化と情報の活用

- 畜産に関する知識や視点の拡充：プロジェクトで学んだ内容や視点が、大学での学びや仕事に活かされている。特に、海外の畜産と日本の畜産の違いを実感し、それを元により広い視野で畜産業を考えられるようになった。
- 課題解決力やプレゼンテーション能力の向上：プロジェクトで身につけた意見をまとめる力や、解決策を提案するスキルが、今後の学業や業務に役立っている。

3. 多角的な視点からのアプローチ

- 日本と海外の畜産の違いの理解：海外での経験を通じて、日本の畜産業の現状を改めて考え、他国の畜産を見て、多面的に畜産業を捉えることができるようになった。これにより、畜産業の課題や解決策を考える視点が広がった。
- アニマルウェルフェアや家畜の扱いについての意識の変化：動物福祉や家畜の行動学に興味を持つようになり、畜産業における倫理的な観点や福祉への理解が深まった。

4. 仲間や人とのつながり

- 仲間とのネットワークの構築：プロジェクトで出会った仲間やメンターとのつながりが今でも大切にされており、特に畜産業に関する考え方や知識を深めるために、お互いに意見を交換し合い、支え合っている。
- コミュニケーション力の向上：畜産業に関心を持つ仲間や業界の人たちとのコミュニケーションを通じて、意見を共有したり、問題解決を模索したりする力が養われている。

5. 社会への貢献意識の強化

- 日本の畜産業の課題に対する意識の向上：プロジェクトで学んだ日本の畜産業の現状を、周囲の人々と共有することで、日本の畜産業が抱える問題や改善すべき点について考えるようになり、畜産業の未来に貢献したいという意識が強くなった。
- 自分の理想の畜産業の実現に向けての活動：自身の理想の畜産業を目指し、それを実現するための方法を考えるようになり、課題解決に向けて取り組み始めた。

6. 視野の広がりとなんだな挑戦

- 海外での経験が視野を広げ、将来への挑戦を促進：異文化を体験し、日本とは違った農業のやり方を学ぶことで、視野が広がり、今後のキャリアに対する柔軟な考え方ができるようになった。特に、海外の酪農や畜産業に興味を持つようになり、その分野での学びを深めたいという意欲が強まった。
- 自信とモチベーションの向上：プロジェクトを通じて得た経験が、自信を持つきっかけとなり、学業や仕事へのモチベーションを高めるエネルギーとなっている。

6 参加者の報告



畜産アンバサダー

北海道岩見沢農業高等学校
畜産科学科 2年
田澤 未季

1. テーマ

若者が描く未来の畜産

2. キーワード

アニマルウェルフェア

3. キーワードのつながりと考察

①若者が描く未来の畜産というテーマで私はこれからの畜産で必ず必要になるものだと思います。また、このテーマとキーワードは今の畜産の大きな課題だと思います。今日本ではアニマルウェルフェアの法律がないことを知っていたので、アニマルウェルフェアの先進国であるオーストラリアはどういう飼育をしているのか、どういった対応をしているのかがとても気になりました。オーストラリアの牧場の様子をSNSで見た時、牛も人もとてもイキイキと見えたので楽しそう生活していたので日本との違いを特に注目して見たいと思いました。

②実際に研修に参加して私は意識の違いにとても驚きました。オーストラリアはアニマルウェルフェアが当たり前であり、それができないなら畜産をやるべきではない

という考えでした。日本はまだアニマルウェルフェアが浸透していないのでその考えにはまだならないと思いました。また、日本はアニマルウェルフェアを積極的に広めようとしていないと思い、私は



この研修を通してまずはアニマルウェルフェアを世の中に広めていくことが重要だと考えました。若者が描く未来の畜産には動物に優しい飼育環境はとても大切な考えだと思います。またアニマルウェルフェアが広まらない環境も問題だと考え、考え方や方法が浸透していくことはとても難しいことだということがわかりました。

③新規就農者や農業の学生に対して、否定だけするのではなく、肯定する大人が増えていくことが大切だと考えました。大人に肯定してもらうことで自信になり、自分の考えをよりよくしようと試行錯誤することなどではないか、もっと勉強して知識を広げようなど意欲的に活動ができると思います。

ここからは私の意見になりますが、私も自分の考えを自分で否定してしまうことが多いのでまず自分を肯定していくことが増えると、周りにも肯定する機会が多くなっていくと考えました。

肯定してもらうことは様々なプラスの効果があると思いました。その為、オーストラリアで経験したたくさん肯定してもらうことを反映していけばいいのではと思いました。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

まず、土地の広さで考え方がこんなに変わるとということがわかりました。日本は土地が狭く山が多いので一ヶ所で多くの牛を飼育できる繋ぎ飼いの牛舎が発達し、オーストラリアは広く、平坦な土地が多いため大規模な放牧が発展したと思いました。その経営方式の違いでここまで生産者と消費者の意識の違いが大きく出ると驚きました。放牧している牛たちは、とてもものびのびと暮らしており病気になった牛を見たことがないと言っていた人もいました。やはり牛たちは放牧の方が飼育に適していると強く感じました。またオーストラリアの人たちは家畜のことを第一に考えていることもわかりました。日本は売り上げのことをとても重要視していますが、オーストラリアは牧草などを与え、牛の体に適した餌を与えていました。無理に乳量を増やすのではなく、牛の体を大切にしながら飼育して

いることがわかりました。これからの畜産は牛の体を酷使するだけではなく、バランスのとれた飼育方法を確立していくことが未来の畜産に繋がるのではないかなと考えました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は2つ広めたいことがあります。一つ目は畜産の良さを日本の方々に伝えたい、二つ目は、命の大切さを伝えたいと思っています。一つ目は、畜産の良さを日本に広めたいについてです。畜産は人々を食の面で支えるとても素晴らしく、大切な職業です。しかし畜産家や畜産従事者は今年々減少している状態です。畜産の良さをもっと知ってもらい、たくさんの人に畜産という仕事を良いイメージを持って欲しいと考えました。良いイメージが広がると畜産についてもっと知りたいと思う人がどんどん増えていくと思います。しかし、畜産は名前だけ知っている人が多く実際どんなことをしているのか知らない人がほとんどなので、それを知れば今の畜産に関心を持つようになると考えました。また、よく知ることで高校選びや職業選択に、畜産が入ってくると思います。

また、命の大切さをについて伝えたいです。畜産は間近で命の誕生を知ることができることも一連の流れで起こります。残酷だとも考える人も多いと思いますがそれが今の日本の食肉を支えていくうえで重要なことであり命の大切さを知るタイミングでもあります。今の日本は飽食と呼ばれる状態です。国民のほとんどが飢える経験がないためフードロスが増えています。また日本は畜産と他の職業との距離があると感じます。そのため安易に食べ物を残すという選択肢が出でくると考えました。畜産アンバサダーの活動を通して、その残した食べ物も大切な命であったことを強く伝えたいです。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来海外で畜産に従事したいと思っています。日本だけの畜産を知るのではなく、いろいろな国の畜産を知り、それぞれの良さを学び、その土地にあった畜産の

在り方を学びたいです。私が今回知れた畜産はオーストラリアのごく一部の畜産農家の飼育方法や考えなので、もっと多くの考え方や飼育方法、餌、家畜への接し方など様々なことをよく知り、それを国内に広めていきたいと思っています。また日本ではいない種類の家畜やその国でしか経験できないことなどたくさんを学び、楽しんでいきたいと考えています。私の目標を達成するには経験がとても重要なので学校の牛舎でたくさん牛にふれあい、夢に向かっていきたいです。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私の実家は畜産とは全く関係のない一般家庭でした。なので全く経験がなくても畜産について学び、畜産について学ぶことはできると思います。ぜひこのプロジェクトにたくさんの人が応募して欲しいと考えています。畜産は人を支えていくとても大事な職業だと私は思っています。この魅力ある職業を目指す人たちがもっと増えることを願っています。畜産ティーン育成プロジェクトは様々な都道府県から応募した高校生が参加しています。自分の学校だけでは分からないプロジェクトや実習内容、授業など新しい考えや視点を手に入れるチャンスだと思います。オーストラリアは想像以上に素晴らしい場所なのでぜひみなさんも応募してみてください！





畜産アンバサダー

北海道帯広農業高等学校
酪農科学科 3年
多田有輝

1. テーマ

私が働きたい畜産農家

2. キーワード

持続可能

3. キーワードのつながりと考察

①「私が働きたい畜産農家」というテーマについて考えたとき、まず、私は将来、人と牛と環境にやさしい酪農がしたいと思いました。そこでキーワードを「持続可能」に決めました。持続可能な畜産業ということはこの先もずっと続けていける状態であり、きっとそれは私の目指す、人と牛と環境にやさしいということを満たしている状態なのではないかと考えました。オーストラリアでは放牧が盛んに行われていることや事前学習で、バイオダイナミック農法について学び、オーストラリアでは畜産と環境の関わりが日本よりも密接であることを知りました。日本では環境問題はもちろん、後継者不足や自給飼料について、アニマルウェルフェアなど畜産業を取り巻いている課題はさまざまです。その中で、課題を解決していくためにも持続可能ということとはとても大切になっていると考えました。

②実際に研修を行い、オーストラリアの畜産は私の理想に近いと感じました。オーストラリアには広大な放牧地が広がっていて、どこを見ても自然を感じることができるような風景でした。北海道出身の私にとっては、少し身近に感じるような風景でもありましたが、それでも思わず写真に収めたいようなそんな景色が広がっていました。バランスが取れているからこそ、環境を壊すことなく経営を行っていくと感じました。また、ある牧場では牛が病気になったことがないと話してくれました。さらに場所によっては傾斜のある中で放牧がおこなわれていました。搾乳の時には牛たちが傾斜のある道をしっかりと足取りで歩いていました。乳牛では足腰が強いことはとても大切になってきます。脚が悪く立ってなくなってしまう牧場に残しておくことも難しくなってしまうと思います。放牧は健康につながり、牛の経済寿命を延ばすことにもつながっていくと感じました。

私はこの研修を通して人と牛と環境にやさしい、持続可能な酪農を行っていくためには「放牧」がキーポイントになってくるのではないかと感じました。日本では放牧を行っている農家の割合は低く、舎飼いが一般的です。



それは土地が少ないことが一番の原因であると考えました。しかし、日本には耕作放棄地や重機を入れないなど、土地が活用されていないかと思うことができています。かといって環境を守っていくこともできず、牛たちが青草をたくさん食べることによって濃厚飼料を減らすことができ、飼料費の削減につながるだけでなく、牛の健康にもつながると思います。このように、放牧のメリットがたくさんある中で気候や土地の状況など、条件の違う日本ではオーストラリアと同じこととするは難しいとも感じました。そこで私は季節放牧や牛が好きのように放牧地を行き来できるようにしたらいのではないかと考えました。夏は暑く30度を超える日が続き、北海道などでは冬には雪が降り-10度をはるかに下回るような日もあります。その中で放牧を取り入れていくためには、牛舎のような牛が暑さや雨風などから逃げることでできる施設を作り、放牧地とその施設を行き来できるようにすることで日本での放牧も取り入れやすくなると思います。また、牛自身に外に出るかどうかを判断させることで、それぞれの牛のストレスを減らすこともできるのではないかと考えました。

③私は今後、日本の畜産にもっと世界の畜産業を広めていくというのではないかと考えました。オーストラリアの畜産は私が見てきた日本の畜産とは別の形をしていた。もっとたくさんの畜産の形をさまざまな視点から見ること、今日本が抱えている課題の解決にもつながると考えます。今まで受け継がれてきた日本の畜産と、私たちの知らなかった新しい畜産の形が合わさること、日本の畜産業はよりよくなっていくと思います。だからこそ、畜産アンバサダーとしてこの研修で学んだことを多くの人に伝えていき、新しい日本の畜産をたくさんの人と模索し、構築していきたいです。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

研修を通して感じたことは、日本とオーストラリアの意識の違いです。私の家は酪農をしており、また一緒に暮らしている祖母が野菜を育てています。そのため、肉や魚などはスーパーで購入していても、野菜や牛乳など食べるものの多くは家でとれたものでした。野菜などは家でとれたものなのか気にすることがあっても、基本的に自分がいつも食べているものの産地を気にしたことはありませんでした。ですが、オーストラリアの方たちはみんな「国産のものを重視する」「ローカルなものを大切に使う」と話していました。ローカルなものを大切にするということで、地域を支えることにつながるといった新たな考えを知ることができました。また、スーパーにはその商品がどのくらいオーストラリア産であるのかが一目でわかるマークや健康指数がわかるマークが記載されている商品が多くありました。肉や野菜だけでなく、お菓子などにも国産を意識できる制度に、日本との大きな違いを感じました。日本では値段を重視する人が多くいるため、原産地よりも安さが優先されていると思います。私もスーパーで買



物をするときは値段を見比べて、買うものを決めていました。ですがこれからは値段だけでなく、どこで作られたのか、どのように作られたのかなど様々な視点から商品を見てみようと感じました。さらに、日本では畜産業に対して3Kなどの暗いイメージが残っているのに対し、オース

トラリアでは「畜産業は食にかかわる大切な職業」と考える人が多くいました。よく考えれば当たり前のことなのにそのことに、今までそのことに気づくことがなく、はっとさせられました。将来酪農をやっていくうえで自分の職業に誇りややりがいをもって仕事をしていきたいと思いました。また、この研修で多くの農家さんに出会いました。時間が大幅に遅れてしまうことがあっても、怒っているような雰囲気はなくこの農家さん笑顔で出迎えてくれました。日本人は時間にきっちりしているところがあると思います。限られた時間の中で効率よく生活するためには大切なことですが、もっと大まかな考えで生活することも大切だと感じました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういうことを、なぜ広めたいのか

私が畜産アンバサダーとして広めていきたいことは「畜産業の魅力や楽しさ」と「食べ物の大切さ」です。私は酪農家という職業にとっても魅力を感じ、将来は酪農家になりたいと思っています。日本ではきつい、きかない、といったイメージを抱く人が多くいるように感じます。家畜も生き物なので、病気を患ってしまったり、給餌や清掃など生活環境を整えたりする必要があります。ですが、家畜の誕生から成長にかかわることができ、命の重みを感じることができ素晴らしい職業だと私は感じます。そんな畜産業の魅力や楽しさをもっと多くの人に広めていきたいと考えます。私はオーストラリアの方が教えてくれた「農業は食にかかわる大切な職業」という考え方がとても印象に残っています。後継者不足などにより、離農する農家が多くいるのが現状です。このまま農家の戸数が減ってしまえば、日本で作られた農産物が減っていくだけでなく、一戸の農家の負担も大きくなってしまおうと思います。また、日本ではたくさんの食べ物が当たり前に捨てられています。捨てられてしまえば、食べ物に込められている生産者の思いも、家畜たちの命もすべて無駄になってしまいます。いつでも食べることができる現代だからこそ食べ物の大切さについて改めて考える必要があると思います。

・それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

これらのことを広めていくことができれば、もっと畜産業に興味を持つ人が増えたり、食べ物に対しての意識が変わったりしていくのではないかと考えます。消費者に畜産業の魅力や楽しさを知ってもらいながら、

大変なところも知ってもらうことで、日本の農家を応援したいと思ってもらい、国産の商品にも注目してもらえるようになると思います。

・次世代の畜産業はどのようなものか

次世代の畜産業は、もっと生産者と消費者が近い関係でつながることができるようになると思います。現在の日本ではそのように生産されているのかを消費者が知ることには難しく、また気にしている消費者も少ないと思います。オーストラリアでは国産への意識がとても高かったです。安さだけでなく、どんな環境で育ち、どのように生産され、どこでどのように加工されているのかなど、生産工程にも目を向けて商品を購入する人が増えていくのではないかと感じました。そして、消費者のニーズに合わせた様々な畜産の方法が確立していくと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は放牧酪農で、人と牛と環境にやさしい酪農家になることです。この研修を通して、放牧酪農にもっと魅了されました。土地や気候など条件が違っても、少し工夫をすれば日本での放牧をもっと取り入れていきことができると思います。何よりも放牧地で自由に草をはみ、寝そべるそんな牛の姿にとっても癒されました。きっと牛にとってもずっと牛舎にいるよりも外に出て自由に過ごせるほうがストレスが少なく感じました。また、オーストラリアで訪れた農家の多くが、日本のような病気ではなく、ダニなどの害虫の対策を行っていました。そういった面からも、病気を減らすことができ、牛の健康にもつながります。健康でストレスが少ない環境で過ごす牛の牛乳はきっとおいしいと思います。そして、絞った牛乳で、ソフトクリームやスイーツをつくり、牧場に小さなお店を併設し販売していきたいです。放牧地では牛がのんびりと過ごし、そんな風景を見ながらソフトクリームやスイーツを食べてもらう。地域の人や観光客でにぎわい、笑顔があふれるそんな牧場が私の理想です。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私はこの研修を通して酪農家になるという夢への思いが強くなりました。私の家は酪農家ですが、周りには非農家の友達ばかりです。畜産業はやりたいたいという思いがあれば誰でもすることができると思います。そして、こんな私にも海外に研修に行くことができました。どんなことでも気持ちがあればチャンスはやってくると思います。畜産業の課題はまだまだ解決するには難しいことばかりかもしれませんが、私たちが新しい畜産の形を描いていきましょう！





畜産アンバサダー

岩手県立盛岡農業高等学校
動物科学科 3年
久慈 渚紗

1. テーマ

畜産でアイデアを生かしたい

2. キーワード

非農家

3. キーワードのつながりと考察

①「畜産でアイデアを生かしたい」というテーマで「非農家」について考えたとき最初はどのようなことを考えていたか「畜産でアイデアを生かす」ことは、畜産農家出身者にしかできないと思っていたので、「非農家」というキーワードにはつながらないのではないかと考えていた。しかし、高校で学ぶうちに、どのような立場の者でも、国産牛・黒毛和牛・短角牛などの違いについて知ってもらう、畜産の魅力について知ってもらう、農家の取り組みを知ってもらう、など様々なことが考えられるし、難しく考える必要がないことに徐々に気づけるようになった。そして、非農家出身の私が「畜産でアイデアを生かしたい」と考えるようになった。

②オーストラリアでは、農家も非農家も牛乳や肉など畜産に対して、意識やこだわりが強いと感じた。例えば、「オーストラリア産の肉や牛乳でなければ買わない」、「アニマルウェルフェアに配慮して飼育している



牧場で生産された牛肉でなければ買わない」などというこだわりがあった。日本では特に非農家の人たちにはそのような強い意識、こだわりを持っている人はあまり多くないと思う。そこで私は畜産物の付加価値を高めることで、他の商品と差別化を図り、特に非農家の人たちに興味を持ってもらえるような取り組みをしたいと考えようになった。なぜなら、非農家の人たちに興味を持ってもらうことこそが、付加価値の高い畜産物の消費や農業関連企業従事者の増加につながると考えるからである。私は高校で「和牛甲子園」に向けて、私の高校で初めてとなる雌の黒毛和種の肥育に取り組んでいる。「高校生が育てている」「非農家出身の生徒も取り組んでいる」「雌を肥育している」といった付加価値になる要素を全面に押し出して多くの人たちに伝えたいと考える。

③私のように非農家出身の農業高校生がいて、高校の学習を進めるうちに畜産に関わる仕事に就きたいと思うようになり、外国の畜産を見てみたいと思うまでになったことを伝えることが重要だと考える。また、外国で見たり学んだりしたことで、もともと持っていた気持ちがさらに固まり、生涯をととして畜産業や農業に関わっていきたいと思うようになったことも伝えたい。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

まず、こんなにも牛が大好きで畜産に対して一生懸命に取り組んでいるメンバーと研修することができて、自分は恵まれていると感じた。他地域の高校生と牛について熱く語り合うことは初めてのことでとても新鮮だった。特に、研修の際に設けられた質問タイムでは、自分が持つことができなかった鋭く細かい質問、予想外の質問がたくさん出されたことから様々な観点で見学していることが分かり、自分との大きな差を感じた。また、班ごとの話し合いの際には、私とは比較にならない圧倒的な知識量と経



験値、上手な解説を目の当たりにし、落ち込んでしまった。同世代の仲間から学ぶことがとても多かった。

次に、オーストラリアでその土地の特徴を生かした酪農、畜産はとても魅力的だった。普段の学校での学びや調べるだけでは知ることができなかった、飼育管理方法、販売方法、こだわりなどを実体験として学ぶことができた。その一方で改めて日本の畜産の良い点にも気付くことができた。農地面積が少ない中でも牛舎を有効的に活用したり、舎飼いだからこそ一頭一頭に目を配った飼育ができたことは日本の畜産の良い点であると考えた。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういことを、なぜ広めたいのか

畜産を取り巻く様々な職業に興味を持つ人を増やしたり、畜産業が多くの人に支えられたりしていることを知ってもらうために、私たち高校生の活動を地域の人たちに知ってもらいたい。例えば、「和牛甲子園」に向けてより質の高い牛肉の生産に取り組んでいることや、課題研究活動では地域と連携した農畜産物の生産や加工などを行っていること、農業クラブの活動の一環として取り組む高校生が考える農業のあり方に関する意見文などを、文化祭や校外研修、学校SNSを利用して発信したい。

・それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

私たちの活動を発信することで、畜産を取り巻く様々な職業に興味を持つ人が増えると考えた。畜産に関わる職業は飼育だけでなく、飼料や農業機械・運搬に関わる職業、卸売業、小売業などがある。また、地域連携や6次産業化が加われば、食品会社や加工会社など、さらに多くの職業が関わってくる。高校生の取り組みを発信することで、そのことに気づいてくれる人が増えるのではないかと考える。そうすれば、飼育だけでなくその他の職業に就くことで、畜産を支える人が増えると考えられる。

さらに畜産に興味を持つ人増えれば、畜産業に就くための方法を模索する人が増えると考えた。第三者継承や地域おこし協力

隊などの活動などについて、意見文として発信できれば、その方法についても知ってもらう機会となる。

・次世代の畜産業はどのようなものか

規模拡大、地域連携がより図られることになると思う。また、他の商品との差別化を図った生産や販売が行われると思う。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、規格外となった果物などをエコフィードとして和牛に与えて肥育し、その牛肉で料理を提供する6次産業化を図ることだ。エコフィードを利用することは、本来廃棄される食品製造副産物の利用と環境負荷軽減というメリットがある。また、6次産業化によって、生産者の見える商品の提供ができる。これらのことを、地域内で完結することができれば、畜産物の付加価値を高めるとともに、地域活性化にもつながると考える。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

今日の前にある現場だけでなく、他地域の現場を見ると、新しい発見がある。また、非農家だからと諦めるのではなく、牛舎に足を運んだり、インターンシップに積極的に参加したりすれば、どんどん知識や仲間が増え、自然に自分の将来の夢が固まってくる。農業は多くの課題を抱えているけれど、新しい技術や方法で展開され始めている分野である。今こそ若い私たちの斬新なアイデアで挑戦し、これからの農業を共に発展させていきたい。





畜産アンバサダー

宮城県農業高等学校
農業科 3年
星 碧虎

1. テーマ

畜産でアイデアを生かしたい

2 キーワード

環境と調和する家畜生産の可能性

3. キーワードのつながりと考察

①「畜産でアイデアを生かしたい」と言うテーマで「付加価値＝家畜生産の可能性」について考えた時、家畜生産物の取引価格が下落している昨今の状況が挙げられる中、どのようにして畜産経営者の経営を安定させることができるのだろうかと考えた時、今後の農業の発展を図るためには、世界のマーケットへのアプローチ、そして付加価値に着目することが大切だと知り、環境との調和と言う価値に視点を当てて学びを深めていきました。様々な有識者とお話しする中で、日本人の環境に対する意識の課題について教えてもらうことが多々ありました。上記のように、外国では付加価値を加えることで家畜生産物が高値で取り引きされる傾向がありますが、日本は「環境保全を行った」などの高価な家畜生産物からは手を引き、むしろ安くて美味しいものを選ぶことから、付加価値を付けたとしても売れないと懸念する農家が多いことからこの課題が生まれていると考えました。

②実際にオーストラリア研修を行う中で、オリジナルブランドでの差別化を図り、パッケージには認証シールを貼るなどの独自の取り組みを行っている農家さんが多くいました。具体的な例として、「アニマルウェルフェア」や「バイオダイナミック農法で持続可能な農業生産を行った」などとこれ以外にも多数の付加価値がありました。もちろん消費者はそのような家畜生産物を求めることで、生産者独自の取り組みをより深め、そこから得られる新たな付加価値を見つけることで、さらなる可能性の発見につながっていたのです。以上のことから、今後の日本の畜産で「アイデア」を活かすためには、「付加価値」を消費者に知ってもらうことで、

日米仏比較
都市部消費者
の食の意識・
動向調査

MMDLabo (株) が運営する
MMD研究所がGMOリサーチ
(株) が提供する海外パネ
ルを利用し、日本 (東京)
アメリカ (ニューヨーク)
フランス (パリ) に住む20
歳~49歳の男女を対象に
2023年2月15日~2月20日ま
での期間で調査を実施
<https://news.yahoo.co.jp/article/c0d7c6de7c40190e8dc205fa12133f0be8c8f63a>

	日本 (n=430)	アメリカ (n=406)	フランス (n=406)
買い物時にもマイバッグを持つようしている	56.5% 1位	49.0% 2位	52.2% 2位
食品ロスがでないように心がけている	44.0% 2位	53.2% 1位	57.6% 1位
売切時間まで商品をロスなく消費しようとしている	26.3% 3位	33.5% 3位	40.1% 3位
惣菜の自家製製品を利用・購入するようになっている	15.8%	22.9%	26.6%
リサイクル品やアップサイクル品を積極的に取り入れている	11.4%	31.5% アメリカは 20%以上	26.4% 日本 + 20.1%
地元で生産されたものや近所で生産された農産物・畜産物を積極的に購入するようになっている	10.9%	18.2%	25.1%
フェアトレードの製品を購入するようになっている	7.0%	12.6%	26.1%
有機食品・無農薬産物を購入するようになっている	6.7%	23.2% フランスは 30%以上	33.5% 日本 + 26.8%
動物福祉が考えられた商品を購入するようになっている (卵・肉・魚・鶏、動物実験なし、など)	6.0%	26.8% アメリカは 20%以上	36.5% 日本 + 30.4%
動物性食品（肉・卵・魚類）を控え食事内容に替えている （するところがある）	5.1%	16.7% フランスは 20%以上	28.1% 日本 + 23.0%
食品や食品包装に緑色・環境関連の認証マーク付である ものが増えているように感じる	4.9%	17.2%	22.7%
コンビニやスーパーで処理場へ廃棄物を運ぶ機会、家庭へも運ばれている	4.2%	20.0% フランスは 30%以上	29.6% 日本 + 25.4%
再生可能なエネルギー（太陽光や風力、地熱など）を 電力プランを契約	3.5%	13.3%	12.8%
植物性・肉類なし・代用品を取り入れている	3.0%	17.7%	17.5%
上記に加えてほかの行動は行っていない/してもいい	23.7%	3.0%	1.0%

需要が上がり、需要と供給のバランスが釣り合い、アイデア＝付加価値となるのではないかと考えました。

③現在、私が行っている「牛が口から排出するメタンガス削減」の環境保全の研究では、最大 30% のメタンガス削減に全国の高校で初めて成功しています。メタンガス削減により、飼料効率や増体などが良くなり、飼料代の削減に繋がったのです。この環境保全の付加価値を加えた仙台牛を販売すると、対象区の牛と比較して約 80 万円も高値で販売することができました。飼料代の削減につながることから、牛肉の価格はあまり変わらず、消費者アンケートを実施しても「味と値段が同じなら環境に良いものを食べる」と回答する人が 90% を超える結果が出ました。以上のように、付加価値には大きな可能性があり、この技術をもっとたくさんの人に知ってもらう必要があると考えます。この技術のさらなる発展と普及のためには、まず論文を作成し、全国の畜産従事者の方々に知っていただくことが重要であるため、農林水産省との連携を強化し、技術の普及と拡大を図っていきたいと考えています。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

渡航前から、オーストラリアでは放牧が主流だと聞いていました。日本のように狭い土地を利用して行っているかと思いきや、実際には広大な土地で大規模なアニマルユニットが整備されており、その広さは現地で実際に見なければ想像もできないほどでした。放牧は家畜の行動を制限せず、自由に育てることからアニマルウェルフェアに繋がりますが、水環境に関しては、日本のように整備させた水質と比較すると、少し汚れている印象を受けました。この経験から、渡航前のオーストラリアの農業や飼育方法をそのまま日本に導入するという考えではなく、日本でしかできない農業や飼育方法こそが家畜に対しての快適な環境にな



日本人の環境に対する意識が低いと聞いていましたが、実際にオーストラリアを見てみても、生産者意識に大きな違いがありました。日本では「高品質な肉を高く売る」という考えが強い一方、オーストラリアでは「アニマルウェルフェアや持続可能な農業」に重点を置く生産者が多く、環境に対する意識が非常に高いことが分かりました。その結果、消費者ニーズも「持続可能な取り組み」を重視するようになり、生産者と消費者の意識が自然に一致していたのです。以上のことから、今後は日本人の環境に対する意識を高める必要性を考えました。

5. 畜産アンバサダーとして、
日本に広めていきたいこと

- ということを、なぜ広めたいのか

現代の農業には大きな可能性があり、独自の取り組みや販売戦略を工夫することで、更なる発展を遂げることができると思っています。特に農業の中でも、畜産分野は「くさい」「きつい」「休みがない」などと言ったマイナスイメージから、就農率が低いのが現状です。しかし、そういった厳しい現状がある一方で、私が18年間畜産業に携わってきた中で、やりがいや楽しさを感じずにはいられなかった場面が数多くありました。こうした実例を通じて、少しでも多くの人に畜産業や関連分野に興味を持ってもらい、将来的に携わる人が増えることを期待しているからです。

- それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

畜産従事者や関連業者が増えることで、コミュニケーションや意見交換、相互扶助の機会が広がり、それぞれの農家の発展が期待できると思います。特に、和牛は日本の固有種であり、管理方法にはまだ試行錯誤が必要な部分も多いです。だからこそ、密な意見交換などを通じて解決できる課題が出てくるはずです。現在、日本の和牛肉は世界的に注目されており、その発展を通じて消費が拡大し、和牛の可能性を感じた若者が新たな生産者となることで畜産業全体がさらに活性化すると期待しています。

ると強く感じました。さらに、環境保全の観点から見ると、日本には改善すべき点が多いと感じました。以前から、他国と比較して、

- 次世代の畜産業はどのようなものか

次世代の畜産業は、革新的な技術や経営手法を取り入れ、効率と持続可能性を追求することが求められています。特に、和牛などの高品質な畜産物に焦点を当てることで、国内外での需要拡大が期待されます。また、においや労働環境などの課題を改善し、新規参入する若者が興味を持てる働きやすい環境を整備することが重要だと考えます。さらに、畜産従事者同士のコミュニケーションを活性化させることで、知識や技術の向上により、個々の農家の発展にもつながると思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、地元の登米市で「環境保全型和牛一貫経営者」になり、仙台牛を世界規格にすることです。登米市は環境保全米という国で定める環境に優しい米作りを平成10年頃から行っており、現在では全体の80%以上が「環境保全米」の作付けになっています。しかし、私は稲での環境保全だけでなく、その取り組みに加えて、現在研究している「牛が口から排出するメタンガス削減」という牛でも環境保全活動を行い、稲と牛を通じて二重の環境保全活動を展開していきます。さらに、地域雇用や耕作放棄地を活用した放牧で地域の環境を守ると共に、仙台牛の生産と消費拡大を目指したいです。宮城で仙台牛を守る一人として、日本の和牛を守る一人として、日本の牛飼仲間と共に歩んで行くことが私の使命であると考えます。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

このプロジェクトに応募するメンバーは、それぞれが異なる夢や多様な知識を持っており、今まで以上に自身が刺激され、大きな成長を遂げることができます。特に他県の多様な知識を持った人たちと情報交換することで、新たな視点での気づきに繋がると共に「牛で結ばれた縁」が生まれ、一生の牛飼い仲間としてさらなる情報交換が可能になります。人脈を増やすということは、自身の知識を広げ、負けじと学びを深めようとすゝるやる気に大きく繋がり、個々の成長を促進します！





畜産アンバサダー

秋田県立金足農業高等学校
生物資源科 2年
高橋 智星

1. テーマ

誰もが喜ぶ畜産業

2. キーワード

飼料

3. キーワードのつながりと考察

①私は「誰もが喜ぶ畜産業」というテーマを初めて聞いた時は、生産者と消費者、そして家畜の3つがこのテーマに当てはまると思いました。この中で特にキーワードの「飼料」と関わりがあるものは、生産者だと考えました。そして、日本の畜産の課題でもある飼料の輸入依存を解決することで生産者が喜ぶ状態にすることができると考えました。最初はこの課題を解決するには、オーストラリアで一般的な経営方法である放牧を利用するのが良いと思いました。それから、日本でも今ある土地を放牧などに使うなど有効活用をし、輸入飼料の使用を抑えて解決できると考えました。また、家畜も畜舎の中で繋がれて餌を食べるより、外に出て自由に動ける状態で餌を食べられるほうが喜ぶのではないかと思います。

②実際にオーストラリアに行ってみると、訪れた牧場では舎飼いをしているところは



なく、広い土地で生活している牛ばかりでした。乾燥地域では広い放牧地を使った経営をし、湿度が高い場所では草が多く生えているので、乾燥地域よりも土地が狭かったりと、それぞれの気温や地形に適した経営をしていました。研修を受ける前は、オーストラリアでは飼料を全て自分達で賄っていると思っていましたが、濃厚飼料として綿実を他の農家から買って餌として与えているところもあり、全ての飼料を自分達で賄っている訳ではないことがわかりました。放牧をすれば全てが解決するわけではなく、デメリットもあることがわかりました。オーストラリアでの放牧をそのまま日本に反映するのではなく、日本の畜産の長所でもある生産性や飼料生産の質の良さや、舎飼いをする事によって飼育管理がしやすいことを活かしていければ良いと思いました。

③オーストラリアでは、生産者と消費者の距離がとても近く、消費者が生産者と実際に会って現場の話を聞けたり、体験が出来たりするなど繋がりが強いことがわかりました。それによって、消費者は自分たちの求めているものが生産者に伝わり、生産者は儲けにつなげるという、どちらにも利益が発生する状況を作れます。その強い繋がりの強さを日本にも作れば良いのではないかと考えました。例えば、畜産農家と地域の農家との関わりをもっと増やして、生産者同士の繋がりを強くすれば、家畜への飼料になるものを国産のものから使う事ができ、輸入依存から脱することができると思います。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリアの研修を終えて、日本とは違うところがたくさんあることがわかりました。それは、畜産に対する意識が日本と比べて高いということです。放牧地が身近なところにあり、牛を普段から見られるのは消費者からしても飼育方法を見ることができて、安心して商品を買うことができると思います。そして、小さい頃から畜産に触れ、学校でも農業を学ぶことが出来るため、アニマルウェルフェアの意識も高くなり、畜産の教育が進んでいると思いました。そのため、消費者は地域の畜産物を買うので、地産地消され生産者の利益にもなるためとても良いことだと思います。しかし、日本と同じように、高齢化問題や人手不足



が起きていることには驚きました。この問題を解決するには、畜産のキツイというイメージを変える必要があるのではと考えました。そのためには、機械を導入するなど、日本では女性が働きやすい環境づくりや労働力の削減が必要だと思います。

今回の研修で、私は初めて聞く言葉や大きな施設を実際に見て話を聞き、畜産に関する知識を身に付けることが出来ました。そして、自分はまだまだ自分が将来目指している畜産業界のことについて何も知らなくて、もっと学ばなければいけないと勉強に対する意欲も上がるきっかけとなりました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして広めていきたいことは、今回のオーストラリアで学んだことを活かして、畜産とは遠い存在ではなく、生産者と私たち消費者という関係ということ伝えていきたいです。現在の日本では、畜産がどんな問題を抱えているのかを知っている人が少ないと思います。そのため、この現状を多くの人に知ってもらうことで、国産の畜産物への購買意識を向上させたり、自分達がいつもどのように育てられた家畜から作られたものを食べたりするのかなど、畜産に対する興味を少しでも持って貰えるのではないかと思います。消費者が畜産を身近に感じられるような社会になったら、国産のお肉や乳製品がもっと流通するようになり、食料自給率も今よりも上がると思います。そして、若い人が畜産に魅力を感じやすくなると思うので、担い手不足の課題も解決することができると思います。そのような社会を作っていくためには、どの消費者のニーズにも合わせた商品を作ったり、小さい頃から農業について学ぶことが大切だと思います。オーストラリアでは学校で農業について学べる教科があり、必ず学ぶことができます。また、牧場での見学の受け入れを積極的に行っていたり、幼稚園などに牛を連れて行き搾乳

体験をさせたりするなど、畜産と関わりながら成長することが出来ます。日本でも、このようなことを行えば今よりも畜産に魅力を感じる機会が増え、生産者と消費者が身近な存在だと認識することができると思います。最初は広まるのが難しいと思いますが、生産者どうしのコミュニティを上手く使って、助け合いながら今の状況から抜け出すことが大切だと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私はこの研修に参加する前から酪農家になりたいという夢がありました。参加する前は、北海道に行って大規模な経営を行えばいいなぐらいの漠然とした考えでしたが、今回のオーストラリア研修に参加したことによって、日本にこだわらず海外へ就農するなどの新たな考え方や、牛を第一に考える経営がしたいと自分の将来について深く考えることが出来ました。そして、私は両親共に非農家なので、もっと牛と関わる時間を増やして、勉強する必要があると思います。そのために、自分から積極的に行動して、近くの牧場や牛を飼っている所に、見学や実習をさせてもらう事ができたいと思います。また、オーストラリアで日本と全く違う経営方法を見て、もっと海外の畜産について学びたいと思いました。

7. 畜産業界を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

今回の研修で出会った人たちは、畜産業界に携わることに生きがいを感じていて、動物が好きだという人が多かったように思います。そのため、私も将来そのように働くことを目指したいです。そして、多くの人に興味を持って欲しいです。これからの日本の畜産業界は大変なことが多そうですが、自分たちのような若い人の力で、今よりももっとさらに良くしていきたい、畜産の魅力をもっと知らせていくことをみんなで頑張っていきましょう！！





畜産アンバサダー

栃木県立那須拓陽高等学校
農業経営科 3年
岡崎彩女

1. テーマ

誰もが喜ぶ畜産業

2. キーワード

アニマルウェルフェア

3. キーワードのつながりと考察

①「誰もが喜ぶ畜産業」というテーマの“誰もが”を「生産者」「消費者」「家畜動物」「環境」と、大きく4つに分けてこの研修に臨みました。

家畜動物に対しては、キーワードのアニマルウェルフェアを実行していけば有益ではないかと考えていました。しかし、家畜動物を優先していけば、飼料代や牛舎の維持費などにコストがかかり、生産者にとっては大きな痛手になってしまいます。

また、日本人のアニマルウェルフェアに対する認知度が低いことや、動物保護指数が最低ランクだということをふまえて、日本は他の国と比べてアニマルウェルフェアの導入が遅れていると考えていました。

②オーストラリアの消費者は、「地元の畜産を応援したい」という理由から、付加価値がついた価格が高い畜産物を購入する特徴がありました。それに対して日本は、そのような高い畜産物よりも安いものを手に取る傾向にあり、オーストラリアと比較すると消費者意識が低いと言えます。日本人の消費者意識が向上すれば、「消費者が高い

ものを購入する→生産者の収益が上がる→家畜動物や環境への配慮をする余裕ができる」という好循環が生まれ、誰もが喜ぶ畜産に繋がると考えました。そのため、最優先



で消費者意識向上を目指すことが重要だと思います。それから、日本のアニマルウェルフェアは、日本でできる限りのことは実現しているのではないかと考えるに至りました。この研修を通して、きれいな水を与えたり、適温を保ったりするなどの配慮はされていることに気づきました。そのため放牧などの既成観念に囚われず、日本なりのアニマルウェルフェアを行うことが大切だと思いました。

③オーストラリアでは、小さい頃から農業を学んだり農場の見学に来てもらったりと、子供達が畜産に触れる機会が多いと感じました。この取り組みは、「将来は畜産に携わりたい」という夢を持つ子供が増え、命の大切さや畜産の現状を知ってもらえるきっかけになります。

今の日本では、都会に住む人や非農家の人は動物園などでしか直接動物と接することができない環境にあります。そのため、教育ファームや食農教育をより推進していくことが必要だと考えます。しかし、環境の条件が違うオーストラリアの長所ばかりを取り入れては、日本の畜産は成り立ちません。私はこの研修で、日本は個体管理がしやすいことや、水が豊富なことに改めて気づくことができました。オーストラリアの長所を取り入れつつ、これらのような日本の長所をのぼすことが、日本の畜産を元気にしていく近道になると私は考えます。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリアに着いて、最初に衝撃を受けたことは、牛が至る所に放牧されていたことです。オーストラリアで放牧を行っていることは知っていましたが、牛を見ない瞬間がないと感じるほど数が多く、日本では滅多にみるできない光景で、新鮮味がありました。また、日本と比べて土地の高低差がなく平坦なため、その分放牧もしやすいのではないかとすることも気づき

ました。

もう一つ印象に残っていることは、家族経営を行う酪農場を訪問した際、搾乳方法が立ったままで搾乳ができるパーラー方式だったことです。搾乳する人がいるスペースが体半分ほど低く、乳房と頭の高さが同じ高さになっていました。日本で私が経験した搾乳は、ずっとしゃがみ続ける体勢のため腰が痛いと感じていました。しかしこの搾乳方法なら、腰を痛めることなくミルカーを装着することができるので、労働の負担が減るのではないかと思います。また、牛と人との間に柵があり、万が一牛に蹴られそうになっても、けがの発生を防ぐことができます。

日本では現在、担い手不足が課題となっています。この農場のように、労働者にやさしい仕事場が日本にもたくさんあれば、畜産業は重労働だというイメージが少なくなり、畜産に携わりたい人たちが自然と増えていくのではないかと私は考えました。

5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

• どういうことを、なぜ広めたいのか

まずアニマルウェルフェアを主題として詳細を説明し、そこから日本の畜産現場の現状や、「家畜動物が第一」というオーストラリア人の価値観を伝えていきたいです。そして、飼育環境が悪い現場だけではなく、生産者は限られた土地の中で、できる限りの努力をしているということを広め、日本の畜産の良いところもアピールしていきたいです。

• それができると、日本の畜産はどうなっていくか

それによって、聞いている人全員が消費者として、畜産現場の現状や生産者の努力に気づき、消費者の意識が向上していくはずで、よって、考察でも話した好循環をつくることができると考えます。

• 次世代の畜産はどのようなものか

最後に、私が思う次世代の畜産は、家畜動物ファーストな畜産になることです。現在の日本では、先に述べたように、努力している生産者もいますが、鶏の飼育スペースが狭かったり、卵を産ませるために強制換羽をさせたりと、利益を優先とした飼育方法で経営している人がまだまだ多いように感じます。また消費者も、安さ重視で商

品を購入している人が多いのが現状です。案内して下さったオーストラリアの農家さんに、「利益とアニマルウェルフェアどちらを優先するか」と伺うと、「アニマルウェルフェア優先が当たり前」と全員が答えました。中には、「動物を大切にできないならこの仕事をするべきではない」答える農家さんもありました。このような考え方が普及すれば、日本の畜産はより魅力的になるのではないのでしょうか。そしてこれを実現するためには、消費者にも協力してもらう必要があり、誰も傍観してはならない課題です。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私はこの研修で、他の高校生メンバーと比べて、まだまだ畜産に関する知識が少なく感じました。そのため、高校生のうちに実習や授業を積極的に行き、知識を蓄えていきたいです。そして、もしまた同じ志をもつ仲間と交流する機会があれば、今回の研修よりもたくさんの意見交換をし、語り合いたいです。私は高校卒業後、四年制大学の農学部に進む予定です。大学では、動物行動学を学び、動物が喜ぶ瞬間、ストレスを感じる瞬間を研究していきたいです。それをふまえ、アニマルウェルフェアを取り入れた日本独自の飼育方法を生み出し、少しでも家畜動物が幸せに暮らせるような環境づくりを徹底していきたいです。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

私は高校に入るまで、畜産に関して全くの無知でした。そのため、畜産は家畜動物を育てる仕事だとしか考えていませんでした。しかし高校生になって、畜産は動物が誕生してから食卓に届くまで、様々な職種の人に関わって成り立っていることを知りました。そのため将来は、畜産関連企業で働くことも視野に入れていきます。みなさんも、数ある畜産の関わり方を知ろうとしてみて下さい。そして、自分に合いそうだと思う職種にぜひ挑戦してみてください。どんな職種でも、それは「食」を支える誇り高い仕事です！





畜産アンバサダー

千葉県立大網高等学校
農業科 3年
長谷川 真央

1. テーマ

若者が描く未来の畜産

2. キーワード

後継者不足

3. キーワードのつながりと考察

①『若者が描く未来の畜産』というテーマで、私は「後継者不足」について考えていました。現在の畜産業界には「稼げない・きつい・汚い」という3Kのイメージがあり、3Kが畜産業界への新規参入を妨げていると思っています。私はこのイメージをよくしていくことで、後継者不足で離農する人が減少し、人材が豊富な畜産業界にしていきたいです。渡豪前の研修で私は日本の畜産業界の課題である高齢化や不景気による経営悪化に着目していました。解決策としてIOT技術の活用で作業負担の軽減と作業のマニュアル化を施し、知識や経験がなくても畜産に携わることができる環境を整えることで従事者が増えるのではないかと考えていました。

②オーストラリアでは日本と同様に後継者不足が大きな課題となっていました。しかし、日本とは大きな違いがありました。それはマランダ高校のデイビッド先生の授業やファームステイ先で感じた「消費者の意識」です。オーストラリアでは普通科の中学校でも農業科目を受講でき、早い段階から農業の重要性を理解し、興味を持つ機会があります。農業は生きる上で必要不可欠な産業として尊敬され、ポジティブなイメージが根付いていました。この経験から、日本でも普通科高校や義務教育に農業を取り入れることで農業への理解と興味が深まり、次世代の農業を支える人材が育成されるのではないかと希望を感じました。実際に導入されれば、大きな意識の変化が期待できると考えます。

③課題となっている後継者問題の背景にある「3K」への対策として、私は今の日本に必要なのは消費者と生産者が互いに歩み寄る姿勢だと考えています。現在の日本では、消費者は品質や価格に敏感であり、生産者はそのニーズに応えようと努力しています。しかし、消費者がその努力を知る機会が少なく、生産者がどれだけ努力してもその価値が消費者に伝わりづらいと感じます。消費者が求める品質は安心と安全な畜産物です。それら生産するため、農場HACCPやGAPなどの第三者による審査・認証を得ることで担保できると考えています。農場HACCPなどにはマニュアル化や経営の見直し・改善の効果があります。安心安全をPRしたり実際の教育現場で実践等行っていくことで生産者の努力や価値が伝わりと同時に消費者の3Kのイメージの変化などが期待できるのではないかと考えます。多くの人が農業に対してポジティブな印象を持ち、人々の食料を生産しているのだという意識が醸成され、生産者も自信とプライドがあれば、少しずつ農業を始める若者が増えるのではないかと思います。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

今回のオーストラリアでの研修で私が不安に思っていたことは英語でのコミュニケーションです。私は英語が好きなので研修前はそれほど何も感じていませんでした。しかし初めての外国ということもあり緊張で胸がいっぱいでした。そんな私にホストファミリーやホテルの管理人さんたちから don't be shy と緊張をほぐしてくれる言葉をかけてくださり、会話全てを英語で行うことができました。また食事や街の風景など全てが衝撃的でした。その中での大きな印象が一つあり、それは果てしない地平線の先まで続く放牧地です。千葉県から来た私は初



めて広大な牧草地で牛が草を食べる姿を実際に目にし、自然と共存する畜産の魅力を実感しました。研修中の楽しかった思い出で一番に思い浮かんだのはマランダ高校での電気柵の授業です。皆で円となり手を繋ぎ、電柵に触った時には国が違っても絆で繋がれているよう印象を持ちました。私はこれから日本という国だけでなく、今回訪れたオーストラリアとまだ知らない国へ出向き、たくさんの人や動物、文化と触れ合いたいと思います。私の人生を変えるきっかけとなる研修でした。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういふことを、なぜ広めたいのか

私はこれからの畜産の未来の為に、畜産は楽しく誇りを持てる職業だということを強く広めていきたいです。畜産は、農家一人一人の個性や理想を表現できる多様な職業だと考えています。研修で出会ったオーストラリアの農家の方たちは、自分のライフスタイルを大切にしながら地域の特性を活かし、生産に取り組んでいる姿は畜産が単なる職業ではなく、農家自身のライフスタイルや価値観を表現できるものであると感じました。私は日本の先人の方々がたくさんの困難や試練がある中、発展させてきた畜産を私たちのライフスタイルや価値観を融合させながら発展させ、この先100年続くものとしていきたいです。

・それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

時代に合わせたライフスタイルや次世代の人たちの価値観を融合させることで3Kのイメージの変化や働き方改革へとつながると思います。またIOT技術やスマート農業による作業の効率化の変化は、日本の畜産を大きく変えると思います。

・次世代の畜産業はどのようなものか

若い世代や様々な経験を持った人が参入しやすい畜産業になって欲しいです。それを実現するには3Kイメージの変化、作業効率の変化、外国とのギャップ、世界情勢の変化などの課題がたくさんあります。それらを担っていく私たちはこの多様な変化に対応しなくてはなりません。それを乗り越え

た先に100年続く経営基盤があると思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

牛と出会って10年、牛は私の人生そのものと言っても過言ではありません。これまで、数々の場面で牛たちに支えられてきました。私は家畜人工授精師・受精卵移植師の免許を取得する予定です。AI・ETは経営を支える基盤となる技術です。その技術と畜産ティーン育成プロジェクトを通じてオーストラリアで学んだ経験は、私にとって大きな糧となりました。海外の畜産現場での学びを活かし、牛にとってより良い飼育方法や環境を追求したいと思っています。高校卒業後は、北海道で3年間の免許の取得と技術の向上を目指し、牛の繁殖、飼料、飼育環境のすべてにおいて最高のものを提供できる酪農家を目指します。オーストラリアで得た知識と経験を活かし、これからも牛と共に歩み続け、彼らにとって最善の環境を作りあげていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私はこのプロジェクトを人のつながりのお陰で知ることができました。しかしこのような活動に参加することは初めての挑戦であり当初は不安しかありませんでした。いざ研修が始まると多くの新しい知識や自身の価値観の変化を経験しました。さらに一緒に活動する中で、信頼できる大切な仲間もできました。このプロジェクトは私にとって挑戦を超え、大きな成長と新たな出会いをもたらす貴重な経験となりました。また人の築く縁や絆は一時的な関係ではなく、一生にわたる大切な財産だと思います。協力し合いながらみんなで畜産を盛り上げていきましょう。





畜産アンバサダー

東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科 2年
田木 希実

1. テーマ

私が働きたい畜産農家

2. キーワード

牛の幸せ

3. キーワードのつながりと考察

①「私が働きたい畜産農家」というテーマで、自分自身がどんな条件の場所なら働きたいか考えたとき、私は最初、オーストラリアに行く前は、自給飼料、放牧などを取り入れることでコスト削減に取り組み、赤字をなくし、収入を増やしていくことに重点を置いた場所で働きたいと思っていました。そして、自身が設定したキーワードでもある、「牛の幸せ」がある、ということは、あまり重要視していませんでした。なぜなら、今の日本では、輸入飼料の高騰などで生産コストが上がっているのに対し、牛乳、牛肉などの販売価格は上がらず、赤字経営の農家が増えているからです。そのため牛の幸せや、牛のストレスフリーなどを大切にしている余裕はないと考えていました。

②しかし、オーストラリアで研修した後は、「牛の幸せ」を第一に考えた農家で働きたいと強く思いました。訪問した農家の方々は皆、アニマルウェルフェアへの意識が高く、牛もストレスが少ない環境で、のびのび育っていると感じました。とても素敵だと思ったし、日本にも、もっと取り入れたいと考えました。そして農家だけでなく、国民全体の意識も高かったです。肉や牛乳を購入する際に、それらの生産元である家畜が、どのような環境で育てられているのかを重視していて、日本との違いに驚きました。日本でも、家畜が育てられた環境を重視する考え方を広めることができれば、国全体の意識が高まり、家畜が育った環境を重視して畜産物を選ぶ人が増え、私が働きたい「牛の幸せ」を考えた農家も増えると考えます。

③国全体の意識を上げ、畜産をより良くしていくためには、たくさんの人に畜産を身近に感じてもらえるような工夫をしながら、

経営を行うことが大切だと考えます。例えば、オーストラリアで訪れた酪農家さんは、地域の幼稚園に牛を連れていき、触れ合い体験を行い、小学校の校外学習で見学を行うなど、牛乳を出荷する以外にも、いろいろな取り組みを行っていました。小さい頃から家畜と触れ合い、家畜が育つ環境について知ること、畜産物を買う時も、家畜の育った環境を重視する考え方が生まれるのだと思いました。畜産について知ってもらうには、実際に触れ合うことが大切だと考えます。農家が、触れ合い体験や見学を行えるような余裕をもち、多くの人が家畜と触れ合えるような環境を作れると良いと考えました。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリア産の牛肉は日本のものと違い、赤身が多いのが特徴と聞いていて、実際に食べる前は繊維質で硬い肉なのかと思っていました。でも全然そんなことはなく、柔らかくて、沢山食べてもくどくない、とても美味しいお肉でした。柔らかい理由の一つとして、肉牛を長く肥育するのではなく、産まれた子牛を生後9ヶ月ほどで出荷し肉にすることで、成牛よりも柔らかい、おいしいお肉を生産する方法があるそうです。そして、子牛をたくさん売り、生産の効率も上げることができるそうです。

日本では肉牛にたくさん濃厚飼料を与え長期肥育をし、サシを沢山入れて一頭あたりの質を高める方法が取られています。沢山お金や時間をかけるので、サシが沢山入った牛肉は高級で、普段の生活ではあまり食べずに、特別な日や、お祝い事がある日に食べます。ですがオーストラリアのような方法だと、一頭あたりのコストが低く、牛肉の値段がそこまで高くならずに、普段の生活に取り入れられるような牛肉が生産できると考えます。また、一頭あたりにかかる期間も短いので、効率の良い生産形態になると考えました。



従来の長期肥育の方法に加え、短い期間で育てられる国産牛肉を生産することで、日本での牛肉の需要を更に高めることができると考えました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• どういうことを、なぜ広めたいのか

私は、日本の畜産の素晴らしさと、家畜が育つ環境重視の考え方について広めたいです。日本で生産される畜産物は、他の国に比べて安全性が高い面があると思います。また、牛肉生産ではサシが沢山入った牛肉を生産していて、高品質で、素晴らしい日本ならではの畜産物だと思います。しかし、最近は牛肉が余っているから高く売れない、子牛の落札価格が下がっている、など、マイナスな話をよく聞きます。また、飼料高騰により赤字経営の農家が増えています。このまま日本の畜産が衰退してしまうと、国産の牛肉や牛乳を買えなくなってしまう。それを防ぐため、多くの人に、日本の畜産がどれほど大切で、素晴らしいものなのかを伝えていきたいです。

• それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

素晴らしさを伝えていくことができれば、畜産への関心が集まり、畜産についてもっと知りたい、という人も増えると思います。そして、多くの人が畜産の内容を知ることができ、畜産の魅力や楽しさについても知ることができ、畜産農家として働きたい、という人も増え、日本の畜産は活発になっていくと思います。

また、家畜が育つ環境重視の考え方が広まることで、今の飼育環境より、家畜のストレスを減らせるような飼育方法が確立され、アニマルウェルフェアにも配慮できるようになっていくと思います。

• 次世代の畜産業はどのようなものか

最後に、これらの事を行う事で確立していく、次世代の畜産業は、多くの人が畜産に関心を持ち、畜産物だけでなく、家畜が育てられる環境も考えていける、生産者も消費者も、お互いのことを考えながら続けていける畜産だと思います。畜産のことを知らない人はまだまだ沢山いるけど、少しずつ伝えていくことで、より良い畜産を作っていけたら良いと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

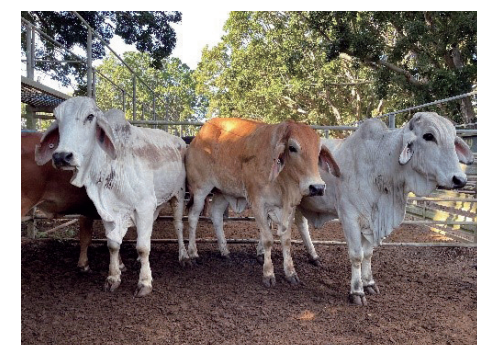
私の夢は、牛の幸せを考えることで、人の

幸せにも繋げられる肉牛農家になることです。牛の飼育スペースを広く取り、放牧場への行き来が自由にできるような造りにすることで、牛が健康的に、のびのび育つようにしたいです。また、ハエの発生を防ぎ、暑熱対策をし、飼育環境を清潔に保ち、良いエサと水を与え、体を掻けるようなブラシを設置して、牛が病気の時、すぐに治療できるような環境を作りたいです。そうすることでストレスを減らし、質の良い肉を作ることができると思います。そして、牛がストレスなく自由に育ち、消費者の方が質の良い肉を食べて、幸せな気持ちになってくれたら、私はとても幸せです。

今の段階では、実現は難しいかもしれませんが、これから沢山学んで、知識をつけて、夢を叶えられるよう頑張ります！

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業に携わる上で、楽しいこと、大変なことが色々あると思います。でも全部ひくくめて畜産業の良いところだと思うし、人が生きていく上でとても大切な仕事で、誇りを持って働けると思うので、大変なことがあっても、めげずに頑張っていきたいです。そして、その魅力をたくさんの人に伝えて、畜産業の認知度を上げ、日本の畜産がより良くなるように、そして、これから先もずっとずっと続けていけるような畜産を形作っていけるように、一緒に頑張りたいです。





畜産アンバサダー

東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科 3年
阿部 未悠

1. テーマ

畜産でアイデアを生かしたい

2. キーワード

繁殖

3. キーワードのつながりと考察

①オーストラリアでは、広大な土地を有効活用し、放牧を主体とした畜産が行われているというイメージがありました。そのため、農家一戸あたりの飼養頭数も莫大であり、大規模な畜産経営を可能にしていると考えました。飼養頭数が多くても持続的な畜産を可能とする為には、乳牛・肉牛のどちらも繁殖成績が高水準である必要があります。

そこで、発情発見へのIT技術の導入など牛に対して少ない人手でも高い繁殖成績を可能とする、先進的な繁殖管理方法が浸透しているだろうと考えていました。また、国内の飼養頭数が多いため、血統の近い牛を交配しないようにする為の管理プログラム等も存在するかもしれないと考えていました。

②見学した複数の農場では自然交配が行われていました。1~3頭のオス牛を農場内で飼育し、9ヶ月間ほどメスの放牧地に一緒に放牧するという方法でした。これは大規模である為に人工授精や凍結精液にお金をかけることが難しく、また屋外での放牧であるため人の手による細かい繁殖管理が行えないのだろうと考察しました。

そのような繁殖環境の中で、実際には牛群全体の受胎率が約92%ととても高い農場もありました。このように自然交配であっても受胎率が非常に高いのは、高泌乳やサシなどを求めた飼養が行われていないためだと考えます。また、牛一頭一頭の値段としての価値が低いと受胎しない牛をすぐに出荷することができることも要因だと考えました。

③日本でしか飼養されていない和牛は飼養頭数が少ないため、国内で完結する精密な血統管理をすることが必然です。今の日本には自然交配を取り入れることは出来ませんが、乳牛において今後“A2ミルク”や無角遺伝子を発現させる精液など、消費者、生産者のニーズに合わせた牛の生産、改良を進めるために今以上に海外の種雄牛の高度利用などを進める必要があると考えます。また、オーストラリアの暑い地域では暑さに強いアンガス種とブラーマン種の交雑種が主に飼養されているのを知ったことがきっかけで、温暖化が進む日本の気候に適した品種を飼養するという考え方が生まれました。暑さに強く小柄で飼養しやすい国産牛が普及すれば、今よりも販売価格を抑えることができ、国産肉の消費量を増やすことが出来るかもしれないと思いました。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリアの特徴として、水の利用に制限があること、土地が広いこと、同じ国内であっても地域によって気候の差が大きいことなどがあります。

そのため、オーストラリアで行われている畜産業に機械化など新しい畜産を行うことはリスクも大きく中々スマート農業などの取り入れが行われない現状があることを知りました。しかし、頭数が多く大規模であること、飼料の自家製産が実現出来ているため今までの方法から変化させる必要があまり無いということも分かりました。

さらに、日本の舎飼いとは異なり放牧での飼育である為アニマルウェルフェアへの意識が日本よりも高いのだと渡航前は思っていました。日本でもウォーターカップの利用や小規模農家が隣接している為に防疫管理への意識が高いなど、消費者に見えにくいアニマルウェルフェアを実現出来てい



ることを再認識することが出来ました。また、搾乳工程において前搾りを行わないことや人工哺乳をしないということに最初は抵抗を覚えたことが、規模が大きく家畜の価値が低価格であり、改良が進んでおらず生産病の発生が少ないオーストラリアだからこそできる畜産の形なのだと理解することも出来ました。

今後、海外のやり方をただ取り入れるだけではなく、その国に合わせた畜産を次世代に継承しより発展させていくことが重要だと思います。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• ということを、なぜ広めたいのか

私が畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいことは、牛乳・牛肉・豚肉・鶏肉・卵など沢山の国産の畜産物を食べて欲しい！ということです。

今回の研修で様々な農場や、食品加工場など食べ物に関わる仕事をされている方々に出会いました。その中でも全員が共通していたのは、やり方や規模は違っても自分たちが作り出す製品をより良いものにして消費者に美味しく食べて欲しいという想いで畜産業に携わっているということです。動物が一生を過ごす環境をより良いものにすること、宗教などにより食への考え方が異なる人々への配慮など、数え切れないほどの工夫が各現場で施されていました。けれど、あくまで産業である以上経営の安定化が求められます。資金や労力とバランスを上手く取りながら、新しい工夫に挑戦していくためには、安定して持続的な収入が必要です。

• それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

もし、今以上に畜産物の消費量が高まれば、農家の収入に繋がります。これは「家畜に

とってより快適な飼養設備を整えること」、「資源活用や資源循環に取り組む環境に配慮した新しい畜産の形づくりに挑戦すること」、「スマート農業などを取り入れることにより働き手の労働環境の改善や効率化」などを実現するきっかけになり、さらに畜産業を発展させることに繋がると考えます。

• 次世代の畜産業はどのようなものか

次世代の畜産業は、経済的、社会的、精神的に人も家畜も豊かに過ごせる必要があると考えます。畜産業をこの先の未来に繋げるためには家畜の環境や生産者の利益どちらかひとつだけではなく、全てのバランスが平衡に取れる畜産経営をめざすことが理想だと考えます。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来、持続的な畜産業の実現に貢献したいと考えています。

今まで酪農について学び、直腸検査や人工授精などを行う中で、繁殖について興味を持ちました。畜産業において繁殖成績の向上は持続的な経営をする上で最も重要になってきます。

そして今、繁殖を初めとする遺伝的改良を通して、スマート農業に適応する家畜の生産や消費者のニーズに合わせた畜産物の生産を可能にする研究が進められています。繁殖技術だけに囚われず、飼養環境や牛の栄養状態などからおこる不受胎の原因解明や更なる受胎率の向上への様々な角度からのアプローチを通して日本の畜産を発展させ 未来の畜産業を支えていく人材になりたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産は奥が深くて本当におもしろい産業であるということを1番に伝えたいです。私たちが毎日健康に生活できているのは、大昔の人が土を耕して耕作を初め、野生種を家畜として利用するようになった為です。その家畜を人の手で繁殖して改良を続け、原種からは想像できないほどの肉量や泌乳量を今の家畜たちは実現させています。今後、昔の人が繋いできた畜産をより発展して未来に繋げることが出来るかどうかは私たち若い世代にかかっています！一緒にがんばりましょう。



畜産アンバサダー

長野県佐久平総合技術高等学校
食料マネジメント科 3年
橋内 晟

1. テーマ

若者が描く未来の畜産

2. キーワード

若者の意識

3. キーワードのつながりと考察

①若者の意識と考えたとき、現在日本は高齢化や担い手不足による後継者不足などの問題があげられます。その原因は若者の意識が関係しているのではないかと考えました。一方オーストラリアでは、農業がとても盛んで日本のような高齢化や後継者不足などの問題はあまりなく、農業に対する若者の意識が根本的に違うのではないかと考えていました。日本よりオーストラリアの方が、若者が就農しやすいイメージをしていました。若者の意識を変えることと、日本の若者がもっと農業に興味、関心がもてるような環境づくりがよりテーマに近くと考えていました。

②実際に研修に参加すると、オーストラリアでも若者の農業従事者が減っていて就農率が低くなってきていることがわかりました。近年、オーストラリアでは、土地代がとても高く、新しく農業を始めるには難しい状況だということがわかりました。若者の意識という点では、マランダ高校のように、幼い頃から畜産に触れ合うようなイベントなどをすることで、消費者としても生産者としても畜産に対しての意識がとても高くなることがわかりました。実際にお世話になった、ファームステイ先のフィリッ



ポさんは農家で生産者であり消費者でもありました。ある日「農業はとても大切な職業だ」と熱く語っており、このことから畜産はとても大切に尊いという考えが、当たり前のように根付いているんだと感じました。若者の意識は若者が描く未来の畜産に強く関係していると思います。



③今後、未来の日本の畜産には今回の研修を通して感じたことや学んだこと、グループで出たアイデアなどをSNSを利用し全国に広げていき畜産をもっと盛り上げられれば良いと考えています。考えたアイデアを実践し、広めていくことで新しく畜産に興味を持つ人が増えれば畜産の新規就農者が増えていき、後継者不足などの問題解決につながっていくと考えます。また今回の研修で培った知識や経験を活かし、私達が未来の畜産を引っ張っていくリーダーのような存在になり、後世の畜産に貢献できるような活躍をしていきたいです。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリアでは土地や機械などの規模にとっても驚かされることがとても多くありました。研修で行ったジョンソンズファームでは、約6万エーカーという日本では考えられないような広大な土地で複数の農業を行っていることがオーストラリアならではの、とてもすごいと感じました。自分たちが研修に参加した、クイーンズランドはオーストラリアでも農業がしやすいところでした。そのようなところでも、近年農家の人達が減っていることを聞いてびっくりしました。またオーストラリアの農家さんは、一人ひとり自分たちの仕事に対してとても誇りを持っていたのが、とても印象に残っています。自分もこれからやる仕事に誇りをもって行きたいと思いました。初めての海外で、オーストラリア研修をするにあたって最初は不安なことがとてもたくさんありました。一緒に行く仲間と協力できるかや、初めての海外だったこともあり、先生やメンターの方々、現地の気さくな方のおかげで、とても充実したオーストラリア研修を終えることができました。普段の学校生活では体験できないことや、自

分の得意とする鶏のことだけでなく、広い世界を知れて、とても有意義な時間になりました。帰国してからの報告会では、チームで活動していて仲間の知識量や意見の違いなどで驚かされることがたくさんありました。何度も考え直して一つの発表になったときの達成感は、一生忘れられない体験です。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• 何を、なぜ広めたいのか

畜産は食料自給率の向上や地域経済の活性化においても、非常に重要な産業であると考えています。さらに、やりがいもあり、とても楽しい職業という思いを全国に広めていくアピールをSNSなどを駆使して畜産アンバサダー活動をしたいと考えています。日本の畜産を広めていくことで将来の職業の選択肢に畜産が入ってほしいと考えています。そのためにまず日本で起こっている問題や畜産物の重要性を知ってもらうことが必要だと考えます。普段私達が何気なく口にしている肉や卵、乳製品などは家畜によって生産されており、それらに携わる畜産農家がいるということを、知らせるために畜産アンバサダー活動をして広めていきたいです。

• それができると、日本の畜産はどんなになっていくか

そのような活動をする事で畜産のイメージアップなどに繋がります。イメージアップをすることが、様々な世代に畜産の良いイメージを持ってもらうことに繋がると考えます。また、新規就農者が増え就農率の低下などの問題解決につながり、これからの畜産を担っていく人が増え、また畜産が現在よりも活発になっていき機械化などの点で、畜産がもっともっと発展していけばいいと考えます。

• 次世代の畜産はどのようなものか

私が考える次世代の畜産は「若者中心の畜産」で畜産が楽しい職種になることだと考えています。若者が中心の畜産となることで、様々な意見やアイデアが生まれより畜産としても魅力を日本の全国に発信できるのではないかと考えます。今現在畜産は3Kなどのマイナスイメージを持っている人が多いと思います。畜産がなければ今後、世の中の食を支えている畜産物はなくなってしまいます。畜産が世の中から消えてしまうということは、とても大きな問題であるという事実をいろいろな人に

知ってもらいたいと思います。そのためにまず、自分がマイナスイメージを変え、畜産は楽しい職業ということを広めていき畜産に対するイメージを変えたいです。

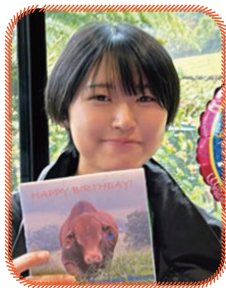
6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は自分の地鶏を作り地元の佐久に還元したいと考えていました。しかし、今回の研修を通して改めて日本の農業の技術力の高さを知り、今まで以上に養鶏業だけでなく広く様々な分野の畜産に携わりたいという思いが強くなりました。実際に、今回の研修で主に乳牛、肉牛のことを学び、他の分野の事も、自分の将来やりたい養鶏業にも、どうやったら活かしていけるかなどを考えるきっかけとなったことが広い分野の学びを深めていく重要性を感じました。また、色々な視点から考えられるようになり、今までにない問題解決につながっていくと思います。高校卒業後は4年制の大学に進学し、畜産に対する学びを深め、これからの畜産を担う若者となり、さらに盛り上げていきたいです。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私自身、農家出身だったこともあり、この研修を応募したときからとても楽しみにしていました。この研修を通して、畜産の魅力を改めて知ることができました。畜産は、きついことがたくさんあると思いますが、それ以上にとてもやりがいがある大切な職業だと思っています。未来の畜産は、私達が変わっていかなければなりません。どうやったら今後の畜産がより良くなるのかみんな考え畜産をより素晴らしいものにしていきましょう！





畜産アンバサダー

静岡県立田方農業高等学校
動物科学科 3年
熊倉 花

1. テーマ

誰もが喜ぶ畜産業

2. キーワード

畜産農家の誇り

3. キーワードのつながりと考察

①誰もが喜ぶ畜産業というテーマで畜産農家の誇りについて考えたとき、最初はつながることのないテーマとキーワードだと感じた。誰もが喜ぶ畜産業は、生産者と消費者、家畜動物が喜ぶような畜産業のことだと思う。例えば、生産者が実際に働いている牧場の見学・ふれあい体験を行うことや、家畜動物に対してできる限りのアニマルウェルフェアを施してあげるなどだ。一方、畜産農家の誇りは私の中では、儲けがたくさんあるということが誇りに繋がると感じていた。畜産農家が仕事に誇りを持つためには、生産者のことだけに焦点を当てなければ成立しないものだと考えた。しかし、私が思っていた畜産農家の誇りを尊重してしまうと、誰もが喜ぶ畜産業が程遠い存在になってしまうのでとても難しいつながりだと感じた。

②実際に研修をしてみて、オーストラリアの畜産農家さん達に仕事の誇りについて伺ったところ、多くの農家さんが「牛が好きなので牛に携われる仕事ができることがとても誇りに思っている。牛に携われる仕事はとてもカッコいい。」などと、牛が好きという気持ちが誇りに繋がっていた。日本の畜産業は、3K（きつい・汚い・稼げない）が定着していると感じていたのですが、私の中では儲けることしか誇りに思わないのではないかと感じていた。さらに畜産農家さんたちは、子供などを対象に牛のふれあい体験や現場体験などを積極的に取り入れていることで、消費者に家畜動物に対する感動や喜びをひとつの学びとして教えている。そのことから、誰もが喜ぶ畜産業を

行うことで、畜産農家の誇りである牛が好きという気持ちを牛に携われることができる喜びが大きくなるのではないかと考えた。これが導き出された。

③私は、今回の研修成果を地元の農家さんに反映したいと考えている。例えば、地元の観光牧場や、農家さんが実際に働いている牧場へ、地域の方がふれあい体験や、乳製品作り体験を行えるようにしたい。このようなことを行うことで、地域の方々は、畜産は身近なものでなくてはならないものだと思わせたいと同時に、畜産の悪いイメージ（3Kなど）がなくなるのではないかと考えた。消費者の畜産に対する意識が変わることは、生産者としてはやる気が起きるきっかけになり、双方の相乗効果でより良い畜産業になるとともに、本来求めていた経営ができるのではないかと考えた。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

私が研修を通して1番感じたことは、アニマルウェルフェアの意識の高さだ。オーストラリアには、広大な敷地があり家畜動物を育てるには放牧をすることが基本になっている。アニマルウェルフェアがほとんど達成されている放牧地の動物は心置き、とても幸せそうに過ごしていた。放牧はアニマルウェルフェアの達成に強く関係しているが、日本はオーストラリアに比べ、土地が小さく平地は都市化により使用されているので、ほとんどが舎飼いだ。しかし、放牧をすること以外にもアニマルウェルフェアを取り入れることができる。私は、今回の海外研修を通して、日本にできるアニマルウェルフェアの取り入れ方を考えた。例えば、動物らしい生き方を尊重するためにフリーストール方式やフリーバーン方式を取り入れたり、ふれあい体験を通して消費者が畜産に対する考えを良い方向へ導くことができ、全体として良い畜産経営に繋



がっていくのではないかなどを考えた。後者の考えは、直接はアニマルウェルフェアに繋がっていないが、将来的に繋がっていけるような存在になると感じた。オーストラリアはオーストラリアなりの、日本には日本なりの経営方法があることを再認識した。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういうことを、なぜ広めたいのか

これから畜産アンバサダーとして、畜産の魅力を広めていきたい。具体的には、牛など家畜動物のふれあい体験を開催したいと考えている。学校や親子で体験に参加するとしたら、教育の一部に畜産について学ぶことができ、小さい頃からの学習が将来、より良い畜産業に繋がる。また、この学びは家庭教育にも取り入れることができると思う。体験で学んだ子供が親になったときに、自分の子供に畜産の魅力などを教え、その子供が親になったときに...などの良い循環ができる。ふれあい体験などの、生産者と消費者が直接関わる機会をつくることで、お互いの求めている畜産経営や商品などを知ることができる。さらに地域の牧場に行く機会があることで地産地消に興味を持ち、お互いに良い関係ができるのではないかと考えた。このようなことが続くと、日本が素晴らしい畜産業になるのではないかと。以上のことから、畜産の魅力を広めていきたいと強く感じた。

・それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

これができると、日本の畜産業は生産者と消費者の連携が強くなると思う。生産者は消費者が理想とする経営ができ、消費者はより良い畜産物を購入しようと畜産業のことをもっと知るようになり、生産者に良い刺激となる。六次産業や地産地消など日本の畜産業がこれから発展するときに大事になってくるが、経営上難しいことを取り入れる良い機会になると思う。

・次世代の畜産業はどのようなものか

次世代の畜産業は、今ある悪いイメージをみんなで変えていける。畜産業が生産者だけの負担ではなくなり、国民全員の課題と



してみんなで支えていくものになると感じる。より良い畜産業になっていくと、新規就農や若者の畜産業の就職率が高まると感じる。畜産業が輝いていけるように、畜産アンバサダーとしてできることから全力で努めたい。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は、労働力・担い手不足、飼料価格の高騰、高齢化などの今ある日本の畜産業の課題を解決できるような酪農の経営者になりたい。畜産業の3K（きつい・汚い・稼げない）というわるい概念をなくし、畜産のイメージが、カッコいい！楽しい！おもしろい！に変わっていく過程に携わりたいと思っている。将来の夢に少しでも近づくために、今できることを全力で行いたい。そのために、エコフィードやアニマルウェルフェア、若者を積極的に取り入れている牧場へ訪問し、どのような経営をしているのか自分の目と耳で学び、吸収する。その学びを無駄にしないよう、今良い方向に進んでいる畜産を学校や農家さんに発信していく人になりたい。

7. 畜産をを目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

オーストラリア研修を通して、畜産の魅力を確認し、もっと日本の畜産を盛り上げていきたいと感じた。より良い畜産にしていけるためには、今回共に研修へ行った19人の仲間達のように、より良い畜産に強い志を持っている人の協力が不可欠だ。私は、畜産アンバサダーとしての活動が、色々な人に畜産の魅力を知ってもらえるきっかけになれるよう頑張りたい。共に日本の畜産を盛り上げていこう！！



畜産アンバサダー

岐阜県立岐阜農林高等学校
動物科学科 3年
福田 愛

1. テーマ

若者が描く未来の畜産

2. キーワード

安定した経営

3. キーワードのつながりと考察

①私が描いている未来の畜産として、牛と人が幸せになるための1つの方法として放牧をしていきたい。しかし、安定した経営を考えた時、実現させることは難しいと思った。若者が描く未来の畜産とは、私たちが目指す畜産をすることであり、いろいろなリスクもある。しかし、そういったリスクをなくし畜産を安定的に続けていくための対策を考える機会を与えられたと考えている。例えば、やりたいことが六次産業化だったとき、加工品を製造するために施設・設備が必要になる。つまり最初は設備を整えるために費用が必要だ。費用だけでなく経営が安定したものになるには5年後、10年後の先の目標が必要だ。今の時点では、私は自分たちが目指す畜産の安定した経営を実現させることは難しいが、だからこそどうしたらこの課題が解決できるか力を付けたいと思った。

②先程も述べたように、私が描いている未来の畜産として、牛と人が幸せになるための1つの方法として、オーストラリアで見たような放牧をしていきたい。しかし、日本の国土はオーストラリアよりも狭く、あるとしても中山間地域や耕作放棄地などしか土地がない。特に放牧に利用するには土地が狭く点在している点や、農場や牛舎が民家の近くにあることが多く、地域によっては周辺住民の理解を得にくい点など、問題点が多くある。私はそのことを解決するために、複数の酪農家協働で放牧を行うということをしていきたい。複数の酪農家で行うことで放牧に十分な土地を確保したり、団地化することで周辺住民の理解を得やすくなったりするなどの利点があると思う。そのために協同組合があるのかもしれないが、もっと数件の経営条件の似た農家でまとまって共通の課題を解決できるようなつ

ながりを持ちたい。

これは経営にとって多くの利点があると思う。こうすることが、「若者が描く未来の畜産」を実現する第一歩となり、「経営の安定」の実現にもつながると考えた。



③研修で得たことを、まずは情報として日本に伝え、その後技術として反映すればいいと考える。今回の研修ではオーストラリアの管理作業や畜産をどう伝えるかなど様々なことを学んだ。しかし技術的な面などでは、土地の広さなどの違いがあるため同じようにそのままの導入は難しい。日本に導入していくためには、オーストラリアの技術を日本の畜産に合うように変えていく必要がある。そのことを考えるためにも、まずは私たちが学んだことを日本に広めていくことがいいと考える。このことが、日本がどうしていくべきか考えるきっかけにもなり、研修成果が反映されると思う。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

初めて日本以外の国の畜産に触れてみて、まず、土地の広さや家畜の品種の違いなどの細かい違いがあった。さらに、畜産に対する考えが日本と大きく違うと気づいた。オーストラリアの農家の方々は、畜産は人々の生活を支える産業として誇りを持っており、畜産について暗い考えを述べる人はいなかった。またアニマルウェルフェアについても大きく違っていた。日本では、アニマルウェルフェアを第一に考える農家は少ないと思う。

しかし、オーストラリアでは、アニマルウェルフェアが守られなければ畜産を続けるべきではないという意見もあり、国全体でアニマルウェルフェアの考えが浸透している。私はこのオーストラリアの考え方はすてきだと思った。将来こんな風に畜産に誇りを持ち、動物に対しても幸せに暮らせるような酪農をしたいと思った。またこのような考えが日本に広まってほしいとも思った。なぜオーストラリアはこのような考え方なのか考えたとき、それは畜産が身近なものとしてあるからだと考えた。畜産が身近にある分それについて考える機会も増えると思う。また、商品を選ぶとき安さだけでは

なく、品質やそれまでの管理方法などにもこだわっていた。そんな価値観が親から子へ引き継がれることもあり、畜産を誇りに思っていたり身近に考えたりする人が多いと思う。

日本にも和牛や牛乳など誇れるものがある。だから、オーストラリアのように畜産に対して誇りを持つ人が増えてほしいと思った。そのためには、私自身がもっと酪農について、牛について、経営について深く学び、技術を身に付けていく必要があると思った。大学進学への決意がさらに強くなった。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういうことを、なぜ広めたいのか

畜産は楽しい・誇りだということを広めたい。そして、畜産を身近に感じてほしい。今の日本では、畜産のイメージは肉体労働であり、専門的な知識が必要なことから閉鎖的な産業だというイメージもある。また、消費者は価格の安さを重視し、農家さんの誇りともいえる商品が届きにくいこともある。しかし、オーストラリアでは農場に子供たちを呼んで酪農を通じて様々なことを教えるなど、身近に感じられるような取り組みがあった。

特に感じたのは、オーストラリアの消費者は生産者のこだわりを理解し、値段だけではなく製法などにもこだわって商品を選んでいく。これは、畜産について生産者だけでなく、消費者も知識を持っているということだ。畜産を楽しい仕事で誇りに感じているのは生産者だけでなく、消費者も感じていることが分かった。だから、多くの人に畜産を身近に感じてもらうための一歩として広めていきたいと思った。

・それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

畜産業が様々な面で発展すると思う。例えば、新規就農者が増えたり、いろいろなこだわりが詰まった生産物ができたりする。酪農が楽しく、誇りに感じられる人が増えれば、畜産業をもっと身近に感じられる人も増えると思う。今は遠い存在として、専門知識が必要など職業として避けられがちな産業だ。しかし、身近に感じられるということは、職業として関わりたいという人も増えるのではないかと考えた。そういう人が増えることで、新規就農者が増えたり、畜産業の発展に貢献したりする人も増えると思う。また、消費者側でも畜産業や生産者の誇りを知ることによって、畜産物を買うときに値段以外の新しい基準で買う人もいるだ

ろう。

多くの人が畜産について身近に感じられれば、たくさんの恩恵を畜産業に与えると思う。だから、畜産業が様々な面で発展していくと思う。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、家畜の幸せも経営も両立させることができる農業従事者だ。家畜の幸せとは、健康を保ち自然に近い姿で過ごすことができることだと考える。私が畜産に関わりたと思うようになったのは、のんびりと過ごす乳牛を好きになったからだ。だから、そのような幸せに過ごせる家畜が増えてほしいと思った。でも、経営が不安定になるなど、その牧場が続けられなくなってしまったりは家畜の幸せを守ることはできない。だからこそ、私はその2つについて両立させていきたいと思った。

その方法として、私は放牧を行いたい。しかし、今の日本ではすぐに放牧を取り入れることは難しい。だから、大学で放牧を導入していくために研究をしていきたい。そして将来も酪農に関わり続け、畜産の発展に貢献していきたい。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

いまだに畜産は3Kの「くさい・きたない・稼げない」や動物虐待というイメージを持っている人もいます。だから、畜産業を目指すことはやめた方がいいといわれることもある。でも、畜産業は生産者の様々な努力で家畜と人の幸せを両立し、人々の食を支えられる素晴らしい産業だと思う。なにより畜産業は家畜と身近にかかわれる楽しいものだから目指すのをやめずにやり続けてほしい。





畜産アンバサダー

大阪府立農芸高等学校
資源動物科 2年
甲斐 柚花

1. テーマ

私が働きたい畜産農家

2. キーワード

持続可能な畜産

3. キーワードのつながりと考察

①「私が働きたい畜産農家」というテーマで「持続可能な畜産」について考えた際、私は大規模で経済的に持続可能な畜産農家で働きたいと考えていました。研修前は利益をどれだけ得ることができるのかが未来の畜産において重要なことであり、大規模な農場で従業員を雇い、機械の導入や多くの牛を飼養することで利益が安定・向上するものだと考えていたからです。

②しかし、オーストラリアでは多くの畜産農家が牛や家畜を第一に考えた経営を行っていました。広大な大地で瑞々しい牧草を食べ、のびのびと育つ牛たちを目の当たりにして本当に私がなりたい畜産農家とはどのようなものなのかがわかりました。オーストラリアでは、乳牛の平均経済寿命が約10年であり、日本の乳牛の平均経済寿命である5～6年よりも長いことを学びました。これには、オーストラリアの農家さんたちの畜産についての考え方が関係していると思います。多くの農家さんは「家畜の幸せを1番に考えていないと畜産は経営できないし、アニマルウェルフェアについて配慮することは当たり前だ。」と考えていました。また、オーストラリアでは放牧での飼育が主流であり、牛たちが十分な運動を行えていることも一つの要因であると考えます。これらの学びを踏まえ、私の夢は大きく変わりました。私は現在、牛を健康に長く飼うことができるような、「牛も人も農場も持

続可能な酪農家」を目指しています。

③まず、牛を健康に長く飼うことで期待できることとして、大きく分けて3つ考えられます。

1) 長命連産性の向上

年を重ね、生産量が落ちてしまった牛を長く飼うと飼育費用に対する利益が減少するため、生産効率が悪くなってしまうと考える人も多くいます。ですが私は、牛を健康に育てることで加齢による生産量の減少を緩和し、その牛を長く飼うことで牛の一生で見たときの生産量は増加し、生産効率を上げることができると思います。更に、自給飼料やエコフィードの活用により飼料費の削減ができるとともに、牛に与えている飼料の成分やその効果などについて細やかな管理ができるので、更に細かく牛の個体管理を行うことが可能になります。

2) 生産物の質の向上

3) 消費者のイメージアップ

管理の行き届いた飼料を与え、健康な牛を育てることによって質のいい商品を生産することが可能になり、またそれによる消費者の畜産へのイメージアップにつながると考えます。

これらにより、商品のブランド化が可能になります。生産物の単価を上げ、付加価値を向上させることで他の生産物との差別化を図り、利益を向上させることができると考えます。また、畜産に対するイメージがアップすることで新規就農希望者や畜産物の消費量の増加が期待できます。

これらのことを踏まえ、大規模でなくても牛に与える飼料や飼育環境にこだわって牛を健康に長く飼い、ブランド化や六次産業化によって付加価値の向上を向上させるなど、販売方法を工夫することが日本の畜産をより良くするためにすべきことだと考えます。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

私は国を超えた人とのつながりの素晴らしさを体感しました。私がこの研修で1番不安に感じていたことは、英語を通してのコミュニケーションです。日々の活動では通訳さんが間に入ってくれていましたが、マランダ高校生との食事やファームステイでは1対1で会話をしなくてはいけなかったのも、私のつたない英語が伝わりにくいことで仲良くなれないのではないかとという心配がありました。そこで私は、人とコミュニケーションをとるには顔と目を合わせて話すことが最も重要だと考えたので、翻訳機をあまり使わずに会話をするという目標を立て



てました。確かに単語がわからなかったり、文法、発音などに間違いがあり、考えが伝わりにくかった場面も多々ありました。しかし、現地の方たちはわたしの話に耳を傾け、聞き取れなかったところは何度も聞いてくれたり、ゆっくり話してくれたりと積極的にコミュニケーションを取ってくれました。その結果、とても楽しい会話ができ、特にファームステイでは本当の家族のように幸せな時間を過ごすことができました。また、マランダ高校で全員と手をつなぎ、電気柵に触ったこともとても楽しい思い出になりました。言語も人種も住む国も違う高校生約40人が手をつなぎ、電気が流れ、笑い合うことで今まで感じたことのない人とのつながりを体感しました。これらのことから、言語や国の違いに恐れずに目を合わせ、会話を楽しむことが誰とでも心を通わせる鍵だと考え、これからの生活に活かしていきます。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• ということを、なぜ広めたいのか
畜産には多種多様な形態や方法があり、自分のやりたいことに没頭できる職業だということを伝えたいです。私はこれが畜産の1番の魅力だと考えています。実際にオーストラリアと日本の畜産を比べたとき、飼育環境や品種、与えている飼料など、様々なところに違いが見られました。これには様々な要因が関係していると考えますが、オーストラリアの農家さんは自分のやりたい畜産を実現するべく、多種多様な方法で楽しんで経営していたことから、その農家の考え方、やりたい畜産の違いが一番関係しているのだと感じました。私は、これからの未来の畜産には自分がやりたい畜産に挑戦し、楽しめるかが重要だと考え、伝えていきたいです。

• それができると、日本の畜産はどうなっていくか

これらを私達が伝えていくことにより、まずは畜産のイメージアップが出来ると思います。楽しい畜産を広め、どのようにやりがいや達成感を感じることが出来るのかを知ってもらうことで「畜産っていいやん。」と感じてもらい、若者や消費者から畜産の3K(きつい・稼げない・汚い)などのネガティブなイメージを払拭でき、高齢化や後継者

不足問題の改善が期待できます。また、畜産業や仕事は、楽しんでこそ良いものが出来るのだと今回の研修を通して学んだので、現在畜産に従事している人たちにも伝えていくことで、劣悪な環境での飼育や環境に良くない畜産が少しでも改善されれば嬉しいです。

• 次世代の畜産業はどのようなものか

私が描く次世代の畜産業とは、畜産へのマイナスイメージを払拭し、家畜と農家と消費者で作り上げる畜産業です。農家だけでなく、家畜も消費者も協力し、より良い畜産業のために行動することがこの先の畜産に必要なことだと考えます。「私が作った。」のではなく「私達が作った。」になる。そんな未来を思い描き、私はこれからも前に進んでいきます。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は、牛を健康に長く飼うことができるような持続可能な酪農を経営したいです。牛を健康に飼うためには広い視野と豊富な知識が必要だと考えています。そのために、高校卒業後は大阪を出て、畜産に特化した4年生大学で酪農の幅広い分野について学ぼうと考えています。様々な人や環境と出会い、将来畜産を担っていくうえで重要な沢山の経験を積みたいです。大学では、家畜飼料学や栄養学、牛の行動学からわかるベストな飼育環境、家畜伝染病や蹄病の原因と予防方法などを学ぶことで豊富な知識をつけ、様々な視点から牛にとってベストな酪農場を考え、築きあげることができる酪農家になります。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私はこのプロジェクトに応募するとき、自信がありませんでした。しかし勇気を出して応募し、同じ畜産をめざす仲間たちと共に畜産を学び、語り合うことができました。このプロジェクトで得ることができた学びや経験は、以前の私では想像もできないほど充実したものであり、確実に将来の糧になるのだと実感しています。このことから、少しでも興味があり、やってみたいと感じた事ならば勇気を出して行動する事が大きな学びや自信につながると考えています。前向きかつ貪欲に畜産と向き合い、共に未来の畜産を盛り上げていきましょう！





畜産アンバサダー

鳥取県立倉吉農業高等学校
生物科 3年
嶋本 珠琴

1. テーマ

畜産でアイデアを生かしたい

2. キーワード

飼育環境

3. キーワードのつながりと考察

①私は高校入学前から鶏が好きで、鶏をケージ飼いではなく平飼いで飼いたい。という夢を持っていました。そこでキーワードは「飼育環境」に決め、テーマが「畜産でアイデアを生かしたい」とあるように、これからの日本の飼育環境に対するアイデアを見つけ、自ら実行していきたいと考えました。

オーストラリアの畜産について考えたとき、広大な農地での放牧が一番に思い浮かびました。それに対し日本ではどの家畜も舎飼いが主流です。日本の養鶏の約90%は「ウィンドレス鶏舎」や「ケージ飼い」が行われ、効率や防疫面が高められています。今回の研修のメインは牛ですが、放牧やアニマルウェルフェアに対してや生産者と消費者両方の考え方について、日本に、養鶏などに生かすアイデアを創出したいと思いました。

②研修を行った農場は日本では考えられない規模で、どこにいても「放牧」があたりまえでした。また、オーストラリアの環境に合う牛を導入していることも特徴的でした。日本との大きな違いは、自然環境の中でありのままの状態で飼っていることだと感じられました。それが動物にとって幸せなのか、それとも人の手が念入りに届く範囲での飼育が幸せなのか。そんな疑問もグループ内で浮かびました。その中で導いた私の理想の飼育環境は「人の目が行き届く範囲で、家畜たちが自由に身動きできる

環境」だと考えます。このシステムを養鶏に取り入れるには、近年利用されつつあるエンリッチドケージのような取組みやすい飼育方法を創出したり、広めていく必要があると思います。

③オーストラリアで放牧などの飼育環境を整えられている理由は、土地や気候の問題の他に、生産者と消費者の畜産に対する意識だと感じました。一方で日本では畜産に対する考え方がマイナス向きであり、生産者と消費者の関係性もベストではないと考えられます。そのため今の日本には、少しでも畜産に興味を持ちやすくなる体制が必要だと考えました。例えば見学・体験可能な牧場に学校行事として来てもらうことで、畜産に触れる機会をつくることができると思います。いま疎遠になりがちな畜産が身近なものになり、意識が高まるよう、アンバサダー活動で今回の研修をふまえていきたいです。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

まず、今回の研修に集まった人の知識や経験の豊富さに圧倒されました。そして研修を通して私の畜産に対するの価値観も変化し、とても充実した研修だったと実感しています。

私は今まで、飼育環境の基準にされているアニマルウェルフェアなどから見て「日本の畜産は遅れている」そう感じていました。オーストラリアで広大な農場を見たときも、「こんな自然の中で育てられて幸せそう」とすぐに憧れを持ちました。しかし、研修が進むにつれ、衛生面など日本との違いに違和感も感じられるようになりました。外で飼うにはダニなど防虫も必要で、常に清潔な環境を作ることには難しいです。日本でオーストラリアと同じ経営をするには、農地や人手などコストが見合わず簡単に環境を整えるのも厳しいと感じています。

私の憧れの牧場を実現させるには、消費者の力も必要になります。平飼い卵など「こだわり」を売る場合、付加価値をつけることができます。一方で一般的に販売されるものに比べ割高になるため、安定した収入を得るには工夫が必要だと思います。そこで私はオーストラリアのように、実際に牧場を見学できる体制をとりたいと思いました。経営者さんの牧場への思いやリアルを見て聞くことで、購入するき



かけになり、私達もより自由な発想で牧場を持つことができると考えました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• どういうことを、なぜ広めたいのか

私は畜産現場で感じられる感動を広めていきたいと思います。畜産は臭いや汚い、きついなどマイナスのイメージは強く根付いています。また、畜産現場での働き手不足は年々増加傾向にあり、高齢化が課題となっています。そこで、私は畜産現場が消費者にとってより身近なものになれば、畜産のマイナスイメージが減少すると考えました。今の日本の畜産現場は、衛生管理上の問題で見学不可能な場所がほとんどです。さらに舎飼いやウィンドレス鶏舎などにより、外から簡単に家畜をみることができません。一方でオーストラリアの牛飼いでは放牧が行われ、日本に比べ家畜が身近な存在にあると感じました。同じことを日本で行うには衛生の面、土地利用の面でも厳しいことが現状です。そこでまずは、畜産アンバサダーとして私が畜産と関わる中で経験した「感動」を伝え、畜産の良さを知ってもらいイメージアップにつなげたいと思います。そして畜産をもっと知りたいという消費者を増やしていきたいです。

• それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

消費者の畜産のイメージが上がることで、畜産への理解やより高品質なものが流通するようになると思います。畜産現場について知ること、購入時に飼育方法や飼料、品種などを比較し、選択できるようになり、多様な畜産の価値が創出されと考えます。そしてそのニーズに応えるため、新しい品種が創出されたり、飼育にこだわりをいれる生産者が増加すると考えられます。

さらには畜産現場を見学・体験したい消費者が増え、受け入れ可能な牧場、施設が増し畜産現場の見える化が進むと考えます。

• 次世代の畜産業はどのようなものか

農業の新3Kが一般的になり、消費者にとって畜産現場が身近にある環境が次世代の畜産業だと思います。より畜産が身近なものになれば、畜産業を職として捉えやすくなり、日本の畜産業の活性化にも繋がると思います。そして人と家畜が共存、共生していける現場を私は目指していきたいと思っています。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私はとにかく鶏が好きです。この研修に参加するまで、鶏飼育に関わる仕事をできなかったら良いなと思っていました。そこで、オーストラリアの畜産や同じ参加者と交流などを実際に体験した結果、私は「養鶏をはじめ、畜産業が明るくなる仕事に関わっていきたい」と強く思うようになりました。そのためにも高校卒業後は大学に進学し、遺伝や経営、栄養学などより幅広い分野を深く学んでいくつもりです。そして、畜産について教える職や働きたいと思える生産現場を創っていける人材になりたいと思います。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

この研修で、私の畜産、夢、養鶏などに対してのあやふやな思いや考え方がはっきりしたと思います。それはオーストラリアの畜産や畜産業を志す仲間からの刺激だと感じています。

今畜産を学んでいる、将来畜産業に興味がある人たちに私は、いろいろな生産現場を見学することをおすすめします。そしてその現場で働く人に質問したり、自分の持っている夢を伝えてみたりしてください。自分の目指したいことがはっきりするはずです。

私はこれから「日本の畜産は素晴らしい」この言葉を誇りを持って言えるようこれから畜産と歩んでいきます。今までやってきたことに自身を持って、一緒に畜産業を盛り上げていきましょう！





畜産アンバサダー

広島県立世羅高等学校
農業経営科 2年
白土 陽麻

1. テーマ

私が働きたい畜産農家

2. キーワード

6次産業とのつながり

3. キーワードのつながりと考察

①私は畜産の6次産業化について、とても素晴らしい取り組みであると考え、すべての畜産従事者は6次産業をするべきだと考えていました。そのため、私も6次産業にとっても興味があり、将来は6次産業カフェを経営したいと思っています。

私のグループでは「私が働きたい畜産農家」を考えました。「私が働きたい畜産農家」について話すのであれば、グループで意見を出し合うときは、私の考えを言えば終わりだと思っていました。しかし、同じグループの人や違うグループの人と話をしてみると、それぞれ違うものを目指していて、私のような6次産業に携わりたいから畜産をやるという人はとても少なかったです。そのため、グループで話し合うといろいろな意見が出てきて、まとめていくのはとても難しかったです。

②実際に研修をしてみて思ったことは、オーストラリアも日本と同じ問題を抱えていることがわかりました。例えば、畜産従事者の高齢化や、土地代が高くなっていることです。

そこで、私たちが目を付けたのは畜産従事者と地域の人たち（消費者）のつながりです。日本でも国産のものを買うと安全で安心という意識はありますが、オーストラリアでは、各家庭でオーストラリア産のものを買って地域や国の農業、畜産を応援する意味で買っている人がとても多かったです。人、動物、環境にやさしい農業ができ、国産などのローカルなものを買ってもらうには、どう発信していけばいいのかグループ

で考えたところ、1つの造語を考え発信することにしました。それは、「MADE BY US」という言葉です。このMADE BY USは、人によってさまざまな解釈がされた言葉です。このMADE BY USを直訳すると、「私たちが作った」になります。これは、人、動物、環境が1つとなって、すべてが協力してこれからの畜産を作り上げていこう！という考えで生まれました。

③消費者それぞれの考え方やローカル意識、余った土地の使い方など、今からできる事を考えて取り組んでいくことで、日本の畜産はさらに良いものになっていくと思います。

日本全体の人口が減少する中で、農業従事者、特に畜産従事者は激減していきます。従来通りの飼育管理方法ができなくなってくると思います。耕作放棄地で放牧をすることによって、動物も健康で自然にも優しく、人も舍飼いの時よりも管理がしやすくなると考えます。

さらに、畜産従事者と地域の人たち（消費者）のつながりの懸け橋となる、アンバサダー活動をしていきたいです。日本の畜産がちょっとしたことから変えられたらいいなと思います。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

初めての海外でとても不安でしたが、自分と同じ畜産に対して強い思いを持っている人たちと話しをし、オーストラリアのいろいろなところに行き勉強することが、思っていた100倍楽しくてとても安心できました。私の通っている学校には畜産を学べる学科が無いので、わからないことを聞くと、とても丁寧にわかりやすく教えてくれて、とても感激しました。

オーストラリアの畜産は、人にも家畜にも環境にも優しい畜産が行われていて、どこにいてもアニマルウェルフェアが実施されていて、「家畜にやさしくない、アニマルウェルフェアのことが考えられない人はやらない方がいい」と言っている人もいました。アニマルウェルフェアが行われた商品には、マークがついていて消費者に見えるようになっていました。ショッピングセンターで探していると、マークがついた商品を買う人が多くいました。オーストラ

リアでは消費者もアニマルウェルフェアに対しての意識が高いことを知ることができました。生産者だけでなく、消費者もこういった考えを持つことで広い視野で畜産を見てもらうことができるとも素晴らしいと思いました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• どういうことを、なぜ広めたいのか

私が畜産アンバサダーとしてやっていこうと思っていることは、畜産のことをよく知ってもらえるように、どんどん広めていき、教えていく活動をしていこうと思っています。そこで、私たちが作った造語の「MADE BY US」をどんどん広めていこうと思います。今の日本は、畜産のことをよく知らない人がとても多くいます。そういった人たちに伝えていくことで、新たな選択肢になっていくのではないかと思います。

• それができると、日本の畜産はどんなになっていくか

私たちが作ったこの言葉を広めていくことで、とても覚えやすい言葉のため頭に残り、畜産についての理解が深まり、畜産に対して今までよりも良いイメージを持ってくれると思います。そうすることで、一緒に働きたいと思ってくれる人や、興味を持ってくれる人がふえるので、日本の畜産の高齢化問題が徐々に解決していくと思います。

• 次世代の畜産はどのようなものか

私が思う次世代の畜産は、若い世代が今の畜産に加わり、もっと盛り上がると思います。畜産はずっと無くてはならないとても大事な職業の一つです。そして、これからは私たち若い世代が畜産を引っ張っ



ていかないといけません。そのためには、やはり畜産に幼いころから触れていないとわからないことばかりなので、実際に家畜を見て、触れ合うことができる機会を増やしていかないといけません。

私がオーストラリアに行って研修をさせてもらった場所の一つに、家族で畜産をしている場所がありました。そこでは、息子さんに幼いころから牛と触れ合わせていました。その子に将来なにがしたいか聞くと、親を継ぎたいと言っていました。私はそれを聞いてとても良いことで素晴らしいと思いました。これからは若い世代が引っ張っていく、活気あふれる畜産になっていくと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、自分の育てた野菜、牛やニワトリを使ったカフェを経営することです。牛やニワトリの牛乳や卵を使い、人・家畜・環境にやさしい店にしたいです。耕作放棄地を活用することで、店をしつつ放牧もできたらいいなと考えています。

これが達成できれば、私たちが考えたMADE BY USが実現できると思います。

そこで私は、子供から大人まで幅広い層の人たちが乳しぼりやチーズ作りなどで畜産が楽しく体験できる牧場がしたいと考えています。そうした体験を通しては、畜産に興味を持つきっかけになると思います。いろいろな人たちの畜産を始める後押しができる人間になることをめざして、日々頑張ろうと思います。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私はこの将来の目標を必ずやり遂げたいと考えています。畜産は人だけは成り立たない職業なので、畜産に携わるのはとても大変だと思います。ですが、これからの畜産には絶対に若い世代の力が必要です。そのまま夢をあきらめず、人・家畜・環境にやさしい畜産をしてほしいです。

畜産の楽しさや感動を、畜産をあまり知らない人たちにつないでいきましょう。それぞれが畜産アンバサダーとして、全国各地で畜産のことを広めていけるように頑張りたいです。



畜産アンバサダー

福岡県立糸島農業高等学校
動植物活用科 3年
佐熊 安莉

1. テーマ

誰もが喜ぶ畜産業

2. キーワード

労働環境

3. キーワードのつながりと考察

①日本は、誰もが働きやすい環境ではないと思いました。例えば女性は畜産業で働く際に力仕事だからと働きにくく抵抗があり、周りに否定されます。そして、高齢者にとっても働きにくい環境だと考えます。他にも消費者が安い肉にこだわることで国産の肉を買わないことが生産者にとって負担になります。

②この研修を受けるまで生産者、消費者、家畜動物の3つが繋がれば誰もが喜ぶ畜産業になると思っていました。ですが、研修を受けて生産者、消費者、家畜動物、環境の4つが繋がると誰もが喜ぶ畜産業になると考えるようになりました。生産者は、老若男女はたらきやすい環境、消費者は、畜産への意識を変えること、家畜動物は、アニマルウェルフェアを取り入れること、環境は使われていない土地を活用することで誰もが喜び働きやすい環境になると考えます。

③誰もが喜ぶ畜産業を目指すにはまず消費者意識が変わることで改善されると考えます。オーストラリアでは小さい頃から畜産が身近にあり生産者の努力を知っています。



ですが、日本は畜産が身近になく動物と触れ合う機会が少ないです。だから消費者と生産者の架け橋を作ることで努力を知ってもらいながら動物と触れ合ってもらい、国産の肉を食べてもらえると考えました。次に耕作放棄地を利用します。害虫・野生動物が寄り付いたことにより壊された生態系を復元することができるなどメリットがあります。だから耕作放棄地を使って小さな放牧を行うことを提案します。国土面積が狭い日本では、オーストラリアのように多くの牛を放牧で飼育することは難しいですが、使わなくなった畑を利用して小さな放牧を行うことで自由に歩き回れるスペースができアニマルウェルフェアにつながるだけでなく、飼料をあげる時間や除草作業などの仕事の削減、畜産業に就くにあたって、老若男女が働きやすい環境につながると思います。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

この研修でまずオーストラリアの巨大な土地に驚きました。バスや車で通る景色に牛がいることや搾乳が終わった牛が普通に道を歩いていることに日本との違いを見て感じました。他にもオーストラリアは家畜動物を利益のためと飼育しておらず、1番の考えはアニマルウェルフェアを取り入れていました。その考えができないなら畜産業をやめた方がいいと聞いた時、私は日本の家畜に対する考えの違いを感じました。オーストラリアでは牛がのびのびと自由に歩き回れるスペースがあり日本ではみることもできない景色が広がっており憧れを持ちました。土地が狭い日本ではオーストラリアのような大きな放牧を行うのは難しいのが現状ですが、使われていない土地を有効活用し、小さな放牧をすることは可能だと考えます。全てを真似することは難しいですが、日本の良さを活かしてこれから若者が畜産を発展させていけるようになればいいと思います。

最後に、畜産業を目指す20人と一緒に畜産について学んで「こんな考えがあるだ」と気づかされることが多く、たくさんの学びを得たと思います。そして学びを増やすことができたとともに、最高の仲間に出会うこともできました。一生忘れることのない研修になったと思います。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういうことを、なぜ広めたいのか

畜産業の大切さと誰でも畜産業で働けるということを広めたいです。今の日本は畜産業が身近になく生産者が安心安全なものを提供するためにどのような努力しているのか、大切な命をいただいて食事をしていることを知ってもらいたいです。そして畜産業はなくてはならない職業です。オーストラリア研修では女性が働きやすい環境にするためにしていることはなく、日本のように女性が畜産業で働くことに否定する人はいませんでした。確かに男性と女性ではできるところに限りがあるがそれを補い合うことができれば誰もが働ける環境になると確信しました。ほかに、畜産業を始めたいと思っていたとしても、実家が農家ではないからと一から始めることに抵抗がある人も多いと思います。そのため今の固定概念にとらわれず、畜産を始めたいと思っている若者が自信を持って働ける職業にするために、畜産アンバサダーとして畜産業の大切さと畜産業は誰でもが働けるのだと伝えていきたいです。



・それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

畜産業イコール男性という今の固定概念を誰もが捨て畜産を否定しない職業になれば若者が畜産を変え、今日本で問題となる担い手不足を改善できると考えます。誰もがなくてはならない職業という意識になれば、国が支援しもっと働きやすい環境になるのではないのでしょうか。

・次世代の畜産業はどのようなものか

私が考える次世代の畜産業は、老若男女が働きやすい職業にすることです。なぜなら今の日本では女性が畜産で働くことを否定されがちだからです。でもオーストラリアでは女性だからと否定される環境ではなく、お互いが助け合っていました。負担となる力仕事を効率良くするためには、機械化が必要だと思います。機械化を進め、その時間を牛にかけることで、安心安全な牛を消

費者に届けることができます。今までの畜産に対するマイナスイメージを少しずつ変えていくことで畜産業につく人が増え、若者が新しく作り出す畜産業になるためと考えます。

6. 私の夢、これからやりたいこと

この研修で畜産業を目指す仲間と過ごして自分の知識の浅さに気づき、もっと学びたいと思いました。そのため、今の目標は農業大学校に進学し、そこで詳しく和牛について学びたいと思っています。ファームステイで「動物が好きだからこの職業につくのが小さい頃からの夢だった」と自分が好きなことを職業にしたと聞きました。自分もその気持ちを忘れず夢に向かって頑張りたいと思いました。私は将来、牛が大好きな繁殖農家を目指します。頭数を減らし自由に歩き回れるスペース作り、アニマルウェルフェアの取り組みを導入した経営を目指していきます。畜産で働く人が輝ける職業であることを自分自身が発信し、畜産を応援する国になるためにこれから取り組んでいきます。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

この研修に参加するまで知識が少なく不安ばかりでした。でも支えてくれる仲間がこの研修でできました！研修は終わってしまいましたが今でもわからないことを聞ける仲間となっています。畜産業は、人と人が助け合って成り立つ職業であり、人が生きていく上で必要な職業です。その職業に就くことは誇らしいことだと私は考えます。一緒に夢を実現させましょう！そして畜産を変えていくのは若者、私たちです！一緒に頑張ってみませんか？





畜産アンバサダー

長崎県立諫早農業高等学校
動物科学科 3年
宮田 風沙

1. テーマ

若者が描く未来の畜産

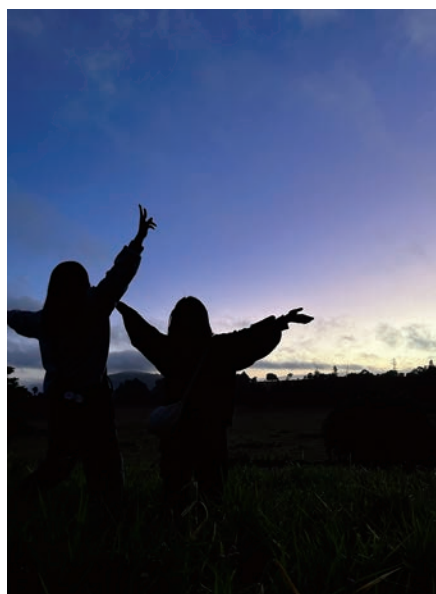
2. キーワード

偏見

3. キーワードのつながりと考察

「若者が描く未来の畜産」というテーマで「偏見」と考えたとき、研修前に私は「偏見が変われば農業従事者が沢山増える！」と思っていました。今の時代も3K（キツイ・臭い・汚い）という偏見が人々に定着し、そのせいか畜産業に携わる人が少ない気がします。そんな考えを持ち実際にオーストラリア研修に行ってみて、ただ偏見を変えるだけでは大きな変化を得られるわけではないことを学びました。

偏見を変えていくこともイメージUPのためには大事ですが偏見を変えたとしてそれで就農するのかと考えたとき納得はできませんでした。3Kなどの偏見が生まれるのは畜産教育が日本には十分にできる環境が整ってないからだと思い、正しい情報を知ることなく間違った情報を聞いて育ちずっと間違った情報が受け継がれていくと考えます。



そのため学生の時から少しでも畜産に関する授業を取り入れることで正しい情報を得て偏見の解消につながると思います。

また現代はスマホなどの情報機器を誰でも持てる時代で様々なSNSアプリが存在します。

子供から大人まで使うSNSで一度は畜産に関する動画とか写真を見たことはあると思いますが画面越しでは魅力が全部伝わるはずでもなく、もっと身近に畜産を感じられる場所を増やし直接触れ合ってみることで偏見の解消につながると思います。オーストラリアでは放牧を活かした大規模農業が多いので普段から畜産に関わることがなくても自然と牛が目に入ることが多いでしょう、かといって日本が十分に放牧をできる土地を確保できるわけではないけど牛がよく見えるように牛舎の構造を変えてみたり、今ある状態でできることを探してみてもいいと思います。

生産者と消費者が「変えてみよう・知ってみよう」と思う気持ちが少しでも増え畜産業に対する偏見は少しずつ変わっていくことを願っています。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

研修を通して私は「ポジティブ」という言葉がすごく心に残りました。

マランダ高校でお世話になったデイビッド先生は未来の畜産を担う私たちを応援してくれどんな質問をしてもポジティブに回答してくれました。また他の農場の方やホストファミリーもどんな質問でもポジティブに返してくれたり少し笑い話にしながら答えてくれることもありました。私はこれから畜産をさらに学び、いずれ携わることを想像してみればポジティブさは大事なことの1つだと思います。

またオーストラリアでは普通の中学、高校でも畜産の授業があると知って日本にはまだ選択科目などで畜産を学べる学校は少なく実業高校に進まなければ学べません。今すぐに従業科目に畜産を必須科目にできるわけではないですが将来、畜産が必須科目になればたくさんの若者が畜産に興味を

持ってくれると思います。

5. 畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私はアンバサダーとして「畜産は大切」ということを広めたいです。畜産業は命を育てる仕事でとてもやりがいを感じられる仕事だと思っています。畜産業をしてみないとわからない本当の良さだったり様々なことが経験できます。「畜産は男に向いている仕事」「女性が働くには不向きだ」と考える人もいますが、実際今の畜産業は変わりつつあると思います。今やスマート農業の導入も増えているので全部が全部力仕事ということはありません。

また女性は母性本能を活かし子牛を育てたりしてみてもいいから自分の性格を活かしてみても畜産は誰にでもできるんだと知ってほしいです。

また畜産業は生産者いなければ成り立たないし生産者がいても屠畜や肉を加工する人がいなければ人々の食卓に届けることはできないでしょう。毎日毎日頑張って育てた牛たちがおいしいお肉になるよう農家の方たちは愛情を注いで育てています。そんな思いも知ってもらい地産地消を活性化してほしいと思います。

次世代の畜産業は女性の畜産業の担い手が増えスマート農業を活用した畜産業が発展していくと考えます。日本の先端技術は今も進化し続けているので今よりもっと進化した機械が導入されていくと思います。高校にもスマート農業を取り入れ使い方を学び今後の就職で使えるように勉強したりすれば役に立つと思い、休みの確保や重労働を改善しイメージUPにつながると思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来子牛の哺育牧場で働き、いつかは地元である長崎に自分の哺育牧場を作ることが夢です。私の家は非農家で親戚にも農家はおらず畜産とは無縁でした。動物は昔から好き



で動物看護師などの職業に就きたくて諫早農業高校の動物科学科に入学しましたが実習を重ねるうちに牛の可愛さにハマリその中でも子牛の愛らしさには心を打たれました。長崎には繁殖農家、肥育農家がいても哺育牧場がある事は聞いたことがありません。私は地元の畜産業を活性化し貢献したいと考えています。長崎牛を世界中に広めたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

畜産ティーン育成プロジェクトに応募するか迷っている後輩へ。結論から言ったら「絶対参加したほうがいい！」そう断言できます。参加に不安もあるとは思いますが研修で得るものは想像以上のもので必ず自分の将来に役立ちます。私もこの研修で自分の長所だったり改めて畜産の素晴らしさを感じました。この経験は若い高校生のうちにしかできないことで損はないです。研修仲間と熱く畜産とか夢について語るのはとても楽しいです！来年の参加待ってます。





畜産アンバサダー

熊本県立菊池農業高等学校
畜産科学科 2年
田中 優羽

1. テーマ

私が働きたい畜産農家

2. キーワード

持続可能な畜産

3. キーワードのつながりと考察

①私が働きたい畜産農家というテーマで持続可能な畜産について考えたとき最初はどのようなことを考えていたか

私は非農家だが、近所に牛舎や佐賀県畜産公社などがある環境で育ったため、幼い頃から畜産業に従事したいと考えていた。農業高校で学んでいるものの、自分が畜産業に従事するイメージが上手くわからず、とにかく新しいことをしてみたいという気持ちで、IoT、スマート農業などの新しい技術を取り入れながら、効率よく畜産物の生産を行いたいという考えだった。また、地元の耕作放棄地問題を解決するために放牧を行いたい、和牛の繁殖を行いたいなどやりたいことは漠然とあったが、具体的なことはわからなかった。

②オーストラリアの方たちは生産者のことを考え、ローカルのものを購入するようにしていた。また、私が新しい考えだと思っていたアニマルウェルフェアは当たり前のこととして扱われていた。アニマルウェルフェアを取り入れることでいいことが起こるというより、利益が出るように、かつ牛も幸せになれるように経営をした結果がアニマルウェルフェアにつながったという感じだった。見学をした企業にはそれぞれ違う特徴があったが、どの企業も消費者と動物を大切にしていた。そして従業員も仕事にやりがいを持っていた。実際にオーストラリアで色んな方のお話を聞いて、より地域や消費者のことを大切に思ふべきだと気



付いた。

最終的に私が働きたい畜産農家は、牛の幸せのため、地域の幸せのために耕作放棄地を利用した放牧を行う畜産農家。また、地



域との関わりを持って、より若者が畜産に興味を持てるような環境をつくりたい。

考えは以前と大きく変わっていないが畜産のやり方は無限だということを知ったので、畜産の捉え方が変わった。

③まずは、農家だけで畜産物を作り上げようとしないうこと。消費者と一緒に作り上げる必要がある。具体的には、消費者に畜産についてもっと学習する機会を与えたり、農場の見学を受け入れる（衛生管理的に難しい場合はSNSで発信）など「畜産の内側」を見せることが大切だと思う。消費者の畜産に対する意識が高くなれば、畜産の未来が良くなる可能性がある。

そして、食料や飼料の自給率を上げる事も必要。日本は豪州のような広大な土地は持っていないので、空き地、耕作放棄地を最大限利用して、できるだけ自給飼料を作るようにする。これを行うために政府の支援があれば実行しやすいと思った。

また、豪州の方たちは皆畜産業に対しても、日常的にもポジティブな考え方をしていた。そういった喜怒哀楽の「喜」「楽」の部分大切に、「怒」「哀」の感情もポジティブに変換するという考え方ができればもう少し畜産のイメージアップにもつながれると思う。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリアの方々は英語がうまく話せない私たちにも優しく、多様な人種がいる環境に慣れていた。どんな状況でも周囲の人が協力してくれたり、頼れる人がいたら心強い。研修で多くの人と関わって、人とのつながりを重要視すべきだと強く思った。地元で畜産をすることになったら、地域の人とのコミュニティを発展させたい。

また、どの見学先、ファームステイ先の方もローカルや国産を大切にしていた。日本と違いオーストラリアでは食料自給率が驚異の200%なので国産の商品を買うのは当たり前かもしれないけど、生産者を想ってローカルフードを買うという考えは素晴らしいと思った。日本でも道の駅や直売所などがあるので、新鮮で地元経済の活性化

にもつながるローカルフードを積極的に購入していきたい。

そして、大規模な農場で飼育管理をする際、オーストラリアでは牛の状態をバギーなどを使って自分の目で確認していた。しかし、日本の和牛のようにきめ細やかな飼育管理を行うならやはりIT技術を積極的に取り入れるべきだ。「日本の」和牛をこれからも守り続けたいので、気候、時代に合わせた畜産の経営手法を取っていきたい。

オーストラリアで見学をして、その土地の特徴から畜産の技術、歴史、その企業独自の取り組みなど惜しみなく学ばせてもらった。これらを無駄にしないようにアンバサダー活動を通してより多くの方に畜産の様々なあり方を知ってもらいたい。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

• どういうことを、なぜ広めたいのか

1つ目は、畜産のハードルを下げたいので、畜産の楽しい部分をたくさん広めたい。大好きな牛の魅力が農業従事者以外にも伝わってほしい。農業従事者や農業高校生以外の人たちにも伝わるように、専門用語はなるべく使わずに説明をしたい。

2つ目は、若い人の就農率を上げたいので、就農意欲が湧くように、畜産の現状として農場従事者の平均年齢の高さや後継者不足などを挙げ、若者が農業を始めるチャンスだということを伝えたい。

3つ目は、人との関わり的重要性を伝えたい。研修を通して多くの人と畜産について話し合う機会があったが、誰かに自分の夢や、畜産に対しての考えを深く語るのはこの研修が初めてだった。勇気を出して話をしてみると、より自分の将来像、やりたいことが鮮明になった。そして、仲間の夢や考えを聞いたり、現地の方々とも交流をすることで、畜産業に貢献したい！という気持ちや、動物、特に和牛が大好き！和牛を守りたい！という気持ちをもっともっと強くなった。なので、誰かに自分の夢を語ることの大切さと、それによって新しく見える道もあるということが伝われば、少し畜産に興味があるという人でも畜産業に一步踏み出しやすくなるのではないだろうか。

• それができると、日本の畜産業はどうなっていくか

消費者の畜産に対するネガティブなイメージを払拭でき、消費者により国産、ローカルフードを手にとってもらいやすくなると思う。また、畜産従事者が増えれば、地域や国全体で畜産を支えられるし、若者の新たな視点から課題を解決することで、畜産業の発展につながると思う。

• 次世代の畜産業はどのようなものか

哺乳ロボットや給餌ロボットなどのスマート農業の普及が進み、効率的な生産体制をとれるもの。その中でさらに海外の考えを取り入れ始め、アニマルウェルフェアや有機農業なども普及していくと思う。そうすると消費者の意識も変化し始め、多様な需要に合わせた畜産物の生産を行わなければならない。

次世代の畜産業は、若者が中心となった活気あふれるものにしたい。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来、地元である佐賀県で和牛の繁殖を行いたい。耕作放棄地や後継者不足などの農業に関する課題を、畜産経営の中で少しでも解決できるようになるのが私の理想。それを実現するために、耕作放棄地を利用した放牧や地元民の農場見学の受け入れ、ふれあい体験、講習会などまずは自分ができる範囲で地元貢献したい。また、他の農家や地域の方とのコミュニケーションもしっかり取って地域全体で連携をした畜産業を行いたい。そして、私が畜産に魅力を感じたのは牛を比較的身近に感じられたことにあるので、そういった地域の環境づくりも大切にしていきたい。やりたいことはまだまだあるが、これからもっと畜産業への理解を深め、最終的に自分にあった経営方法を取りたいと考えている。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

やりたいことを誰かに否定されても、自分の気持ちを信じて一步踏み出してみると、どんどん自分の夢に近づける。私は、他県の農業高校に一步踏み出し、二歩目として海外研修に踏み出した。昔はチャレンジしたくても不安や恐れがあったし、人と関わるのがすごく苦手だったけど、今は夢につながることは何でも挑戦することで多くの学びを得ています！まずは一步踏み出してみ、一緒に畜産を明るく楽しいものにしていきましょう！





畜産アンバサダー

宮崎県立高鍋農業高等学校
畜産科学科 3年
石山 弘樹

1. テーマ

畜産でアイデアを生かしたい

2. キーワード

スマート農業

3. キーワードのつながりと考察

①私の住む宮崎県では、少子高齢化や後継者不足による人手不足が深刻です。私の家は米を生産する兼業農家であることと、近所に肉用牛農家さんがあることから、幼少期から作業を手伝っていました。その中で、エサや肥料の準備など手作業で行う仕事が働く人の大きな負担になっていることを実感していました。働き手が少ない今、身体的な負担も大きく、時間もかかる作業をどうにかして改善できないかと考えていたときに知ったのが、スマート農業です。機械やIOT機器を導入することで農家さんの負担軽減と時短ができることにとても魅力を感じました。そして、オーストラリアの機械を利用した大規模で効率的な畜産の技術を日本に還元したいと考え、このプロジェクトに参加しました。

②先進的なスマート農業が行われていると考えていた私ですが、実際の研修を通して、オーストラリアでは機械やIOT機器が予想より導入されていませんでした。オーストラリアは、広大な土地での放牧が主流であり、日本のような毎日の細かい作業自体がありません。機械を使う場面といえば、自家用ジェット機で牛の様子を見回ったり、サイレージのための飼料畑の管理で使用し



たりするほどしかないと知りました。

研修を通してオーストラリアの生産方法をそのまま日本に当てはめるのではなく、日本に1番合ったスマート農業の在り方を探すべきだと考えるようになりました。

③私は、日本とオーストラリアの畜産を比較して評価するのではなく、どれだけその国の地形や気候に合った畜産ができるかが大切だと考えています。日本は、農地面積が小さく、人手も少ないことから、給餌や飼料作などの一般管理以外の牛舎内の清掃や草刈りなどの作業をする必要があります。その人間でなくても可能な、同じことを決まった時間に行う仕事を、もっと機械やAIで代用することができるのではないのでしょうか。日本は小面積だからこそ、1頭1頭への栄養、健康管理や高い育種技術、脂肪交雑をコントロールする肥育技術が確立しています。スマート農業による作業効率の向上とともに、日本独自のこだわりや取り組みも残していく畜産を進めていくべきだと考えます。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

宮崎県の畜産農家さんは、もっと効率化できる作業があるのにも関わらず、重労働な作業をしている人が多いように感じます。また、スマート農業を有効に導入している農家さんとそうでない農家さんの差も大きいと感じます。

農家さんの取り組む一歩を後押しするために、農家さんが機械の操作や技術を学ぶ学校があると良いと考えます。どんな人でも導入しやすい環境づくりが大切です。また、電気代や燃料費などコストが高いことも課題の1つです。しかし、効率を上げてきた時間の余裕で、牛の手入れに重点を置き、能力の高い牛を継続的に生産することで、セリ市や枝肉単価が上昇し、結果的に収入の向上に繋がると考えます。また、オーストラリアでは機械の導入への支援制度が全くなかったのに対して、日本はクラスター事業をはじめとした機械化を支援する制度が多くあります。日本では機械やIOT機器の導入に高いハードルを感じている人が多いだけであって、スマート農業に取り組みやすい環境が整っていると考えます。

畜産業のイメージを聞くと、多くの人が3K（きつい、きたない、きけん）と答えます。しかし、涼しい部屋の中でもトラクターを遠隔操作できたり、IOT機器により牧場に待

機しなくても分娩の様子をカメラで見たり、通知で確認したりすることができます。飼料設計や種雄牛の選択など人間ができることにもっと力を入れ、機械でもできる作業は機械に頼るべきです。私は、3Kのイメージを持つ若者に、畜産は進化していて、今は新3K（カッコいい、かせげる、かんどう）なのだということを強く伝えたいです。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいことは大きく分けて2つあります。

1つ目は、日本の畜産は世界に誇れる素晴らしい仕事であるということを広めて行きたいです。私は、オーストラリアでの研修を通して、日本との共通点や違いを発見することができました。現地研修を行うことでアニマルウェルフェアの面でもスマート農業の面でも日本は負けていないと感じました。オーストラリアは放牧をメインで行っており、機械を使うことはほとんどありませんでした。そのため、機械化がすぐ進んでいるというわけではないということです。また、アニマルウェルフェアについても、土地は広く牛が自由にのんびりと過ごしていましたが、水質や牛の扱いなどについては日本も負けてはいません。

2つ目は、「Wagyu」という日本のブランドはオーストラリアでもすごく価値があるということです。オーストラリアの「マリーバ家畜市場」を訪れた際、「日本の和牛はすごくいい肉だ。和牛と聞いただけで値段が跳ね上がるくらい人気なんだ」と仰っていました。日本の和牛は、数多くの品種とブランドがありますが、特に黒毛和種は人気があるのです！この2つのことを日本に広めることができたなら、畜産経営者が自信を持って経営をすることができ、活気ある畜産ができると思います！

これから私たちが進んでいく次世代の畜産業は、スマート農業を取り入れつつ、日本の伝統ある技術を守っていける、明るく活気あふれた産業になっていると信じてるとともに、そんな畜産業にしなければならないと考えています！

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、宮崎県を代表する和牛繁殖農家になることです。

そのために、宮崎県立高鍋農業高校で寮生活をしながら、早朝、夕方と牛の世話や手入れ、調教などに力を入れています。

私の住む宮崎県は南九州に位置す

る日本有数の畜産大国です。飼養頭数が多いだけではありません。5年に1度行われる全国和牛能力共進会では4大会連続で日本一を獲得しています。しかし、そんな宮崎の畜産も、後継者・労働力不足で危機に陥っています。だからこそ、スマート農業を取り入れ、効率的に作業をしながらも、宮崎の誇りである「日本一宮崎牛」を大切にしたいです。そして、我が家で生まれた牛が全て宮崎牛になれるような素牛生産をしていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私の家は、両親が働きながら米を生産している兼業農家です。そんな私の家の近所には、たくさんの和牛繁殖農家があります。私は、カッコいい農家さんに憧れ、和牛繁殖農家になりたいという夢を抱くようになりました。しかし、色んな人に、「非農家から新規就農は無理だ」と毎回のように言われました。でも、今は新規就農以外でも就農する方法はあります。どんなに大変でも、牛と向き合い取り組みれば必ずそれが結果として現れます。だからこそ畜産は素晴らしいです！夢を諦めないでください！





畜産アンバサダー

沖縄県立八重山農林高等学校
フードプロデュース科 3年
田盛悠祐

1. テーマ

誰もが喜ぶ畜産業

2. キーワード

持続可能な畜産業

3. キーワードのつながりと考察

①「誰もが喜ぶ畜産業」というテーマで「持続可能な畜産業」について考えたとき、最初は、「持続可能な畜産業」が実現できれば「誰もが喜ぶ畜産業」になるのではないかと考えました。「持続可能な畜産業」とは環境、社会、経済の3つの側面を考慮し、長期的に継続可能な方法で畜産業を行うことです。

1. 環境的な負荷を最小限に抑えること。2. 社会的な要求や動物の福祉に配慮すること。3. 経済的な利益を追求すること。この3つを達成することができれば生産者、消費者である「人間」・「家畜動物」・「環境」といった「誰も」が喜び、日本の畜産業はより良くなると考えていました。

しかし、今の日本の畜産業は「持続可能な畜産業」が実現している所は少なく「誰もが喜ぶ畜産業」になっていないのが課題であると思います。そこでオーストラリアでは「持続可能な畜産業」を実現する為どのような取り組みをしているのか興味を持ちました。

②オーストラリアでは広大な土地を利用した放牧スタイルが「持続可能な畜産業」を実現する為の方法だと感じました。放牧されているため、牛の糞尿は自然に還り、環境負荷が少なく、放牧されている牛は、自由に行動ができ、ダニなど病気の対策や放牧地の管理など徹底されており動物への配



慮を感じました。さらに、放牧スタイルによって飼料コストと生産コストを大幅に削減し、経済的利益も追求されていました。消費者も「地元の畜産物は高品質で信頼している」と言っていました。地産地消の意識が高い為、需要と供給のバランスが良く、生産者と消費者がWin-Winな関係であることが分かりました。このようにオーストラリアでは、広大な土地を利用した放牧スタイルが「持続可能な畜産業」を実現可能にしています。これは、オーストラリアの環境だからこそできる取り組みであり、日本では各地域の環境に合った飼育方法などで「持続可能な畜産」を行っていく必要があると考えました。

③私は今回の研修の成果を反映していく方法が2つあります。1つ目は、畜産現場のリアルを知ってもらう為に実際に畜舎で農家体験を行ってもらうことです。私はオーストラリアで初めて乳牛現場に入り、搾乳体験を行いました。その時に、牛乳が生産されている現場を五感で体験し、農家さんの家畜動物に対する想いなどを知ること畜産に対する理解が深まりました。

2つ目はSNSを利用し「畜産」を発信することです。今回の研修で出会った仲間とのつながりから、SNSで発信することの強さに気づきました。この2つの方法を行うことで、農業に関わったことない人でも気軽に畜産に関わることができ、日本の畜産の魅力や畜産の楽しさを知る機会が増えると思います。この方法で畜産の魅力を伝え、畜産に興味を持つ人を増やしていくことができると考えます。

4. オーストラリアの研修を通じて考えたこと

オーストラリア研修を通して感じたことは2つあります。

1つ目は、農家さんが畜産という職業に対して楽しくやりがいを感じて仕事していることです。どの研修先でも農家さんは楽しく仕事していました。例えば、牛を飼うことに関して、個々の農家さんが好きな品種を飼育したり、子牛の成長を見るのを楽しんでいたりと、純粋に牛飼いを楽しんでいる所が多かったということに感じています。

2つ目は地産地消の意識が高いことです。オーストラリアのスーパー、加工場を見学した際に、肉、乳製品、野菜、果物など地元の畜産物などが沢山並んでいました。消費者も地元の物は高品質で信頼できるという意見がありました。またオーストラリアでは農家さんが幼稚園、保育園などに農業体験へ行くなど消費者に対するアプローチ

も強いと感じました。このことから、日本畜産でも農家さんが家畜動物が好き、家畜動物が可愛いなど初心の気持ちを忘れずに農業をしていくことが大切だと思います。また生産者から消費者のアプローチとして畜産現場に触れる機会を増やし、畜産に対する関心や生産者の努力、取り組みを知ってもらい、消費者の価格重視のみの考え方から地元農家さんの想いや品質への取り組み知ってもらい信頼して買えるような考え方に変わっていくことが必要だと考えました。

5. 畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

・どういうことを、なぜ広めたいのか

私は、畜産を知らない人に畜産の魅力・楽しさを伝えたいです。畜産という仕事は1年間休みがない仕事です。ですが、毎日が同じことの繰り返しではありません。生命の誕生を間近で見ることができたり、出荷でのお別れ、時には悲しいこともあります。出会いと別れを自然の中で家畜動物と沢山の経験ができ、毎日がドラマの連続です。また、畜産農家がいるからこそ消費者の胃袋が支えられているという素晴らしいことを誇りに思います。このように他の職業では体験できない魅力があります。この魅力を畜産を知らない人に知ってもらえるように畜産の現場を伝えていきます。

・それができると、日本の畜産はどんなになっていくか

消費者の中には日頃の生活で何気なく購入する肉がどのように作られ、また生産者の想いが肉に込められているか知ってる人も少ないかと思います。現代社会において便利なツールであるSNSを活用し、出生から肉になるまでの畜産の現場をありのまま発信することで畜産を知らない人や消費者に畜産を知ってもらえる1歩になると考えます。また、実際に畜舎で農家体験を行うことで家畜動物の可愛さや畜産の楽しさを知ることができると考えます。このような取り組みを継続的に実施します。例えば、私の実家は小規模の繁殖農家ですが牛の日常をSNSで発信する。また中学生や小学生を学校に招き家畜動物と触れ合い体験を行うなど、私ができる限りのことで沢山のの人に畜産の魅力・楽しさを知ってもらいます。

・次世代の畜産はどのようなものか

小さな事が積み重なっていけば、日本の畜産に対するイメージが変わり、明るい方向に発展していくと考えます。最後に私が

考える次世代の畜産は、消費者は生産者の現場を知り、理解してくれる人が増え、地産地消の考え方が広がり、生産者と消費者がWin-Winな関係になります。また日本の課題である食料自給率も上がっていき、畜産が日本をよりよく発展させる為の産業へと成長すると考えます。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の描く夢は地元石垣島で和牛繁殖農家になることです。その中で取り組みたい活動は3つあります。

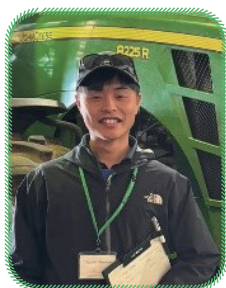
1つ目は全ての牛が健康で幸せを感じることのできる環境作りを徹底していきたいです。2つ目は経産肥育牛の肉販売です。繁殖母牛の役目を終えた雌牛を肉として再活用し、低コスト生産・低価格販売を実現し消費者にとって優しい肉を作りたいです。3つ目は誰でも畜産現場を見学することができ、牛と触れ合うことができる観光型農場です。畜産現場を見ることが少ない非農家の方に気軽に足を運んでもらい、牛の可愛さ、畜産現場のリアルを見てもらい畜産の魅力や生産者の想いが伝わるような農場をしていきたいです。

私の夢を叶える為には、知識不足なところが多々あるので、これから沢山勉強をして夢を叶えられるよう精一杯頑張ります。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私にとって今回のプロジェクトは大きな挑戦であり、1歩踏み出した事で畜産への視野や考え方が大きく広がったり、得られるものが多く充実したプロジェクトでした。畜産は人間が生きていく上で欠かせない産業だと私は思っています。そして先代達が築きあげてきた畜産の歴史を守り、継承していくことが我々の使命だと思います。この先どんな困難があっても、周りの仲間を頼ってみんなで協力し、今の日本の畜産をより良くする為に明るく元気に盛り上げていきましょう。





メンター

帯広畜産大学大学院
博士前期課程 1年
只 埜 昌 幸

1. メンターとなった経緯

まず初めに、今年度の畜産ティーン育成プロジェクト事業にメンターとして、参加させて頂き誠にありがとうございました。また、本事業にあたり JRA 様の多大なるご支援と、協会の皆様のご尽力のおかげで、畜産に興味を持つ高校生に貴重な機会をご提供していただいたことに感謝申し上げます。私自身も貴重な機会と出会いを頂き感無量です。

私は 2023 年に、JAEC が行っている海外農業研修のプログラムに参加いたしました。私はオーストラリアコースの肉牛専攻を希望し、1 年間海外で研修生として農業に携わりました。1 年間もの間、日本からはるか遠くの友達も知り合いもないオーストラリアという地で、仕事をするのは決して簡単ではなく困難を極めました。しかし、海外での生活は辛いことばかりではなく、それ以上の楽しみや新しい知見を私に与えてくれました。私は肉牛専攻でオーストラリアに行ったものの、配属予定であった農場にキャンセルされてしまったため、他の農場で働くことを余儀なくされました。その為、私は最初の 3 ヶ月月間をスイカ & バナナ農場で過ごし、その後の 6 ヶ月間は酪農に従事することとなりました。そしてその後、漸く肉牛農場が見つかり、最後の 2 カ月間という短い間ではありますが、念願の肉牛農場で仕事をすることができました。また、1 年間を通じて、様々な肉牛農場を見学でき貴重な体験ができました。以上のような背景があり、今回メンターとして選んでいただいたことに嬉しく思います。私の 1 年間のオーストラリアでの研修が、今回の



畜産ティーンプロジェクトに活かせるように臨みました。

2. 今回のオーストラリア研修で自分自身が学んだこと

私は今回の研修で多くの学びを得ました。まず、オーストラリア人の寛容な心持ちです。どの農場の方も、我々の意見を真っ向から批判するのではなく、私たちの目指す夢を肯定し応援してくださいました。日本では、農業は 3K（キツイ、汚い、臭い）や、儲からない等の理由から、若者が農業を継承したい、新規就農したいと言っても、大人からやめたほうがいいと批判され、多くの若者は夢を諦めてしまいます。せっかく若い世代の人たちが熱い情熱や誇りを持ち、夢を描いているのに、大人がその夢を壊すような発言や姿勢を見せることは非常に残念なことに感じます。私たちは畜産業という、生きる上で欠かせない職業の存在意義に強い誇りを持ち、自分の行うことに自信と誇りを持っている農家に私たちは憧れるものです。また、そう言った農家が輝いてかっこよく見えるのです。私たちは、辛くて大変な畜産業を継承したい訳ではなく、楽しくてキラキラして夢あふれる畜産業を後世に残していきたいと考えています。その為には、大人の方々の支えがもちろん必要であり、大人と若者が協力してより良い畜産業を引き継いでいければと思っています。そうすることで、より若者がチャレンジしやすい環境を作り上げることができ、新規就農者数の増加にも好影響を与えたいと思います。

また、日本とオーストラリアの消費者意識の違いも今回の研修を通して感じました。日本では質よりも低価格な商品を選ぶ傾向にあるように感じますが、一方オーストラリアでは、価格よりも質を重視しており、消費者意識が高いように感じました。値段が上がろうと、環境に配慮した有機野菜や、AW に配慮した畜産物、地元産の生産物を優先的に選んでいました。日本の消費者意識が低い原因は、消費者が農業に対する知識や興味関心がないためだと思います。その背景には、消費者は農業について学ぶ機会や触れ合う機会が少ないからだ気づきました。また、何よりも消費者意識を上げる以前に、生産者意識を上げることが必要不可欠だと強く思いました。生産者は消費者に対してできることは沢山あるはずですが、その為には、農業教育を取り入れ、農業の一長一短の両面を多くの人に知ってもらうことで、消費者が商品を選ぶときに、状況に応じた取捨選択ができると思います。ま



取り上げていただき、畜産業の魅力を伝えていただきたいと思っています。またそれ以外にも、地域で連携して農業研修や農業体験を精力的に取り組み、畜産業に触れ合える機会を増やし、地域や畜産業の活性化に寄与したいと思いました。私だけの個人の力ではどうすることもできないことばかりなので、多くの人と連携し協力していくことがいかに大切かを改めて感じました。

また、生産者はコストをいかに抑えるかが重要になると考えます。ターゲティングをどこに定めるかにもよりますが、あまりにも高価な商品は消費者の購買意欲を低下させてしまうため、付加価値を付ける分、生産コストを下げて多くの消費者に商品を買っていただけるような農業経営をする必要があるのではないかと思います。今後は更に熟考を重ね、自分が畜産業のために何ができるかを常日頃から意識し、考えていこうと強く思います。

3. 生徒たちとの関わり合いを通して

学生は様々な場面でわだかまりを感じ、悩み苦しんでいます。畜産業に興味があるものの、何が正解でどう今後進んで行けばいいのか、1 人で答えを出すのは難しいものです。その為、学生は同じ夢を持つ学生に相談しようと思いますが、同じ農業高校の学生であっても、案外同じ夢を持つ生徒はいない場合が多いです。だからこそ、学生は同じ夢を持つ学生に会って、深く話をしたいと思っています。しかし、そのような機会が無いのが現状であるため、今回のような事業があることの意義は大きく、学生にとっては非常にありがたいことと違いありません。

また、今回の研修では 4 班のグループに分かれ、それぞれのテーマについて考え発表をしました。テーマは「若

た、現在は畜産業の問題ばかりがメディアで取り上げられ、マイナスイメージが付いてしまっているため、メディアには畜産業の素晴らしさや楽しい部分を大々的に

者が描く未来の畜産」、「畜産でアイデアを生かしたい」、「私が働きたい畜産農家」、「誰もが喜ぶ畜産業」の 4 つであり、どれも抽象的で、自分たちなりの答えを出すのに苦労している様子が伺えました。考え方は三者三様であり、それぞれの異なる意見を 1 つの発表としてまとめることは難しく、意見が食い違い衝突し、発表準備がなかなか進まないこともありました。しかし、そんな中でも学生同士が協力し合い、最終的にはどの班も立派な研修報告をし、別れを惜しむ姿を見ました。本研修を通して、学生たちの努力と苦悩の背景を知っているからこそ、私にとって非常に感慨深いものでした。一緒に楽しい時を過ごし、時に衝突し泣いたり怒ったりすることで、より強い友情が芽生えたのだと思います。2 週間の仲ではなく、同じ夢をもつ者同士として、困った時に支え合う生涯の仲で居続けてほしいと切に願います。学生みんなは慣れない環境の中で、本当によく頑張ってくれました。お疲れさまでした。今後の更なる飛躍をお祈り申し上げます。

4. 帰国後の変化と今後の想いについて

上記でも述べた通り、私は将来、実家の宮城県で和牛農家になろうと考えております。実家の家業をただ継承するだけでなく、若い世代の方々に夢を与えられるようなかっこいい農家になりたいと思います。その為には、向上心やこだわりを持ち、日々勤勉に働き、常に深く経営方針や農業業界のことを考えながら、自分にできることに精一杯努力していきたいと思っています。素晴らしい畜産業を多くの人に知ってもらえるように活動していきます。未来の畜産業を担う者として、夢のある輝いた農家になることを誓うと共に、協会の更なるご活躍を祈り、今回の結びとさせていただきます。改めてご支援いただいた全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。





メンター

戸塚楽農

戸塚蒼依

1. はじめに

私は現在、鹿児島県鹿屋市で実家の酪農業を祖父、両親、従業員1人と営んでおります。現在に至るまで、高校は熊本県立菊池農業高等学校の畜産科学科へ入学し、その後、北海道酪農学園大学循環農学類へ入学。酪農家でアルバイトをしながら牛漬けの日々を送ってきました。私の実家「戸塚楽農」は見ての通り楽しい農業とかきます。これは「楽しく酪農を」といった意味から祖母がつけました。戸塚楽農ではホルスタインの経産約100頭、未經産約80頭、ジャージー未經産2頭、ヤギ5頭を飼育しています。市のイベントや交流会にも協力しており、酪農の魅力を少しでも知ってもらえるよう積極的にお手伝いさせていただいております。

今回、この畜産ティーン育成プロジェクトのメンターとして参加させていただいたきっかけは、畜産女子育成プロジェクトの1期生として、ニュージーランド研修に参加したことです。当時は1期生として参加し、全国的女子高校生の私には無かった観点や、知識の多さ、積極性に圧倒されました。ですが、みんなと研修をしていくうちに農業の楽しさや畜産女子の強みを考え、学ぶ時間がとても楽しく、参加してよかったと心の底から思えた研修でした。今回縁あってお声かけがあり、生徒ではなく、メンターとしてオーストラリア研修に参加させていただきました。

2. 畜産女子から畜産ティーンへ

当時私が参加した本プロジェクトは、「畜産女子育成プロジェクト」でした。ですが今では「畜産ティーン育成プロジェクト」になっており、男子も参加できるプロジェクトに変わっていました。

幼い頃から見ていた鹿児島の酪農業、酪農家さん。高校生になった私でもわかる「ザ・男」と思える仕事であり、上に立ち、畑のトラクター作業や力仕事をするのが男性で、それを支えながら家事と仕事を両立させるのが女性の印象しかありませんでした。高校に入り部活動や当番をしていくうちに畜産業に携わりたい！という女子の多さと積

極性にもう少し女子が働きやすい仕事にならないかな、と考えるようになりました。そんな矢先、畜産女子育成プロジェクトにて、全国に散らばった女子高校生の知識や私と同じく働きやすくないかなというような意見を聞き、やっと自分の意見を思いつき話せる場所、人がいる環境ができたことがとても嬉しかったです。ニュージーランド研修では、「女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）」をテーマとし、女性が畜産業をする上での障害をキーワードにたくさん考え、質問し情報を得ることができました。女性の障害となるものを考えた時、妊娠や子育て、力仕事に頭が浮かびました。その2点をメインに質問し、ニュージーランドと日本の女性労働環境を照らし合わせることで、私なりの女性の活躍できる畜産のイメージに近づけることができました。

3. オーストラリア研修

6月に行われた事前研修で、生徒20人の話を聞く中で、やはりオーストラリアということもあり、肉牛に詳しい高校生や、アニマルウェルフェアや放牧に興味をもつ高校生が多かったです。アニマルウェルフェアについては今世間から特に注目を浴びています。ですが、実際に経営をするにあたりアニマルウェルフェアについてまだまだ普及していないのが現状です。実際にオーストラリアに着き、放牧や施設を見て感じた生徒たちの意見はどれも「放牧＝アニマルウェルフェア」「広い土地、のんびりした牛＝アニマルウェルフェア」ばかりで、舎飼いである日本のアニマルウェルフェアはあまり想像できないようでした。日本はオーストラリアと違い、舎飼いが基本的で、地域によっては放牧も行っている農家もありますが、件数は多くありません。また日本

は北から南まで、気温の変化が大きいので、その地域と気候にあった経営を行わなければなりません。一方オーストラリアではあまり大きな気温の変化はなく、土地が広いので、放牧を常に行える状態にあります。



只埜君と私

ただ、気候の違いから飼育されている牛の品種が違いました。またオーストラリアの農家さんは「アニマルウェルフェアは当たり前」でした。放牧により、足腰の強さや穀物給餌の少なさから体への負担が少なく、日本よりも平均寿命が長いため、より日本のアニマルウェルフェアへの配慮が生徒には小さく見えていたのだろろと感じました。ですが、視察やグループ活動をする中で、一つ一つ探していくと当たり前だと思っていた日本の飼育管理の中にもアニマルウェルフェアがあることに気付いてきた生徒も見えました。水資源の豊かさから、常に綺麗な水が飲め、放牧に比べると数も多くウォーターカップが設置できていること。牛床や通路にもゴムマットが敷かれたり、敷料を十分に使えたりすることで足への負担が考えられていること。細霧装置や屋根上スプリンクラー等の暑熱対策などが行われていること。などといった日本には日本の経営スタイルとアニマルウェルフェアがあることを生徒と共に再確認することができました。

また、アニマルウェルフェア以外にも「休みがない」「男社会」「3K（きつい・汚い・稼げない）」「耕作放棄地」などたくさんの意見が出てきました。ですが、オーストラリアでは、10日くらいは家を空けても大丈夫という農家さんや女性の多い牧場、家族で分担し、経営を行っている傍らマーケットも持つ農家さん、6次産業化で成功している牧場など、日本のイメージとは違い誇りを持って農業をしている農家さんたちに生徒からは質問が絶えず出ていました。今回の報告発表のテーマが抽象的であり頭を抱える生徒が多くみられましたが、今回この研修を共にしたメンター只埜さんと話し合いが円滑に進むよう協力しながら進められたのかなと感じました。肉牛とオーストラリア研修の知識を持つ只埜さんと、酪農とこのプロジェクトの参加者である私で情報交換をしつつ生徒と接する時間はとても充実していたと思います。

4. 研修を通して

このプロジェクトでみんなと同じように研修をしていた私が、まさかメンターの立場となり、みんなに酪農を教える、話し合えることがとても嬉しかったです。私自身まだまだ経験も勉強も不足してはいますが、それでもたくさん話しかけてくれたり、質問してくれたり、時には頼ってくれ、みんなと歳があまり離れてないだけあって、「あおいちゃん！」と呼んでくれ、私が高校生の時にこのプロジェクト時にたてた「楽農

を広めること」に繋がっているなど実感できた時間になりました。今でも①楽農を広めること②子供達に酪農の魅力、楽しさを知ってもらいたい。の

目標は変わっていません。またそれと同時に少しずつ増えてきている女性農業者をもっと増やしたいなと思っています。

ニュージーランド研修後に、農家の方々と話し合う機会があり、畜産業に女性はどのくらい必要だと考えていますか。という質問をしたことがあります。農家さんからは、女性がいる牧場とない牧場では全く違うと断言するほど。牛も穏やかになり、女性は変化に気づくのが早いので牛の体調の変化にも早く気づき、さらに男性陣ができない細かな仕事までできる。これからは機械化が進むだろうけど、実際に自分たちの目で見て判断しなければならないから女性の力は必要になるよ。と答えていただきました。昔よりも女性が多く働いている環境ができているのは畜産業にも男社会のイメージが少しずつ減ってきて女性が働きやすい環境が出来てきているのではないかと思います。今回のプロジェクトも半分以上が女子高校生であり、畜産の職業に就きたい子たちばかりで、みんなの夢がこのプロジェクトを通して叶うといいなと心の底から思いました。みんなの夢を応援すると同時にまだまだ私自身未熟なのでみんなに負けにくいくらい頑張らないといけないな！と思いました。



おそろいの帽子





引率教員
熊本県立熊本農業高等学校
教諭
吉永 憲生

1. はじめに

我が国の畜産業は後継者不足や従事者の高齢化により厳しい状況に直面しています。その問題解決の一助として平成30年度から開始された本プロジェクト事業は、国内で行われる事前研修や海外での現地研修で得た知識や経験を基に畜産の素晴らしさや魅力を発信する「畜産アンバサダー」として多くの人材を輩出してきました。

今年度、その引率の一人として令和6年(2024年)8月3日(土)から8月14日(水)までの12日間、全国から集まった高校生20名とともにオーストラリア連邦クイーンズランド州にて実施された研修に参加させていただく機会を得ました。

その研修成果と参加した高校生の変容における考察を中心に報告します。

2. 研修の概要

全国から多くの応募者があり、その中から選考された生徒20名は、高校入学後に畜産を学び始めた生徒が大半でした。また、学年も3年生14人、2年生6人であり、さらに参加生徒が在籍している各高校の農場規模や飼育している畜種も様々で、スタートラインが異なる生徒たちが現地研修までの短期間で知識や研修に臨む意欲をどこまで高めていけるのか少々不安であったことを覚えています。ここでは、6月10日(月)から6月14日(金)までの5日間行われた渡航前事前研修内容の詳細については割愛しますが、全ての研修においてキーワードが示され、進行や発表者などグループ内の役割を輪番で担当しながら能動的な研修会が実施されました。

8月3日(土)から14日(水)までの現地研修では、有機酪農で生産した生乳を加工し販売される六次化経営や土地(放牧地)を有効に活用され労働力は主人1人で賄われている肉牛繁殖農家、また養牛からアボガドなど多品目を飼育栽培し、生産物を自らが経営する直売所で販売されている経営など多種多様な生産現場や加工施設で現地の畜産を学ぶことができました。さらに、滞在す

る地域に位置したマランダ高校へ訪問し、畜産を学ぶ同世代の生徒との農業実習や意見交換、そしてその高校で畜産を担当されている教師から直接畜産の授業を学ぶ機会も設定されていました。

なお、未来の畜産アンバサダーとして参加している20名の高校生は4班に分かれ①畜産でアイデアを生かしたい②若者が描く未来の畜産③誰もが喜ぶ畜産業④私が働きたい畜産農家、以上①～④のテーマを各班に振り分け海外研修期間中に研修先で質問したり、自分たちで考えたアイデアを中間報告会で発表することになっており、1日の予定された研修を終え宿舎に帰るとその日の研修内容をまとめ、各班のテーマに沿ったプレゼン資料作りに励んでいました。

3. 研修を終えた生徒の変容

本研修に引率という立場で参加させていただくにあたり、参加する高校生が次世代の畜産を支える人材へと成長を遂げる過程を追っていくことで、本研修の効果や生徒たちが畜産アンバサダーとして発信したい思いを掴めるのではないかと考えました。そこで、渡航前後に「あなたが考える畜産の魅力とは何ですか。」という質問に対して文章で回答してもらい、その内容をAIテキストマイニングを用いて解析しました。

なお、単語出現頻度が高い語句はその値に応じた大きさで図示されています。また、単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表しています。

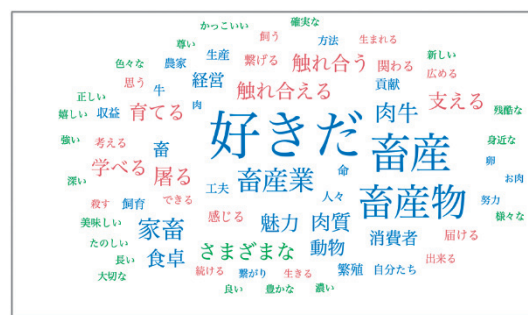


図1 海外研修前の意識調査結果

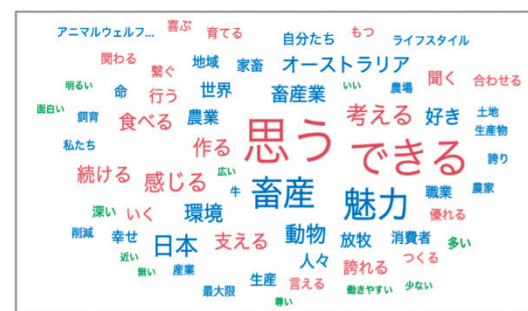


図2 海外研修後の意識調査結果

(1) 将来の畜産を支える人材としての意欲向上
海外研修後の意識調査結果(図2)では、データの中央に大きく「思う」「できる」があり、「考える」「感じる」「作る」など数多くの動詞が目につきました。研修前のデータは色合いが青色だったのに対して、研修後のデータは動詞の色である赤色が多く出現しています。この名詞から動詞へ変化は、高校生の行動が一歩前へ動き出し、自身の畜産アンバサダーとして発信したい思いが具体化した様に感じられました。

(2) 国際感覚の醸成

研修後のデータには研修前にはなかった「日本」「オーストラリア」という言葉が挙がっていた。特に「日本」という言葉は大きく記されており、我が国の畜産から世界に目を向けて畜産業を考える力が身に付いたと思われます。また、オーストラリアでは広大な土地を活用した放牧体系が主流であり、牛一頭一頭の飼育面積は日本と比較にならないものでした。このように、海外の畜産に触れることで様々な飼育形態やそれに伴う考え方を理解し、国際感覚を養うことができたのは今後の畜産を担う若者にとって非常に大切なことだと考えます。

(3) 将来について考える機会に

また、研修前のデータにはなく研修後の文章には「ライフスタイル」「幸せ」という語句が記されており、「こんな未来がいいな」「こんなことをやりたいんだ」など畜産との関わり、そして自らの生き方に考えが及んだことが窺えました。

(3) より多くの「魅力」を発見

もともと農業高校で畜産を学んでおり、畜産が大好きな生徒たちであるため研修前のデータに「続ける」「魅力」「できる」というワードが挙がっていた。しかし、研修後のデータでは、それらの語句がより大きな文字へ変化しており、本研修で多くの畜産の魅力に気付き、そして発信し続けることでより多くの理解者を増やしたいという思いが強く伝わってくるものでした。

ここで、ある生徒が書いた文章を紹介します。

研修前の文章では、「牛などの家畜は、生きている間に牛乳やバターなどの乳製品や卵を提供してくれるところや、家畜のかわいさに魅力を感じ、と畜された後は、肉や肉加工品など、生まれてからと畜されるま

で人を幸せにしてくれているところが魅力に感じる。」と書いてくれました。その生徒の研修後の文章を見ると「オーストラリアでは、牛が好き、楽しいと思っている人が畜産業として働いているところがとても魅力に感じた。そういう人が作った質の高い畜産物を食べれている消費者も含め魅力に感じる。そういう生産者と消費者、その中心にいる家畜が共に幸せであることが畜産の魅力に感じる。」と記した内容が大きく変わったことが、本研修の意義を物語っていると思います。

4. さいごに

報告書を作成しながら短期間であったが、海外で濃密な時間を過ごした20人のメンバーやメンターとして参加された戸塚さん、只埜さん、そして本研修をコーディネートいただき、常に全体に目配り気配りいただいた(公社)国際農業者交流協会の皆戸さん、吉野さん、さらには同じ引率として渡航した群馬県立勢多農林高等学校の石井先生の顔が思い出されました。参加した高校生の姿から、少しでも多くのことを学び吸収し帰国する強い意志が伝わり、その姿勢を見る度にさすが全国から選ばれた高校生の集団だなと感じました。さらに、中間報告会に向け互いに意見を出し合いながらテーマに沿った発表資料を作り上げていく過程では、自らの思いを出し合い、時には意見が衝突する場面もありましたが、それを乗り越え堂々と発表し終えた態度は立派でした。20名の高校生は、国内で畜産アンバサダーとして未来の畜産業に対するアイデアを広げていく活動が続きますが、きっと多くの人に「畜産の魅力」を伝える伝道師として活躍するに違いないと確信します。

今回、特別振興資金助成事業として素晴らしい機会を提供いただいた日本中央競馬会の皆様、また、現地との遣り取りや事前準備、研修中のコーディネート等に尽力いただいた国際農業者交流協会の関係者に深く御礼申し上げます。





引率教員

群馬県立勢多農林高等学校
教諭
石井 樹一朗

1. はじめに

本校では、生徒へ多くの経験をさせたいという思いから、2018年から始まった未来の畜産女子育成プロジェクトへ生徒を送り出しています。コロナ禍で実施できない年もありましたが、畜産ティーン育成プロジェクトに形を変え、研修を終えた生徒が大きな経験を持ち帰ってくる姿を頼もしく思っていました。しかし、今年は本校生徒の応募がなく、引率者だけの応募をためらう気持ちもありましたが、研修を終えた生徒の様々な面で成長した姿を目の当たりにし、私自身の指導者としての経験値を高め、学校現場で活かしたいという思いから引率者として応募させていただきました。

今回のプロジェクトに参加させていただくにあたり、指導監督の立場ではありますが、私の中でのテーマとして、「日本の農業高校とオーストラリアの農業高校の違いについて」という課題を設定し研修に臨みました。

2. オンライン事前研修

6月10日(月)から14日(金)までの5日間にわたるオンライン事前研修では、緊張している中でブレイクアウトルームセッションが行われ、与えられたテーマに沿って、全員が自分の言葉で質問や意見がいえように、4グループでの話し合いが進められました。このオンライン事前研修が基礎となり、生徒が積極的に研修へ取り組む導入になったと感じています。また、今日の振り返りや明日の目標を立てることで、現地研修における日々のまとめがスムーズに行えたと思います。

3. 海外研修

(1) 渡航に向けて

オンラインでの交流はありましたが、実際に会うのは東京でのオリエンテーションが初めてということで、事前研修を振り返りながら自己紹介からのスタートとなりました。そして、挨拶も早々に、マランダ高

校で行う英語でのプレゼンに向けての準備が始まり、参加者全員が、これは旅行ではなく研修であるということを再認識しました。

(2) オーストラリア農場見学・施設見学

① Byrnes Quality Meats

オーストラリアに到着し3時間後、Byrnes Quality Meatsでの食肉加工の施設見学からスタートしました。こちらは、鶏・豚・牛等の精肉を扱っている地元で人気のお店です。ハムやソーセージも製造販売しており、ケータリングやレストランへ提供されているそうです。試食でいただきましたが、種類も豊富でとてもおいしかったです。生産流通について話を伺うと、豚の出荷は日本と比較して遅く、その理由は、放牧飼育であるのと濃厚飼料を与えていないため成長が遅いとのことで、日本との生産形態の違いを知ることができました。

② Mungalli Creek Dairy

こちらはバイオダイナミック農法による有機酪農を行い、その牛乳を使用した乳加工製品を販売する6次産業化された牧場です。私も高校で有機栽培と6次産業化を行っており、とても興味がある見学先でした。当日は雨が降っていたため、視界も悪く飼育しているジャージー種を確認することができませんでしたが、飼育方法から乳加工されるまでの手順を施設見学も含め行っていました。400頭ほど飼育しているということで、飼養衛生管理について伺ったところ、驚くことに今まで病気になった牛はいないとのことで、最も深掘りしたい見学先でした。

③ Mareeba Sale yards

オーストラリア家畜市場協会により運営されているセリ市場を見学しました。日本でも市場を見学する機会は少ないですが、そこにはこれぞオーストラリアという光景がありました。まず、セリを行う職員もセリに参加する買い主も「カウボーイハット」と「ジーンズ」というスタイルであったということ。また、セリが成立した牛を馬で誘導する光景は、機械化が進む現代においてとても衝撃的でした。

④ Eachamvale Stud/ Dairy

家族経営で240頭の搾乳牛を放牧飼育し

ている牧場を見学しました。朝夕の搾乳で1日約5500kgの生乳を町のミルク工場へ出荷しています。4種類の牛を放牧飼育し、搾乳時のみ施設内で綿実を与えているそうです。生徒は搾乳体験をさせていただき、牛たちが列をなして搾乳待ちをしている様子は圧巻でした。

⑤ Jonsson's Farming

宿舍からバスで2時間程移動した奥地に位置し、広大な農地を有する農場を見学しました。この農場は乾燥地帯で植生も異なり、道中に蟻塚が無数にあったのが印象的でした。雨が少ない時期は餌となる植物が減るため、牛の数を減らすそうです。年間1800頭を出荷していますが、肉牛は放牧で手がかからず、複合農業でアボカドの栽培を行っていました。広大な農場を囲うフェンスの確認はヘリコプターで行うなど、スケールの違いに驚くばかりでした。

また、子供達は学校が遠いため、オンラインで授業を受けており、そのサポートとして先生が自宅で支援を行っていました。このような手厚い教育制度は素晴らしいと思いました。

(3) Malanda State High School

① School Program

マランダ高校で畜産を教えるDavid先生の授業に参加させていただき、農業を学ぶオーストラリアの高校生と2日間に渡り交流を行いました。授業内容は、学校内にある畜産施設を使用し、実習を中心とした生徒が興味を持って取り組める内容でした。鶏舎での採卵・給餌、牛の体重測定からエコーを使用した妊娠鑑定や除角、また獣医師の指導のもと希望する生徒は直腸検査も行いました。放牧場所では電柵に直に触れさせ、電流の強さを体験させるなど、遊び要素も取り入れながら、生徒を飽きさせない実習内容でした。

昼食時もマランダ高校生と共にし、午後にはアフタヌーンティーが用意され、身振り手振りでコミュニケーションを取っていました。また生徒同士はインスタグラムを交換しあい、画像を通じてコミュニケーションを広げている姿は今の時代を感じる場面でした。

②日本の農業高校とオーストラリアの農業高校の違いについて



オーストラリアの広大な土地で学ぶ農業高校と小さな島国で気候風土も違う日本の農業教育に違いがあるのか？言葉の壁はありましたが、学校の状況や疑問に思うことなどをDavid先生に質問をしました。

Q：生産する上で運営費や売上はどうしているか？

A：運営する上での予算は政府へ請求を行い、売上は学校で使うことができる。機械の修理費用は学校が支出してくれる。

Q：授業での教材費を生徒から徴収することはあるか？

A：各授業で徴収することはある。マッシュルームを栽培する際に1人10ドル徴収した。

Q：農業教員は何人いますか？

A：David先生の他に実習担当が3名おり、休日の管理も他2名が対応している。

Q：実習で生徒に怪我や事故が起こったことはありますか？

A：事故は起きたことはない。牛に蹴られないように注意をしている。

マランダ高校は公立の学校で、農業が学べる学校は都市部にはなく田舎に多いそうです。その為、転勤も少なく生徒と共に育てた家畜を品評会へ出すなど、部活動に取り組むことができるとのことでした。実習時の服装は、登下校時のスクールジャージ(短パン)であったので、日本では実習着があることを伝えると、部活動では長袖・ジ-

パンのユニフォームがあるとのことでした。安全に実習ができるように注意喚起は行っているそうです。

David 先生が授業で大切にしていることは、生徒に興味を持ってもらうために経験させること。全員にチャンスを与え、失敗してもよいので取り組ませることを一貫して行っているそうです。質問の回答や実習する様子から、国は違えど教育の根底は同じであることがわかりました。日本でも、主体的で深い学びを実践し、技術を習得していく内容は共通していると感じました。

4. 研修成果報告会

帰国後、オーストラリアでの感動体験の余韻に浸る間もなく、4 班に分かれて発表準備に取りかかりました。「日本の畜産をもっと元気に」をメインテーマに、「若者が描く未来の畜産」、「畜産でアイデアを生かしたい」、「私が働きたい畜産農家」、「誰もが喜ぶ畜産業」の4つのテーマで話し合いが進められました。とにかく研修での情報量が多く、まずは、各自の考えを伝え、テーマに沿った考えをまとめ、アイデアを捻出する作業は大変でした。2 日間にわたる発表準備の成果は、各班の思いが詰まったとても素晴らしい内容となりました。事前学習、多くの体験、その学びからの考察と濃縮された深い学びがあふれ出ていました。

5. 終わりに

12 日間の研修を終え、参加者全員が体調を崩すことなく、無事に研修を終えることができ安堵しています。私たちの研修は、6 月にオンラインで行われた事前研修からスタートし、4 グループに分かれ、テーマについて話し合う、まさに訓練といった様相でした。しかし、畜産に対する志を高く持つ生徒達は、私たちの高い要望にも対応し、カリキュラムを進めました。

オーストラリアでは、見学先として、家族経営での乳牛飼育、有機飼育での6次産業、想像を超える面積の肉牛農家、また、食肉加工現場、直売所といった畜産に関する業態をすべて見学することができました。さらにファームステイによるオーストラリア文化に触れ、そして英語の学びと、これ以上ないという学習スケジュールであったと思います。研修先では、生徒からの質問が途切れないため、研修時間が長引き、予定がオーバーしてしまいました。各研修で

の情報量が多く、頭を整理する時間がなかったという声も聞かれましたが、日誌にて日々の研修を整理し、各班で発表に向けての情報共有を行いました。このように、研修の意義を理解し、生徒達がたくましく成長している姿を目の当たりにし、この研修で得られる経験値は計り知れないと思いました。

現在、高校教育では2022年より探求学習が行われています。探求学習とは、課題設定を行い、自分なりに問いを立て、情報を集めて分析する。そして、まとめた内容を発表する一連の流れを言います。今回の研修では、まさに、短期集中型の探求学習と言えます。また、産業界が求める人材として、「主体性」「実行力」「課題解決能力」があげられますが、今回の研修による成果として、生徒達はすべてを満たしていると感じました。オーストラリア研修も終わり、このプロジェクトの目的である、将来の農業リーダーは着実に力をつけていると感じています。

生徒達は、これから畜産アンバサダーとしてそれぞれの地域で活動を行います。今回の研修内容から生徒自身の考えや思いを伝え、様々な方法で繋げてくれると信じております。私自身も教員アンバサダーとしての役割があると感じています。それは、生徒を送り出す教員に対して、この研修の目的や意義を広めていくことです。この取り組みもぜひ繋げていきたいと思ひます。

最後に、この助成支援をしていただいた、日本中央競馬会様、事業運営をされた国際農業者交流協会のみなさまには、生徒、引率教員のチャンスを与えていただきありがとうございました。感謝の言葉しかありません。この研修が毎年実施でき、畜産アンバサダーが全国に広がっていくことを願っております。



7 未来の畜産業に対するアイデア

北海道岩見沢農業高等学校 田澤 未季



畜産業が身近ではない

- 近くで経営していない
- ・情報が届きにくい
- ・マイナス(大変、忙がいなど)の情報が多く報道される

・一般の家で牛や鶏を飼育している

・放牧地が近いので家畜が近くにいる

・高校で畜産を選択できる

★ 日本は自分で調べないと飼育方法や餌、どんな暮らしをしているか分からない

→ 消費者に情報が直で届く畜産業を目指す!



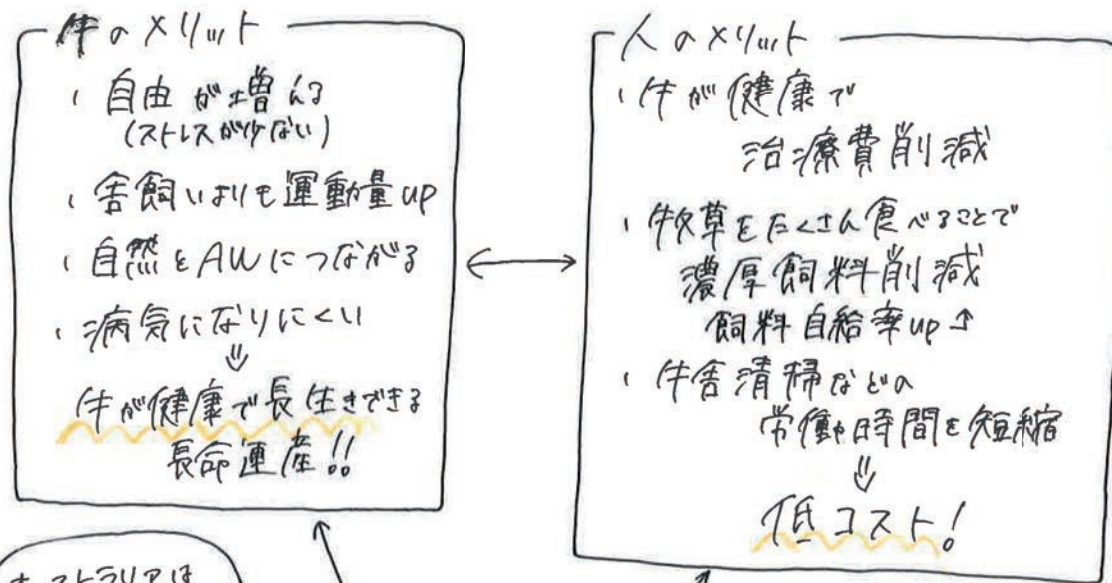
多田 有輝

Australia とはいは...

放牧!!



～放牧の魅力～



でも日本での放牧の割合は少ない...

面積が少ない、乳量が減ってしまうなどの理由が考えられる。

だけど、牛は山や耕作放棄地でも放牧できる

オーストラリアでは傾斜が急な場所でも放牧をしていた!

乳量が少なくて、低コストを実現することで、利益はでる!

“日本でも放牧は実現可能”

若い世代に

畜産を広める!

Australia



・小学校からの農業の授業

→ 幼い頃から畜産にふれている

・消費者の畜産物に対するこだわりが強い

→ アニマルウェルフェアが徹底された飼育方法がいい

→ ローカルのものでなければ購入しない

など

家庭で畜産物の選び方や飼育方法などが話題になる

オーストラリアでは若い世代が畜産に興味を持っているのでは?

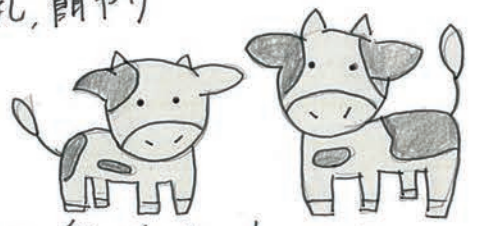
では日本では何かできる?

・小中学生の農業体験

→ 農業高校や大学などで牛舎等の見学や搾乳、餌やり

・グリーンツーリズムの普及

→ 家族での農業体験など



畜産を身近なものへ

畜産に興味を持つ人増加
担い手確保&畜産の発展!!

久慈 渚紗

牛と人・生物と環境の共存

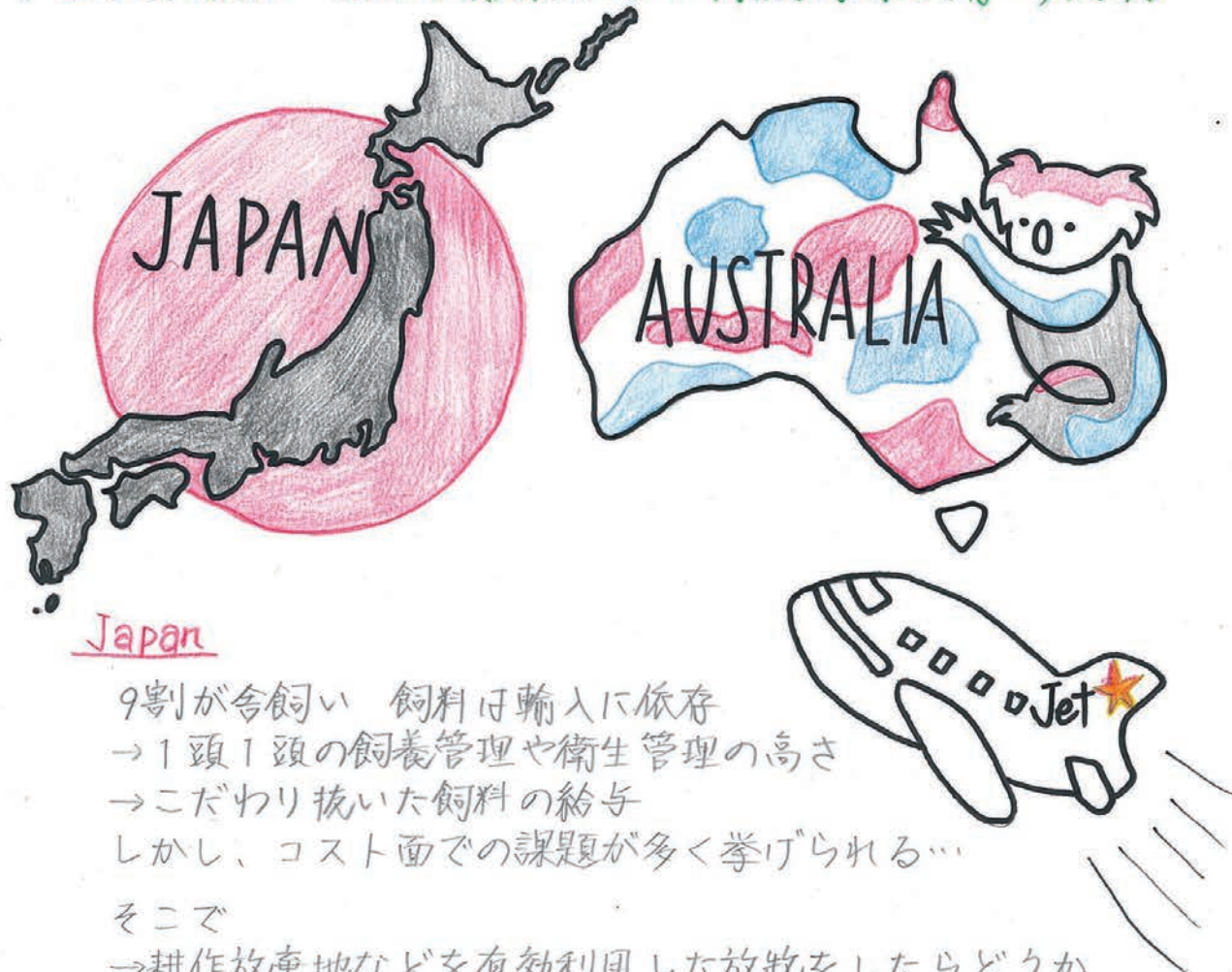
宮城県農業高校 星 碧虎

Australia

世界規模のオーグーゾーフ

- 広大な面積を有効利用した放牧 (AW)
- 飼料などのコスト削減・牛は自由な生活を送れる
- 環境に配慮した持続可能な畜産経営 (オーガニック等)

牛と人がWIN-WINの関係になり持続的な共存の実現



Japan

- 9割が舎飼い 飼料は輸入に依存
- 1頭1頭の飼養管理や衛生管理の高さ
- こだわり抜いた飼料の給与
- しかし、コスト面での課題が多く挙げられる...

そこで

- 耕作放棄地などを有効利用した放牧をしたらどうか
- コストの削減やAWに繋がる可能性 大
- 自家飼料や持続可能な畜産にも注目する

コストの削減+付加価値=新たな収入源に!

日本だからできる、

日本でしかできない畜産経営に挑戦

日本の畜産を
より良くするには!!オーストラリアでは生産者と
消費者の距離が近い!

↓

消費者の求めているものが生産者に
伝わり、生産者は消費者のニーズに合
わせて生産し、儲けに繋がる!

互いに利益がある関係!!

日本でもこの繋がりを作ることができれば、
国産の畜産物が流通し、
食料自給率も向上する!



日本がもっと食で豊かな国になる!

高橋 智星

オーストラリア 研修

岡崎 彩女

~ in Queensland ~

日本とオーストラリアを比べて...

消費者意識 & アニマルウェルフェア

の大きな違いを発見!!

日本の改善点!



- ② 子供の頃から家畜動物と触れ合う機会が多い。
・「地元の畜産業を応援したい」という思いから、付加価値のついた高い商品を購入する人が多い。
- ③ 生産性をあまり重視せず、家族が各々の好きな品種を飼育。牛をペットのように、楽しそうに育てる。



- ② 子供の触れ合い体験の実施を増やす
→ 畜産業に興味を持ってくれる!
・生産者の「物語」を伝える
→ 生産現場の可視化
- ③ 生産者自身のウェルビーイングにつなげることを伝える
→ セリがいい、生きがい、牛への愛情を感じれる
消費者にもより質の良い畜産物を届けられる



<牛も人も **幸せ** な畜産業へ!!>

Mao Hasegawa.

8/3 ~ 8/14

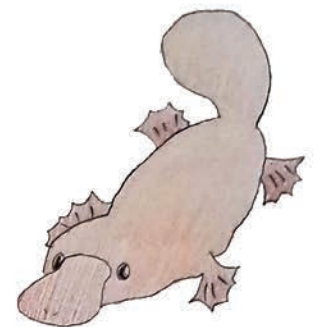
< 私達が描く未来の畜産 >

< 私が望む未来 >

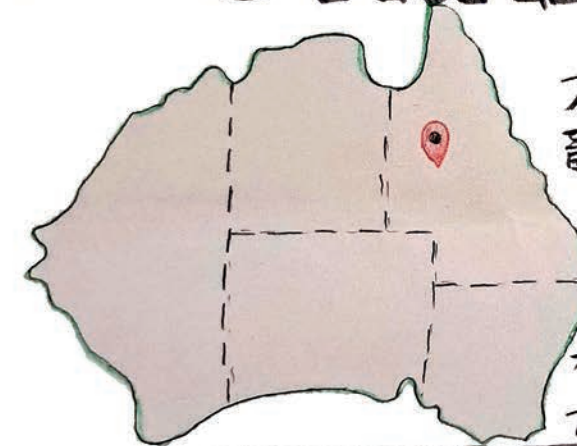
働き手が増えて更に活発になる畜産

イメージアップ

AUSTRALIA

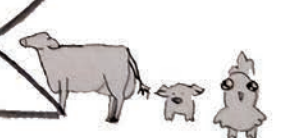


から学べた事



アニマルウェルフェアを実施
畜産に対する意識が高い
マランバ高校では小学生から一般的な農業を勉強できる
オーガニックや土地を活かした放牧etc... 付加価値となる世界の食を支える誇りのある畜産

日本の畜産をより良くしたい



[きつikitない稼げないのイメージを減らす]

生産者は「かり知ってもらおうとする努力をするのではなく、消費者も知ろうとする姿勢が大切」⇒義務教育に農業を積極的に取り入れてみたらどうか、
⇒畜産物の背景を過程を知れて理解を広げられる

健康的でストレスフリーな畜産

オーストラリアでは... **放牧** が当たり前

健康的

自由

広大

牛乳 牛肉

の

質も良くなる

ストレス

アニマルウェルフェア

労働者の負担軽減
エサ代の削減が可能になる

ストレスフリーのためにオーストラリアでは

- 子牛が遊ぶようボールを設置 (酪農家さん)
- と畜前に、エサ・水を与える
- 競りの時は、牛を繋がない

同じ牧場から来た牛は、同じスペースに入れられる

日本でも取り入れて、ストレスを減らす

牛が **幸せ** で、

ストレスフリーな飼育方法

でも **お金** がかかる

質の向上にもつながる

消費者に取り組みを伝えて **国産** の畜産物を買ってもらうことで、多くの場所で **ストレスフリー** な飼育ができるようにする。

早期後継

発展へ

個体ごとに合わせた精密な管理技術

経営技術

近隣農家との交流

熱意の豊

販売先や消費者への信頼

Au では早いうちから後継者が経営に参加することで、ステップアップに繋がっていました

Ja でも早期から共同経営を行うことで新規就農者のカバとなる技術不足や経営力不足を防ぐことができています

加えて...

早くから後継者が経営を安定させ自立できるようになれば、AIやICTを活用した新技術を導入可能になり、畜産業の発展につながります



橘内 晟

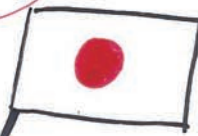
オーストラリアの畜産

日本とは畜産に対する
考え方が全然違う!!



オーストラリアは
畜産は大切な職

日本だと...
3Kのイメージ
が強い



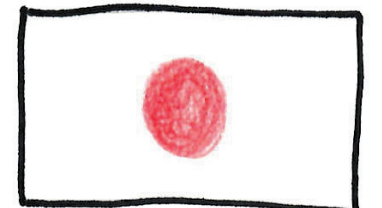
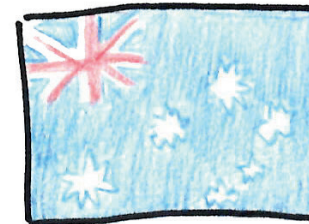
畜産のイメージアップをしよう!!

SNS を駆使して魅力を発信

日本の畜産業を豊かに!!

オーストラリアと日本

アニマルウェルフェア



・生産者も消費者もAWについて
強い関心と知識を持っている。
・消費者がAWを取り入れた乳製
品を喜んで買う。
・生産者にとって利益になる。

・少しづつAWの考えが広まって
きている。
・AWのことを知らない人も多
い。
・生産者もAWを取り入れても利
益にならないなら取り入れない。

私が考えた
アイデア



熊倉 花

岐阜農林高校
福田 愛

人も牛も

幸せな畜産に



オーストラリアでは...

放牧で自由に
AWで健康の維持
×
ライフバランスの両立
人々を支える
畜産業としての誇り

人も牛も幸せに過ごせる

これから日本で実現するために...

気候やライフワークに
あった畜産

スマート農業・中山間地域の
利用 酪農団地



人にも牛にも寄り添った畜産で

畜産の幸せと発展に!

私の考える未来の畜産

○畜産に身近な生活
→消費者の畜産に対する意識(高)
=オーガニックなどのこだわり商品の需要↑
★生産者と消費者の
つながりが強い!

○あまり畜産について知らない...
→口にする畜産物に対する意識(低)
=こだわり商品の魅力が伝わらない。
→需要↓
★生産者と消費者の互いの
声に分かりにくい。

AUST
RALIA

JAPAN
かい ゆ す
甲斐 柚花



案 (in Japan)

「ちく Chat」



★生産者と消費者のつながりのかけ橋になるようなサービス!

○生産者: こんな畜産, こんな商品はどう? (常) ⇒ 消費者に反応を呼ぶかける。
ウチはここにこだわっています! (今) ⇒ 写真・動画 OK?

○消費者: こんな商品, 畜産があったらイネ!! (常) ⇒ 生産者に呼ぶかける。

★互いの夢や現状, 要求について, イネやコメントで反応, 意見を示す。

⇒ 生産者と消費者の つながり = 畜産での 双方の役割 が生まれる!

消費者: 需要・アイデア, 意見の供給
生産者: 需要に応えるものを生産する

⇒ 「みんな」でつくる畜産へ!

★この水からの農業は、
生産者だけでなく、消費者も
協力し、共に生産物をつくり
あげていこう!

×私がつくった
私たちがつくった
(Made By Us)

畜産で Enjoy!!

畜産の楽しさ・面白さに触れてもらいたい 嶋本 珠琴

それには **農業体験** が有効的!
観光牧場 や ファームステイ など で 家畜の世話を体験する



牛乳や肉・卵を買う時には
「安価だから」だけでなく「〇〇農場だから」などと
消費者オリジナルの こだわり を大事にしてもらいたい!
⇒消費者ニーズにより、ブランド化が高まりよりよいものが流通していく!!

生産者にも 楽しみ が?
色々な育て方を試行錯誤できる。
努力して作ったものが売れる楽しみ。
やりがい や 責任感 も

私が目指している畜産業
アニマルウェルフェアや持続可能な飼育をすること!
オーストラリアでは 日本 では
ほとんどが 家族飼 いで 舎飼 いが多く付加価値の
その消費者ニーズが充分 お肉 には 安心 なものを
購入する人が 多い

耕作放棄地を放牧地に

白土 陽麻

私の住む広島県の 世羅町 でも
耕作放棄地の問題があります。

そこで、耕作放棄地を放牧地にすることを
考えました。



〇耕作放棄地を放牧地にと起る良い事

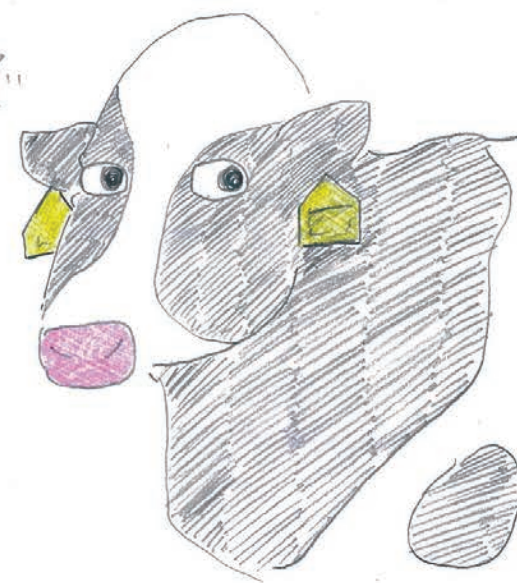
- ・今よりも畜産が 活発 になる。
- ・子どもや大人が畜産に関わる 機会 が増える。

あいた土地を有効に活用することで
町の活性化にもつながる!



あいた土地を

活用すれば、
牛も人も 笑顔 に!



畜産業の魅力をたくさんの方に！ 佐熊 安莉

日本の課題

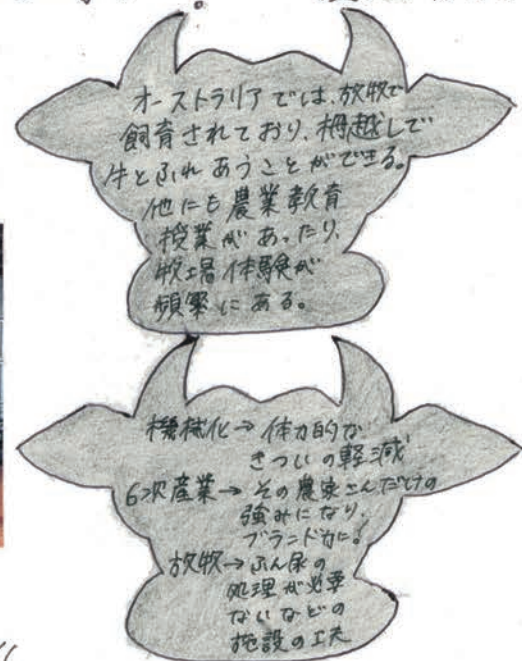
- ・畜産業が身近ではない！
- ・3K意識がある！



畜産業を正しく知ってもらうことが解決の近道では？



オーストラリアでは、機械化が進み小学生でも、機械にふれる機会がある！！



★ オンライン活用！

他県の畜産農家さんと繋がりながら、畜産農家さん体験を実施する。県内の中高生に募集をかけて、一週間の体験を行う。

1日目

オリエンテーション

2日目

実際に体験開始

～5日目

えさ作り
ふん尿処理

6日目

5日間の学びをまとめて、プレゼンテーション準備

7日目

他県で畜産農家さん体験を行った人々とオンラインで繋がり、発表会を行い、畜産仲間を増やす！！

→ このアイデアで、畜産業に若者を増やす。

↓ 畜産業への理解者を増やす。

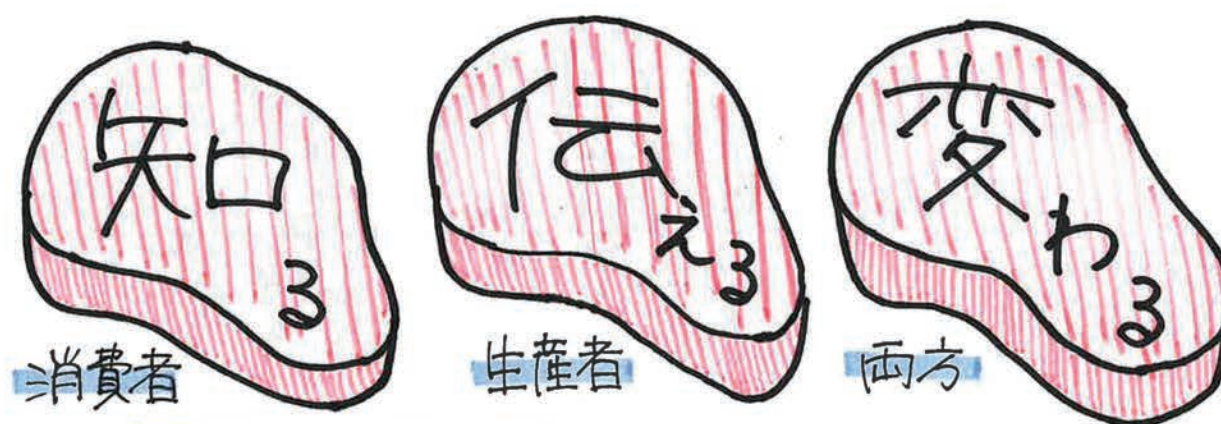
国産の畜産物（農産物）に興味を持ってもらうことができ、畜産農家がやりがいを持ってチャレンジできる環境に！！

目的

- ・畜産業を身近に！！
- ・畜産業の技術を見て、実践してもらうことで新3K（カッコいい、感動する、稼げる）を目指す。



畜産ティーン育成プロジェクト 若者が描く未来の畜産



畜産業がどんなものか生産者が伝えるだけでなく消費者も畜産に興味、関心を持つことが大切。両方が「変わろう、変えてみよう」とする意識が生まれることで畜産業は良いものになると思う。

Q 消費者が畜産に関わるためには？

1. 放牧やふれあい牧場を行い畜産を身近に
2. SNSの活用やTV放送で面白い話題を取り上げる
3. 学校などで畜産の授業の導入

↓ しかし...

新規就農者や学生である若者の私たちだけの力では実現できる範囲が狭い！

→ 消費者や先輩農家たちの力が必要。

畜産業はなくなっていく大切な仕事であって半永久的に持続可能な畜産業を創り上げよう！！

長崎県立諫早農業高等学校 宮田 風沙

AUSTRALIA

AUは

消費者の意識が高い

アニマルウェルフェア
オーガニック

ラクト-スプリ-ミルク
A2ミルク

国産

「需要があるので商品の種類が豊富」

豪州政府の取り組み

⇒国産マーク表示の義務

「消費者の意識(高)」



生産者が需要に合わせて
生産・供給



消費者は商品を選ぶ!

生産者はより良いものを

生産できる!

消費者 生産者

皆で
家畜 環境

畜産を

「良くしたい!

田中 優羽

私の目指す畜産

効率的な作業

牛愛牛尽



哺乳ロボットや機械の導入!



人が手作業でしなくても良い作業は
機械にたよる!!

地域畜産業の活性化

畜産共進会や品評会に積極的に出品!



地域の人と協力することで、
地域全体が盛り上がる!



オーストラリアで学んだ、
畜産をする上で大切なこと!

「アニマルウェルフェア」や
「カウコンフォート」を大切に!

本プロジェクトでの全ての経験を大切に、
畜産王国、宮崎県を代表する和牛繁殖農家へ!

これからの日本の畜産業

～理想～

生産者と消費者がWin-Winな関係

～アイデア～

①親子で畜産業を身近に感じてもらう機会作り

②畜産教育の導入

①親子で畜産業を身近に感じてもらう機会作り

・消費者(親子)で生産現場に実際に行く

家畜動物との触れ合い
・給餌体験・搾乳体験
・ミルク哺乳体験

生産者の声
・生産物に対する思い
・畜産業に対する熱
・畜産業の現状を知る

畜産業の魅力や楽しさを肌で感じることができ、
生産者のリアルな声を聞くことができる。

②畜産教育の導入

小学生～中高生向けに畜産業が日本になくはならない産業ということ、畜産業があることが当たり前ではないということを知ってもらう。

この2つを行うことで...

日本国内の消費者意識向上アップ↑

生産者が生産した畜産物を消費者が積極的に購入
→地産地消・食料自給率アップにも繋がる

最後に...

長い歴史の中で先人達が継承してきた畜産業を今よりも
よりよい産業にしていきたいと思います。

◆プログラムコーディネート

Banora International Group
Ms. Janine Bowmaker, Mr. Michael Bowmaker

Ms. Lenore Wyatt (Deputy Mayor)

◆お世話になった宿泊施設

QuinolaLakes
Mr. Peter Polley, Ms. Sharon Polly
Ms. Christine Walmsley

◆受入学校

Malanda State High School
Ms. Natasha Lyndon, Mr. Ben Harding,
Mr. David Kilpatrick

◆農業視察

① Byrnes Quality Meats

Mr. Andrew McIntosh
食肉加工施設を備えた販売所で、カンガルー、クロコダイル、ウサギなど日本では珍しい食肉も数多く扱うケアンズ内の小売肉屋

② Mungalli Creek Dairy

Mr. Rob Watson, Ms. Michelle Watson,
Mr. Dan Watson
バイオダイナミック農法により酪農を行う農家

③ Platypus Creek

Mr. Dave Anderson
200 エーカーにもわたる大規模繁殖農家

④ Mareeba Saleyards

Ms. Tanya Martin, Mr. Russell
オーストラリア畜産市場協会によって運営管理されている75年以上の歴史を持つ北クイーンズランド州の肉牛せり市場

⑤ Eachamvale Stud / Dairy

Ms. Bronwyn English, Mr. Greg English
67ヘクタールの土地で約200頭以上の乳牛を飼育する家族経営の酪農家

⑥ Jonsson's Farm

Mr. Warren Jonsson, Ms. Gail Jonsson
Mr. Bradley Jonsson, Mr. Dean Jonsson,
Mr. Luke Jonsson
64,000エーカーの規模で4000頭の肉牛の飼育とアボカドや大豆等の野菜を栽培している
4世代に渡り生産から販売までを一貫している大規模農家

⑦ Bega Milk Factory

Ms. Emma Hughes
オーストラリアをけん引する乳製品会社

◆通訳

深津あけみさん
ケアンズ在住の英語・日本語通訳

日本中央競馬会 令和6年度 畜産振興事業
畜産ティーン育成プロジェクト事業報告書

発行 令和7年3月
発行者 公益社団法人 国際農業者交流協会
住所 東京都大田区西蒲田5丁目27番14号
日研アラインビル8階
電話 03-5703-0252
E-mail mirai@jaec.org
URL https://www.jaec.org/
校正・デザイン Ami Muraguchi
印刷 株式会社 エーヴィスシステムズ

